

1 川漁師

繁雄が神立橋から小倉川を覗くと、群れとなって大石を食むアユの群れが目に入った。川から吹き上がってくる風には、アユやその他の魚たち、ホタルの幼虫、カゲロウなどの香りが感じられ、それを受け取る人の心を豊かにする、と繁雄は信じていた。小倉川の源流部は手つかずの原生林となっており、その清らかな水質によって、小倉川のアユはどこにも負けないほど美味だった。

川に沿って県道が走っていた。その県道から山側に少し入ったところに、小倉川にかかる神立橋があり、そこからさらに左岸に沿って百メートルほど下った低地に、向井繁雄の家があった。父の英明は川漁師であり、夏に遡上するアユや溪流のイワナやヤマメを捕っていた。捕れた魚を料理する小屋を営業しており、アユの友釣りのためにオトリを売ることもあった。

繁雄の家がある場所は川に近いので、川漁師にはつごうが良かった。しかし、元々は川の堤防が切られていて、大增水のときに下流での氾濫を防ぐために、川の水を逃がす場所であった。

繁雄は川魚ばかりの生活に嫌気がさし、高校を卒業してから、千葉の土建屋で働いていた。しかし、ある日突然、英明が事故で落命し、残された母の照枝を放っておくことができなないので、家を継ぐことになった。繁雄には兄弟はいなかった。

英明は病気で死んだのでも、川で溺れたのでもなかった。川の仕事がない冬に、土木作業に従事していた際に、足場から転落して命を落としたのだった。

川漁師は儲かる職業ではない。溪流魚は一尾三百円ほどで売ればよい方だった。アユはオトリとして売れば六百円になったが、客が来ないと全くさばけない。旅館に持っていかば三百円。二十尾捕って、やっと六千円である。冬に売れる魚はいない。

たまに、小屋で川魚を食べたいという客がいるものの、年間を通して、やっと食っているにすぎなかった。繁雄は金が尽きると川で網を投げ、カワムツやウグイを捕って食べた。英明の頃から貧乏であったので、繁雄の家は小さく汚かった。

家の裏に畑があり、野菜をつくっていた。米は魚と交換したり、友人からもらったりした。春には山菜、秋には野生の果実やキノコを採ってきた。繁雄には嫁も子もいなかった。母を養っても何とか生きていけた。

今年のアユの遡上が良く、友釣りに来る客が多かった。

友釣りとは、尾びれ近くに針を付けたオトリアユを、長い竿と仕掛けを操って泳がせ、それを攻撃する天然のなわばりアユを引つ掛けて釣る漁法である。釣ったアユは次にオトリとして使用するが、一番初めに使うオトリは購入する必要がある。

他の地域からオトリを持ち込むことは、病気を防ぐために禁止されている。友釣り客が多いと、オトリアユや入漁券が売れる。

釣り人は、オトリ二尾と二千円の日釣り券を購入するのが普通である。繁雄は多くの場合、オトリアユを釣りや投網で捕ってきたので、オトリ代はまるまる儲けになる。日釣り券の半分は漁協の利益となり、残りの千円が繁雄の収入となる。しかし、ほとんどの釣り人は年券を持っているので、日釣り券はそれほど売れない。

釣り人が十人来れば、オトリ代だけで一万円あまりの収入となる。しかし、いつでもアユが釣れるわけではない。アユの遡上が悪い年や、川が増水したときには、収入はえられない。

近頃の釣り人は、情報網が発達しているために、アユが釣れるならば、どこまでも車を走らせて竿を出す。一方、アユがないという評判が伝わると、釣り人はまったく集まらない。

六月十日の解禁日から二週間が経っていた。このあたりのオトリ屋は繁雄の店だけであったが、営業は朝四時から昼までと決めていた。昼から釣りに来る者はほとんどいなかった。それに一日中店番をしていたら、アユを捕る時間がつくれなかった。それでも、午前中は暇だった。オトリを買いに来る釣り客は解禁当初は多かったが、この頃では、日曜日でもなければ、二、三人にすぎなかった。

照枝はもともと病弱であったうえに、父が亡くなってから、すっかり元気をなくし、ふさぎこんでいた。かつては毎日行っていた畑仕事を止め、掃除や洗濯もせず、ただテレビを見るか、寝ていることが多くなった。病院に連れて行ってみても、どこも悪いところはないという診断だった。

繁雄は母に代わって、買い物に行ったり、食事をつくったりした。アユのオトリ置き場の横にはベルがあり、客がそれを鳴らせば、繁雄は家の仕事を止めてアユ小屋に飛んで行

った。連日釣りをする客のオトリを翌日まで預かったり、簡単な食事やビール、酒を出したりすることもあった。

平日なので客はほとんど来ず、ぶらぶらしていると、松井峰太がやってきた。

「仕事がないから手伝いにきた」と峰太は言った。

「こつちもさつぱりだ。今日は釣れそうなのに客が少ない」と繁雄はぼやいた。

「会社は仕事が増えたときにだけ、俺に声をかけてくる。仕事がないと知らん顔だ」

「直哉は偉そうなことを言っているんだろう」

山洪直哉はこの村の大地主の跡取り息子で、繁雄とは小中学校で同級だった。「山洪商会」という会社の社長をしている。大柄で眉が吊り上っていた。

峰太は繁雄の二年後輩であり、村はずれの小さな家に住んでいた。農業をやりながら、直哉の会社と呼ばれると手伝いに行く臨時社員だった。痩せていて、ひよろ長い体型をしており、繁雄のところで飯を食うことが多かった。

峰太はドジョウ捕りの名人だった。幼い頃から貧乏だったので、近くの田んぼや水路でドジョウを捕まえては、それを売って家計を助けていた。そのために、勉強ができなくても、峰太は同級生や下級生から一目置かれていた。あだ名はドジョウだった。

ドジョウを捕るためには、網ですくう方法と笊を仕掛けて捕る方法がある。笊というのは、竹で編んだ捕獲用具で、狭い入り口から入ると、外に出にくい構造になっている。餌を入れる必要はなく、ドジョウの移動経路に仕掛けて、しばらくしてから回収する。

繁雄や峰太が住んでいる辺りでは、水田は小さく、不規則な形をしていた。圃場整備は進んでおらず、そのために水路はコンクリートになっていなかった。その結果、ドジョウは豊富で、峰太が捕っても捕ってもドジョウは湧いてきた。それでも、場所と時間によってドジョウが集まる場所は変わるものであり、それを峰太は熟知していた。繁雄の店でも、たまに柳川鍋を食べたいという客がおり、そのときには峰太は元気なドジョウを持ってきてくれた。

繁雄が昨日釣ったアユのうち三尾に冷水病の兆候があった。胸びれの付け根が赤く腫れていたのである。こういうアユを他のオトリと混ぜて置くと病気が移る。また、病気のアユを売ったり飼育したりすることは、県の条例で禁止されている。川へ再放流することも許されない。

しかし、病気のアユを焼いて食ったからといって、人間に病気が移るわけではない。まったく問題ないのである。そのために、繁雄は病気のアユをすぐに焼いて取っておいた。

そのアユを焼き直し、醤油とみりんを加えただし汁で煮たものに、長ねぎを入れ、卵を落とした。それを飯の上にかけて、二人は食べた。

昼食を食べてから、二人はアユを釣りに出かけた。

二人とも腕がよいので、アユはよく釣れた。繁雄は毎日、このあたりに入る釣り人の動きを観察している。誰かが竿を入れた場所では、ほとんどのなわばりアユは釣られてしまい、釣りにくくなる。一方、何日も竿が入っていない場所では、なわばりアユの数も追いつきも増している。二人は、そういう場所へ入り、体長が二十センチほどの太ったアユをそれぞれ三十尾近く釣った。

繁雄はスマートフォンを用いて、釣果を漁協事務所に連絡した。漁協のホームページに掲載されると、明日から釣り客が増えるかもしれない。

一旦、電話を切り、アユを生かしたままオトリ小屋に持っていく、病気の有無やサイズによって仕分けした。売り物になるアユが五十尾はいた。オトリアユとしては多すぎる。すでに池には三十尾のアユがいたからである。旅館に卸せるものが多かったが、連絡してみないと売れるかどうかわからない。

そのとき、漁協から電話があり、アユの注文があったという。山洪商会で宴会をするので、あるだけのアユを届けて欲しいということだった。一尾五百円で買うという。二人はアユを大きな運搬用のコンテナに入れ、酸素を与えながら、山洪商会へ向かった。

山洪商会は土木、建設を中心に、商店も営業する会社であった。アユを持っていくと、駐車場に直哉がいた。直哉は、「アユを見せてくれ」と言うなり、軽トラの荷台に乗り込み、アユを吟味した。

「いいアユだな。病気も出ていない」

「今日釣ったばかりの大物ばかりだ。うまいに決まっている」と繁雄は言った。

「今日はお得意様の歓迎会だから、変なものを出すわけにはいかない。これで料理の目玉ができた。ありがとう。そうだ、おまえらも宴会に出る。ほかにもご馳走を用意しているから——」

「俺たち、汚れた服を着ているから遠慮しますよ」と峰太が言った。

「何を言っているんだ。おまえらがきれいな格好をしていることなんかないだろう。お得意様と言っても、田舎者だ。気にすることはない。それについてアユを焼いてもらいたいんだ」

アユを買ってもらったのだから、断るわけにもいかず、二人は宴会に参加することにし

た。アユを絞めて事務所に持っていき、数量を確認してもらった後、代金を受け取った。山洪家の広大な敷地内には、山洪商会のほかにも、直哉の家とその父親である勇三の屋敷があった。山洪商会と直哉の家は隣接していた。

繁雄たちはアユを直哉の家の台所に運んで竹串を刺し、塩をふった。ひれに多めに塩を塗ると、焼けたときに見栄えがする。養殖アユばかり焼いているところを持つていくと、アユを焼きすぎることがある。天然もののアユは、養殖もののようにぶくぶく太っていないので、焼き時間は短めでよい。

「繁雄さん、ご苦労様です」

アユを焼いていると、直哉の嫁の道代がやってきた。道代は峰太の同級生であり、繁雄とも親しかった。道代の実家が繁雄の家の近くにあり、小学校に登下校するときには、いつもいっしょだったからだ。

道代は両親と祖父母と一つの家で幸せに暮らしていたが、道代が幼稚園に通っていたときに両親が離婚し、どちらもこの村を出て行った。道代はそのまま祖父母に預けられて育ったが、やがて両親はどちらも音信不通となった。そのために、道代は小学校で親なし子とはやされて、いじめられることがあった。そんなときに、繁雄は道代をいじめる子たちを叱り、殴りつけることもあった。

登下校時にイノシシやクマが出た際には、繁雄が道代や峰太ら下級生を守った。雪が積もったら、繁雄は先頭を切って進んで行った。中学校では、不良にからまれた道代を何度も助けてやった。道代にとって繁雄は、近所の頼れる「お兄ちゃん」であったのだ。

道代は真面目で素直な女の子だった。いつも髪を後ろに束ね、それを変えようとはしなかった。つぶらな瞳が可愛く、男の子には人気があった。人の悪口や妬みを口にすることはなく、四十歳をすぎた今でも、まだ二十台前半に見えた。地元でもっともむずかしい高校に進学した後、専門学校で事務、経理、経営について勉強し、結婚後も山洪照会で経理を担当していた。

「みっちゃん、元気でやっているか。旦那にいじめられていないだろうな」

「そんなことはないですよ、やさしくしてもらっています」

「今日のアユは俺たちが釣った天然アユだから、余ったら身をほぐして、雑炊に入れたらいい。内臓も入れるんだよ」

「わかりました。今日はゆっくりしてってください」

宴会は勇三の屋敷にある四十畳の大広間で行われた。料理は仕出し屋のものであったが、大皿に並べられた天然アユの塩焼きは、何か特別な雰囲気醸し出していた。

繁雄が道代に聞いたところ、この日の客は大手の飯井土建の幹部たちだった。隣の長谷町で大規模な土地開発が行われることになり、飯井土建が開発権を獲得した。その下請けの一社に山洪商会を入れてくれたことに対するお礼の宴だった。

繁雄は土地開発が嫌いだった。山が切り開かれ、工場になったり畑地になったりすると、その下流の川は汚れ、魚は臭くなる。とくにアユの香りは水質に敏感であり、汚い川のアユは食べられるものではない。

森林が開発されると、水の動きも変わる。少しの降雨で川は増水し、濁ってしまう。逆に雨が降らないとたちまちのうちに濁水となり、アユが食べる藻が腐ってしまう。豊かな森林は、美しい川を支えている。

ブナやミズナラなどの広葉樹林から流れてくる水には、スギやヒノキなどの針葉樹林とはちがう成分が含まれており、それが川の微生物や昆虫に影響し、ひいてはイワナやアユなどの魚を育てることになる、ということがテレビ番組で特集されていた。だから、川を取り巻く林や森は水産業にとっても大切なのである。

土地開発が予定されている地域も、繁雄が所属する小倉漁協の管轄内にあった。そこには小倉川よりもやや小規模であったが、美しい長谷川が流れていた。小倉川と長谷川は独立の別河川であった。

繁雄はその長谷川にアユを捕りに行ったことがあった。自分のなわばりではなかったが、同じ漁協の組合員なので断ってアユを捕らせてもらった。アユは年によって海からの遡上数が異なり、また川によって遡上数にばらつきがある。繁雄の小倉川でアユが少なかったので、比較的アユが多かった隣の長谷川に出かけたのである。逆に、隣の川の組合員が繁雄の川に来ることもあった。

アユはサケのように母川回帰するとは決まっていない。秋に産卵が行われ、生まれた仔魚は海に下って成長する。海では深場まで行かず、碎波帯を中心に活動するが、河口近くに留まるわけではなく、何キロも移動する個体がいる。そのために、春になって、生まれた川とはちがう別の川に遡上するアユもいるのである。また、一旦河川に遡上し成長した後でも、川が濁り続けた後に、アユが降海して別の川に移動することがある。

近隣にアユが遡上する川がいくつもあることは、アユの繁栄のうえでは好ましい。どこかの川で環境が悪化しても、地域全体ではアユは滅びないからである。そういうことを考

えると、隣川での土地開発は迷惑な話だ、と繁雄は思った。

宴会は始めのうちは静かに進んでいったが、酔いが回ってくると、しだいに打ち解けた雰囲気になっていった。客人たちは今夜泊まっていくことになり、しだいに大声で笑ったり怒鳴ったりするようになった。繁雄も帰りは下戸の峰太に運転してもらうことにして、酒を飲んだ。

このような客人を迎えての宴会では、互いの利害の対立につながる話はないものである。どこそこの婆さんが百歳になったとか、今年は熊の出没が多いとか、重機の燃油代が高いなど、どうしてもよい話が続けていた。

しかし、元々気が荒い人間が多い業界である。やがて、それぞれが好き勝手に話すようになった。

「役場の環境担当はまったく気が利かない奴だ。小うるさいことばかり言いやがって、腹が立つわい」

そう言ったのは飯井土建で専務を務める村中盛栄だった。顔が黒い男だった。飯井土建を動かしているやり手で、漁協としばしばもめていたことを、繁雄は知っていた。

「あいつは接待にも応じようとしらない頑固者ですね。しかし、町長は何とでもなる奴ですよ。とくに町会議員の猿谷先生の言うことには素直に従うので、やりやすいです」と直哉が言った。

「わしらは先生方には懇意にしてもらっている。猿谷先生もそうだが、その上には県会議員の荒山先生も国会議員の設楽先生もいる。反対派を抑えてくれるだろう」

「今度の開発にも反対する奴がいるんですか？」

飯井土建の若い社員が村中に訊いた。

「いやあ、大したことはない。あのへんの漁協の組合員が少し騒いでいるだけだ。土砂が流れるとか、川が濁るとか言っているが、そんなもの証明できないだろう。ちよつと保証金を出せばどうともなる」

「ここにいる向井も漁協の組合員ですよ。今日のアユを捕ってきてくれたんです」
直哉は繁雄を紹介した。漁協対策についての細かい話はしない方がよいというサインでもあった。

「どうも、向井です」繁雄は頭を下げた。

村中は少しの間、繁雄と峰太を睨んでいたが、やがて顎を上げ、目を見開いて言った。
「君たちは仲良くやっているようだな。狭い地域なのだから、皆仲良くしなくてはいかん。

開発と自然の調和が大事なんだ。開発しなくては、地域は豊かにならないだろう。そのま
までは誰も食っていけないんだ。だから、開発にいちいち反対してはいかん。わかるだろ
う」

繁雄が黙っていると、「向井さんはお子さんは何人いらっしゃるのですか？」と若い社員
が訊いてきた。

どうしていきなり、子供や結婚のことを訊かれなくてはならないのだろう、と繁雄は思
った。子供や嫁がいるということは、収入がなくてはならないということであり、それを
確認しなかったのだろうか。

「私は結婚していませんし、子供もいません」

「それはさみしいな。山洪君、誰か世話をしてやれよ」と村中は言った。

「この男は気が利かなくて、女性の前では何も言えなくなってしまうんですよ。だから一
生、結婚できないと思いますよ」

直哉にも馬鹿にされ、繁雄は腹が立ってきた。

「それはいかん。子供をつくって、その子供が学校に行って、この地域に住んで働いて、
また子供をつくるのが大事なんだ。誰でもいいから早く結婚しなさい」

村中がしつこいことに、繁雄は切れそうになった。長谷の開発話には、これほどえげつな
い奴らがかかわっているとは知らなかった。

そもそも、結婚するもしないも俺の勝手ではないか。結婚しても嫁を養う余力はない。
お前らみたいに汚いことをして金を稼いでいるわけではない。清い生活をしているんだ。
それをお前らの格下みたいに扱われるのは我慢がならない。峰太も同じ思いだろう。

「それではそろそろ失礼させていただきます」と言つて繁雄は立ち上がろうとしたが、直哉
に押さえつけられた。

「もう少しいろ。お客様に失礼だ」

そこへ道代が追加のアユを大皿に盛って持ってきた。

村中の視線は道代に移り、その美貌に引き付けられていくのが繁雄にはわかった。

「奥様は美人ですなあ」

村中は大声で言った。

「山洪さん、お子さんはおられるのですか？」

また村中の部下が言った。

「いや、まだなんですよ。毎日ががんばっているのですが」と直哉が答え、道代の頬は赤く

なった。

「奥さんはお若いから、これから何人も産めますよ。頑張ってください」と村中は言った。繁雄は自分のことを言われたときよりも、さらに怒りがこみ上げてきた。道代を愚弄しているように思われたのだ。そもそも、結婚や子供のことを女性に訊くのはセクハラではないか。直哉も黙ってしまい、その場は気まずい雰囲気になった。

その隙に、繁雄は峰太と宴会場を後にした。玄関を後にする際に、道代が見送ってくれたので、繁雄は「気にするな」と声をかけた。

帰る車中で、繁雄は窓ガラスを何度も拳で激しく叩いた。

「結婚して子供をつくって離婚もせずに一生を終える男なんて、今の日本では半分もないだろう。そんなものに価値があるのか。おかしいではないか——」

「子供をつくると偉い時代なんですよ。子供ができないと、将来の日本は人口が減って、国力が弱まるという理屈です」

「企業は工場を海外に移転させている。工場の仕事もどんどんロボットに代わっている。子供をつくっても働くところがないのではないか」

「頭がいいか親が金持ちなら、子供も幸せでしょうけど、わしらみたいなのに子供ができて可愛そうなだけかもしれないね」

「くそっ」と言い、繁雄はまた窓ガラスを叩いた。

翌日は漁協のホームページに乗せた釣果情報のせいとか、大勢の客が来た。繁雄は自分たちが釣った場所は避けて、客たちにそれぞれ釣れそうな場所を案内した。繁雄は口先で言うだけでなく、釣り人を川まで案内し、釣れるポイントを細かく教えてやった。

オトリ店に戻って一休みしていると、その前に一台のベンツが止まった。

「よう、オトリ屋、がんばっているな」

窓から頭を出して村中が言った。

「おはようございます」

「せいぜい、がんばるんだな」

村中は嗤っていた。汚らしい小屋、繁雄の服装、ボロボロの軽トラ。それらを見て愉快になったのだろう。繁雄は何か言い返そうとしたが、言葉が思いつかなかった。村中たちは窓を閉め、走り去っていった。

彼らは宴会の後、直哉の家に泊まり、今の時間になって帰っていくところだった。村中

がいる間、道代はずっと嫌な思いをしていたはずだ。繁雄は道代のことが心配だった。

怒りが収まらない繁雄は、川に飛び込んで泳いだ。泳ぎながら、淵の中にどれだけのアユがいるのか観察した。すると、巨大な魚が目についた。サクラマスだった。体長が六十センチ以上ある大物だった。サクラマスはこの川で生まれたのち、海に下って北海道からロシアまで行き、大きく成長してから産卵のために戻ってきたのだ。サケが秋に遡上するのに対して、サクラマスは春に川を遡ってくる。

サクラマスは東北や北陸の川では多いが、小倉川では珍しい。北の海で大きく成長しても、小倉川まで戻って来る途中で捕獲されることが多いからだ。だから、このサクラマスは、はるばる北の海からやってきてくれたことに対して、繁雄は嬉しさを隠せなかった。ゆったりと泳ぐサクラマスに繁雄は下流から近づいて抱きついた。サクラマスはびっくりして、体中のパワーを振り絞って繁雄から逃れようとしたが、繁雄はサクラマスの胸びれをつかみ、さらにその頭をなでてやった。サクラマスは繁雄を引きずるように上流へ向かい、そのままでは繁雄も岩に激突しそうになった。そこで繁雄はサクラマスを放し、サクラマスは一回力強くジャンプしてから上流に向かって突進していった。

その後、オトリ小屋で休んでいると彦じいがやっていた。

「どうした、久しぶりだな」

「アユくれんかの」

「ちよっと待て。探してやる」

彦じいは、このあたりの山奥に住んでいる。どこかに定まった家があるわけではない。洞窟や廃屋などを転々としながら余生を送っている。一文無しだと言う者もいれば、実は大金を持っていると言う者もいる。その経歴については、誰も知らなかった。繁雄のところにしばしばやってきて、病気が出た天然アユや弱った養殖アユをねだった。

繁雄はオトリを入れた水槽から、弱ったアユを二尾取り上げて、彦じいに与えた。

「そこで自分で焼いて食べ。芋もやるから食っていけ」

彦じいは、アユを焼き、芋を茹でて、美味しそうに食べた。

「隣の川で土地開発があるらしい。知っているか？」と繁雄は訊いた。

「飯井土建じゃろう。ずっと前から狙っていたんじゃない」

「何をつくるか知っているか？」

「山を開いて、その半分に宿泊施設とレストラン、残りの半分に小さな遊園地を考えておる。温泉を掘るかもしれない」

「町が推進しているのか？」

「どう考えても客が集まるとは思えないが、町長と猿谷議員が引つ張り、それを県議員や国会議員が支持している。役場と議員と土建屋が結託しているんじゃない。飯井土建の後ろには大手の不動産会社がいるという噂もある。何しろ規模が大きい開発じゃからな。あの辺の道路も拡張されるらしい」

「自然破壊だ。森も川も壊される」

「遊園地には自然公園と水族館もできるらしい。自然と人との共存だと」

「山洪商会も下請けで入るらしい」

「下請けに仕事をやらせて、飯井やゼネコンは大きな儲けを出すんじゃない。おまえさんにも下請けの仕事が依頼されるかもしれない」

「まっぴらごめんだ。俺は川を乱す工事にはかかわらない。それにしても、じいさんはよくそれだけ知っているな」

「わしは仕事をしないから、その分、世の中のことや自然について学ぶことができるんじゃない。アユがどこに多いかを教えてやってもいい」

「アユのことは俺が一番くわしい。爺さんなんかに負けるわけがない」

「おまえが知っているのは、おまえの釣り場だけじゃ。わしはアユをもらいに、この川すべて、ときには隣の川も見回る。ここでは病氣予防のために、購入した人工産のオトリアユを川へ放流することを禁止しているだろう。購入したオトリアユは、天然アユが釣れれば用済みだ。それをもらうんじゃない。だから、川全体の釣り人の動きやアユの多さを知っているというわけだ」

「それなら、俺の釣り場はどうだ」

「そうじゃな。川の環境は最高だ。アユは多いが、大物は少ない。おそらく、おまえさんが獲ってしまうからだろう。それでも数が出るから釣り人も多いな。はっはっは」そう言っつて、彦じいは山に消えていった。

繁雄はインターネットで村中や飯井土建についてしらべてみた。名前と町の名をインプットして検索すれば、いろいろなことがわかるものだ。

それによると、村中は飯井土建の専務で、長谷町で桜村屋という老舗旅館を営んでいる。繁雄はその旅館にイワナやアユを持っていったことがあるが、まさか村中の経営とは知らなかった。旅館の評価は高く、大女将と美人の若女将が仕切っている、と書かれていた。川魚も食べられるという書き込みがあった。

村中は電車で四十分かかる市の進学校から東京の国立大学に合格したらしい。繁雄とは比べようもなかった。大学では柔道部で活躍したこともわかった。娘が一人だけおり、若女将として働いていたが、男子はいなかった。

飯井土建の社長は創業者の飯井泰三であり、特別顧問に国会議員の設楽文吾がいた。飯井泰三は八十八歳であり、跡取り息子はいなかった。

夕方になって何人かの客が、オトリ店へ戻って来た。いずれも二十尾以上釣っており、中には四十尾釣った者もいた。皆満足したようであり、繁雄も嬉しかった。よく釣れた場所をノートに記録した。

その後、繁雄はデッキブラシを持って、川へ向かった。そこで、いくつかの大石を河原から持ち上げて川へ投入した。また、泥をかぶっていたり、藻が腐っていたりした石の表面を、デッキブラシでごしごしと磨いた。そうすると何日か経つと、新鮮な藻が石に付着して、良い餌場になるのだ。用がなければ、毎日行っ日課であった。彦じいが河川環境が良いと褒めてくれたが、それも当然だと繁雄は思った。繁雄が川石を磨いていることは、峰太も含めて誰も知らないことだった。

翌日の午後、繁雄は桜村屋に行ってみた。

「こんにちは」と玄関を開けると、ロビーに若女将がいた。

「あら、向井さん。お魚は頼んでいないけど何か御用？」

「久しく注文がなかったので、どうしたのかと思って、様子を見に来ました」

「このところ雨ばかりで、お客さんが少なかったので、頼まなかっただけよ。心配しないわ」

若女将は萌美という名前だった。細身で和服が似合う女だった。きりりとした眉が、意志の強さを感じさせた。

「いいアユが獲れているので、ぜひお願いします」

「わかったわよ。あさって団体さんが入るから、そのときに持ってきてね。数は後で連絡するわ」

「そうそう、長谷川でレジャー施設ができるらしいですね」

「そうなのよ、父がかかわっているのよ、私たちも協力することになるかもしれない。うちの別館をつくる計画があるのよ。でも、地域の人たちが反対しているので、長谷川から魚を買いにくくなるかもしれない。だから向井さん、よろしくね。こういう山の中では海の魚は使いにくいので、川魚はなくてはならないのよ。養殖したニジマスはあるけれども、

やはり天然物を食べたいというお客さんは多いから——」

「わかりました。それではまた」と言って繁雄は桜村屋を後にした。

2 長谷の開発計画

長谷川は町中では護岸されて見ばえが悪かったが、上流に行くにつれて川相が良くなった。とくに土地開発が行われる一帯は、支流の依田川が合流し、美しい畑や山林が広がっていた。川の瀬と淵が交互にあらわれ、淵のほとんどは水深が四メートル以上あった。それでも水が澄んでいるので、淵の底で魚が動く姿を観察することができた。

そのあたりでは香り高いアユが獲れ、早春にはイワナやヤマメが釣れることもあった。堤には、桜の大木が五本、距離を置いて並んでいた。他に競う木がないために、幹や枝葉は大きく広がっており、春には花見の名所となっていた。

県道沿いに十数軒の家があり、周辺で農業や漁業を営んでいた。アユのオトリ屋もあった。どうしてこれほど美しい場所を開発するのだろう、と繁雄はやるせなくなった。

その日の夜、繁雄は峰太を誘ってスナック「プレジデント」に行った。小倉町から国道に沿って長谷町に入ったところにあった。忙しい二日間を終えて、酒を飲みたくなったのだ。

「あら、いらっしやい、社長さん」と迎えてくれたのは、めぐみだった。

「ママはちよっと出かけているの。何にする？」

「じゃあ、生ビール、峰太にはノンアルコールビール」

「峯ちゃん。たまにはアルコールを飲んだら？」

「いや、蕁麻疹が出るので止めておきます」と峰太は断った。

めぐみは、この店で働き出してから五年になる。美人ではないが、いつも笑っているように見えるので魅力があった。高校を出てからしばらく事務員をしていたが、つまらなくなつて、この店で働くようになったらしい。いつのことなのか、はっきり言わなかったが、結婚していたことがあり、バツイチだった。ほかに客はいなかった。

「嫌なことがあったので、めぐみの顔が見たくなつたんだ」

繁雄は素直に言った。

「何？ 嫌なことって」

繁雄は土地開発や村中のことを話した。

「あの男知っているわよ。数回ここに来たことがある」

「どんな感じだった？」

「いつも子分を連れてきて、威張っていたわね。声が大きくて自慢話ばかりしていた。高い酒をがぶがぶ飲んでくれたから、店としてはありがたかったけれど……」

「品がないな」

「周りの部下たちに、ああしろこうしろと指示するのが好きみたい。それが何だか嫌らしい」

「今日、桜村屋に行ってきた。魚を買ってくれるので、以前からたびたび訪れていたのだが、村中の旅館とは知らなかった」

「あそこの若女将の萌美は高校で同級生だったのよ。とても頭がよく、気配りもできる人だわ。男よりも決断力があって、いつも学級委員長をしていた。確か、もうすぐ結婚するはずよ。萌美は活発な性格だけど、旦那になる人はおとなしいという評判だから、うまくいくのではないか、って誰かが言っていたわ」

「めぐみと同級生ということは、俺より一歳年下か」

「あんなに魅力的な人が、この年まで結婚しなかったのが不思議だと言われているのよ。やはり、あの父親がいろいろ言って妨害したのではないかと噂されているんだけど……」

一人娘だから、溺愛しているんでしょうね」

そのとき、ガチャンと音がして、ママの裕子が直哉と入ってきた。裕子は直哉の愛人だった。

直哉は繁雄のテーブルに座った。

「宴会ではありがとう。嫌な思いをさせてしまったな」

「村中ほとんどない奴だ。あれでは道代が可愛そうだ」と繁雄は言った。

「あの後も、酔って騒いで大変だった。接待だったから仕方がなかったが、あれほどえげつない奴は珍しい」

「あんな奴と仕事をするのは止めたらどうだ」

「そうできればいいが、うちの会社には従業員がいる。峰太もそうだ。そいつらを食わせたいかなければならないんだ。今度の仕事がどうこうというのではなく、飯井の仕事を断つたら大変なことになるんだ。お前みたいに気楽に生きているわけではないからな」

裕子がおつまみとビールを持ってきた。

「むずかしいことは終わりにして、飲みましょう」

豊かな胸が繁雄の目に飛び込んできた。

「ママは村中を知っているのか？」と繁雄は訊いた。

「実家が近かったから、知っているわ。お勉強ができて、柔道が強かったと聞いている。お金持ちのお坊ちゃんだから、威張っているように感じたわ」

「直哉と同じでないか」

「馬鹿を言うな。おれはいい子だった」

そう言って直哉は煙草を吸った。

「でも、おまえら貧乏人は俺のことが嫌いだっただろう。着るものから食べるものまで、全然ちがったからな。俺は悪さもしたが、いつも心の奥では、とんでもない悪さは止めようと思っていたんだ。そうだろう、何もしなくても一生楽に食っていけるんだ。警察に捕まるようなことをして墓穴を掘る必要はない。俺の悪さは一種の退屈しのぎだったんだ」

「それにしても、ずいぶんいじめられましたよ」と峰太が言った。

「それはお前がだらしがなくて、見ていられなかったからだ。何をするにもぐずぐずしていて、このままではだめになると思ったんだ。できることといたら、ドジョウを捕まえるくらいだろう。それに今、おまえに仕事を回してやっているのは俺ではないか——」

「そういう傲慢な言い方が癪に障るんだ。親の力でやっているだけのくせに」

繁雄が直哉に遠慮することはなかった。子供の頃から何度も喧嘩をしてきた相手であり、腕力では負けないという自信があった。

「おまえたちなんか、この町を出て行ったら住むところも働くところもないんだ。それならば大人しく、強いものの言いなりになっていればいい」

「それはひどい」とめぐみは口をはさんだ。

「あんただって、村中さんや設楽さんに比べれば大したことはないじゃない。飯井の下請けでしょう。不況になれば、真っ先に倒産するかもしれない」

めぐみは相手が社長だろうが議員だろうが、言いたいことははっきり言う女だった。ただ、笑顔を絶やさないので、相手が怒ることはない。むしろ実直な印象を与えるのかもしれない。地位が高い男は、周りの部下たちがへこしているの、はつきり物を言う女を好む傾向がある。

「もしもの話をしてもしようがない。現実には現実だ。くやしかったら、俺より金持ちになつてみるよ。山渡家には、歴大な資産があるんだ。会社がつぶれても、どうということはないんだ」

それを聞いた繁雄と峰太は、またかというような顔をして、直哉を無視した。

「今日はどうしたの。みんな変よ。もっと楽しく飲みましょう」と裕子が言った。

「俺は帰る」と叫んで、直哉は出て行った。繁雄たちは、その後しばらくカラオケを楽しんで、嫌な気分を晴らした。

アユは順調に釣れ続けた。そして、小倉川にゲンジボタルが乱舞する季節がやってきた。繁雄にとって一番の稼ぎ時である。繁雄の小屋の近くは、もともと多くホタルが飛び交う名所であり、アユ釣り客のために繁雄が整備した入川路を使って、大勢の人たちが川へ降りていった。神立橋は、橋の上からホタルを見ようとする親子連れやカップルで溢れていた。

ゲンジボタルは川岸の植物や石に卵を産みつける。川の上に張り出した大岩の裏に苔が生えていると、絶好の産卵場所となる。なぜなら、孵化した幼虫は川に移動してカワニナを食べて成長するからだ。大岩の裏なら、ただ岩から落ちるだけで川に入ることができ、川岸を這っている間に外敵に襲われる危険はない。

神立橋の五十メートル下流には、ひときわ大きな「大アユの淵」があった。この淵の水深は五、六メートルあった。

ホタルが現れるのは二週間ほどであったが、その間、大アユの淵のまわりでは何千ものホタルが乱舞していた。その動きを追っていると、嫌なことをすべて忘れることができた。

繁雄は忙しくなった。この時とばかり、繁雄は橋からアユ小屋まで、提灯を燈し、アユの塩焼きやアユ雑炊、それにビールやアイスクリームを売りまくった。峰太にも手伝いに来てもらった。彦じいも、ずっとアユ小屋に留まっていた。この時期の売り上げは年間収入の三割を占めた。

ホタルが現れてしばらくの間は天気が良かったが、十日目から雨が降り出し、その翌日にはさらに激しくなった。川は濁り、アユ釣りはできなくなり、ホタルの見物客も途絶えた。

繁雄はしばらく昼の客は来ないと考えて、溪流釣りに出かけた。畑でバミミズを探り、それを餌にイワナを狙った。小倉川はある地点で県道から離れ、そこから上流では手付かずの広葉樹林に囲まれていた。その流れは清流であり、イワナが多く太っていた。川はめったに濁ることはなく、今日も水量は増していたが澄んでいた。

イワナはポイントごとに釣れ、大きなものは尺を超えた。繁雄は小さなイワナは放流し、

二十五センチを超えたものだけをビクに入れた。小倉川が生きているのは、この森のおかげである。

ヤマセミが水面近くを上流へ向かって飛んでいった。魚が多い証拠である。キビタキが可愛らしく飛び回っていた。オオルリもせつせと雛に虫を運んでいた。森に虫が多いと、それは川面に落下して、イワナの餌となる。虫も魚も鳥も、森の恩恵を受けている。

二十尾を超えるイワナを持ち帰ったので、繁雄は桜村屋に電話をした。買い取ってくれるということだったので、発砲スチロールの箱に氷を入れ、笹の葉を敷いて、その上にイワナを並べた。

桜村屋では萌美がイワナを受け取ってくれた。

「ちょうど、今日宴会があつて、アユかイワナが必要になったのよ。助かったわ」

「今日のイワナは太っていて美味しいと思うよ。塩焼きにするのかい？」

「塩焼きのほかに創作料理も出そうと思つているの。内臓を取り除いたあとにアサリのむき身か海老と野菜を詰めて、それから蒸してみるわ。どう思う？」

「俺にはそんなむずかしいことはわからない」

「ヨーロッパでは、マスの腹に詰め物をする料理が人気だわ。和食でも、アユの腹に豆腐や卵を炒めて詰め、それから焼く料理を、けんちん焼きと言うのよ」

「面倒くさそうだな。イワナは塩焼きでいいんだ」

「頭が固いわね。イワナご飯にしてもいいし、クリーム煮やトマトソースをからめたムニエルも美味しいわ。お魚はいろいろ工夫して料理すれば、ちがう食感になるのよ。もっと新しいことに挑戦しなければだめよ」

「わかった、わかった、今度、食べさせてもらいたいものだ」

「今日は雨が降っていたのに大変だったでしょう」

「釣れば、まったく気にならない。それより、今度結婚するんだって？」

「よく知っているわね。知らない人なのだけど、父がどうしてもと薦めるものだから……」

「私はこの旅館で働くのが生きがいのよ。ここで従業員を動かし、自分も動き回って汗をかくことが好きなのよ。父の言うことに逆らえば、あの父だから怒り狂って、私を追い出すに決まつている。そうしたら、私はすべてを失つてしまう。そのくらいなら、知らない男と結婚するくらい、どうということはない」

繁雄は萌美の真剣な眼差しに圧倒された。それだけの覚悟があるものを、他人がどうこ

うと意見するわけにはいかない。

「わかったよ、でも何か困ることがあったら、いつでも相談してくれよ。俺は萌美さんが好きなんだから」

そう言って、繁雄は萌美の反応も見ずに、桜村屋を後にした。

帰る途中で組合に立ち寄った。組合長の春田和則は七十過ぎの小柄な男だった。繁雄は子供の頃から遊んでもらい、何かにつけて世話になっていた。組合長になったのは三年前からであるが、この間とくに大きな問題は起こらなかった。

「和さん、こんにちは」

繁雄は組合の机で一人お茶を飲んでいた春田に挨拶した。

「よお、繁雄か。この頃、よく釣っているようだな」

「おかげさまでお客さんも多かったですよ」

「今年のアユはまずまずだな。病気は出ているが、去年よりはましだ」

「ところで、長谷川で土地開発の計画があるそうですね」

「頭が痛い話だ。土砂が流れて川が荒れることはまちがいない。あそこの組合員は絶対反対だと言っている。しかし、それがどれだけの損害になるのかはわからない。アユ釣りの時期には工事はしないという話だから、保証金もほとんど入りそうにない。しかも、町の有力者から圧力がかかっている。どこかで妥協せざるをえないだろう」

「土砂が川に流れたら、淵がなくなり、川が平坦になってしまおうでしょう。アユだけでなく、他の魚にも悪影響が及びますよ。工事の方法に注文をつけられないのですか？」

「わしらが何を言っても、信じてもらえない。学識者の見解が必要だと言われるだろうが、そんなのはわしらの県にはおらん」

「そう言わずに、絶対に反対してくださいよ。アユが釣れなくなったら、この漁協は終わりですよ」

そう言って、繁雄は事務所を後にした。

雨が上がり、川の水もいくらか澄んできた。水位が二メートルも上がると、石に付く藻が洗い流されてしまい、アユはなわばりをつくらなくなる。しかし、今回は増水したといっても、川の藻が流されるほどではない。今日、釣り人が入っていない分、明日は絶好の釣り日和になるだろう。

繁雄はスーパーに行つて、夕方になって安売りしていた肉や惣菜をカゴに入れた。魚は原則買わないが、サバの切り身が一パック百円になっていたので購入した。賞味期限が近

づいた肉や魚は冷凍して何日かに分けて使えばよい。ほかに醤油と卵も切れていたの、買うことにした。

「あら、繁雄さん」

その声をかけてきたのは道代だった。道代は今日も髪を後ろに束ね、白いブラウスと紺色のタイトスカートを身につけていた。つぶらな瞳が輝いていた。

「先日はありがとう」と繁雄は言った。

「あのときは嫌な思いをさせてしまつてごめんなさい」

「俺たちはどうつてことはないよ。それより、みっちゃんの方が嫌だっただろう」

「うちにはいろいろな人が出入りするから、慣れてしまつたわ。言葉の暴力など大したことはない」

「直哉に暴力を振るわれることがあるのか。それなら俺は黙っていないぞ」

道代は何も言わずに微笑んでいた。

道代は可愛いなあ、いつも笑顔で怒らない、どんなに嫌なことがあつても、顔に出さない、他人の悪口も言ったことがない、こんな女と結婚したかつたな、と繁雄は心の中でつぶやいた。

「繁雄さんは結婚しないの？」

「結婚か。生活が苦しくて、とでもできないよ。母親の面倒も見なくてはならない。そのうえ、子供ができて養つていけないよ」

「私がとやかく言うことではないわね。でも、お仕事がんばつて、今のお店がもつと大きくなるといいわね。そうしたら結婚できるわよ。繁雄さんは男性として魅力的だと思う。頼りがいがあるし……」

「そう言つてくれるのは、みっちゃんだけだよ。……ではまた」と繁雄は言つて別れた。

道代が直哉と結婚することに、繁雄は反対だった。道代も初めは乗り気でなかった。道代はむしろ繁雄と結婚するつもりだったかもしれない。

しかし、道代の祖父母は繁雄を嫌っていた。貧しいアユ小屋の息子で、将来もろくなことにはならない、というイメージを持たれていた。そして何より、繁雄には妻子を養う自信がなかった。そういう状態が続くうちに、道代は直哉の求婚を受け入れることになった。

その後、道代の祖父母は病気で他界した。両親とは連絡できないままだった。そのために、道代は実家を取り壊し、その土地も売っていた。

一方で、繁雄はめぐみと男女の仲だった。だから、繁雄には道代のことをとやかく言う

権利はなかった。

翌日には水位が下がり、アユが釣れそうな状況になった。朝から、数人の客がやって来て、オトリアユを買っていった。繁雄は午後になったら釣りに行くつもりで、アユ小屋で待機していた。

彦じいがやってきた。午前中に来るのは珍しかった。

「今日はアユはやれないぞ。オトリが少なくなってきたからな」と繁雄は言った。

「雨が上がって気分がいいから遊びにきたんじや。イノシシを捕まえたから、肉を分けてやる」

「それでは少し早いが昼飯にするか」と言って、繁雄はイノシシの肉を焼き、冷凍してあったモクズガニを茹でた。

「彦じいは直哉と道代のこともくわしいか？」

「それはまあ、あそこにも行くからな」

「あの夫婦は仲が良いのか？」

「良くはないだろう。直哉には女がいるのだから。どうも、道代に子供ができないことが、直哉にしても、直哉の両親にしてもおもしろくないらしい」

「子供ができないのは直哉のせいかもしれないだろう」

「ああいう家では、都合が悪いことはすべて嫁のせいにするんじやよ。道代は孤立無援で、可哀そうな女じや。わしはこれから残りの肉を持って、道代のところに行ってみる。何かいいものをくれるかしらん」

そう言って、彦じいは村の方へ消えていった。

繁雄はしし肉の残りを野菜と煮て、照江に与えた。照江は食事を取ると、また布団で寝入った。

午後から、お客さんが入っていない場所で釣りをした。アユ釣りは増水して人が入らなかつた後でよく釣れる。この鉄則通りに良型が次々に竿を絞った。先日磨いておいた石の周りで掛かると、なおさら嬉しくなった。アユ釣りは循環の釣りである。良い天然アユが掛ければ、それをオトリにして、さらに元気な天然アユが掛かる。結局、午後だけで三十尾釣り、これを明日からの客に天然オトリとして売ることにした。

日が暮れてから、市井隆が来訪した。長谷川でアユ小屋を経営している同業者である。

「ちよっといいか」

市井はにこりともしないで小屋の中に入った。

「開発のことか？」と繁雄は訊いた。

「そうだ。この計画は具体的になっており、土地の買収が進んでいる。それなのに、俺たちには何の話もない。見えないところでいろいろなことが決まっているんだ」

「組合はどうするつもりだろうか？」

「俺も組合長を問い詰めたが、はっきりしたことを言わない。反対する姿勢が見えない。長谷の皆も不安になっている」

「飯井土建だけでなく、その後ろに大手がいるかもしれない。役所や議員も推進している」と繁雄は村中たちから聞いた情報を話した。

「黙っているわけにはいかない。俺たちで反対同盟をつくらないか」

「わかった。川が痛めつけられるのはたまらない。協力しよう」

繁雄は即座に同意した。

その後、繁雄は情報を集めてみた。インターネットで飯井土建と関連のある事業やパトナーを片っ端から検索した。その中には、山洪商会のような下請けも多かったが、ゼネコンや大手の不動産会社も含まれていた。

次に繁雄は、このような土地開発事業に対する反対運動についてしらべてみた。

ダム、レジャーランド、都市の区画整理や幹線道路の建設、廃棄物処理場などは、一部あるいはすべての地域住民の犠牲のうえに成り立っている。しかし、検索の結果わかったことは、反対派が勝つことはほとんどないということだった。

ダムの底に沈む村は他所へ移転していた。水質汚染や取水については、いくらかの補償金で解決されていた。道路のルートにある家は立ち退かざるをえない。廃棄物処理場と宗教団体だけは、住民の反対が強いが、土地を購入された後では、撤回させることはむずかしい。河川改修は住民のための事業ということで、不利益を強いられる漁業者は保証金すら取れないようだった。

地域に貢献するものを漁業者が反対するとはどういうことか、河川の氾濫から住民の生命を守るための事業だ、と言われたら対抗できないのである。それでも、繁雄はどこかに突破口があるのではないか、相手の弱点があるのではないか、と思索した。

その後、瞬く間に一週間が過ぎた。晴れたり、雨が降ったり、日ごとに天気が変わった。適度な増水があったので、川は生き生きとしており、アユ釣り客も多かった。

夜になって繁雄はめぐみに会うためにプレジデントに行った。裕子はおらず、ほかに客

もいなかった。

「よお、閑散としているな」

「景気が良いと言われているけれど、よくわからない。バブルが終わっているし、大手の輸出企業は儲けているようだけど、こんな田舎町はだめね」

「そこそこ儲かればいいんだ。何とかやっていけてるんだらう？」

「店の経営はママの仕事だから、よくわからない。ママの後ろにはいろいろな男がいるよ
うだし」

「直哉のことか？」

「それだけではないみたいよ。直哉さんは自分だけだと思っているでしょうけれど、ほかにもいるかもしれない……」

「ありそうな話だな。まあ、そんなことはどうでもいい。ところで、例の開発事業のことだが、あれから何か情報はないか？」

「あるわよ。一度、村中さんがやってきたのよ。ほかに相楽文吾と飯井泰三、それに東片不動産の社員が二名いたわ。ママが接待していたので、くわしい話は聞かなかったけれども、例の開発のことで盛り上がっていたようだわ」

「やはり、大手がかんでいたのか。ますます反対しにくくなったな」

「あなた、反対運動でもするつもり？」

「それを考えているんだ。川が荒れるのは我慢できないからな」

「でも、長谷川とあなたのところは関係ないのでは？」

「仲間の一大事だ。黙ってられないんだ」

「そうそう、萌美の婚約者がわかったわ。相楽文吾の孫ですって。その男が村中の家に婿入りして、旅館を経営する予定。萌美のお母さんである大女将は、病気がちなので引退するらしい」

「それでは萌美さんは政略結婚させられるのか。ひどい話だ」

「それはどうかしら。あなたみたいな川漁師より、政治家の孫の方が結婚するに値するのではないかな。将来は議員になるかもしれないし。一方、あなたは一生アユを捕るだけで、貧しく暮らすのでしょうか。それでは夢が持てないわ」

「きついことを言うねえ。俺は結婚したいとは言っていない。それに俺が一生アユを捕り続けるとも決まっていない。馬鹿にするな」

めぐみは「はっはっはっ」と笑いながらビールを注いだ。開発話のせいで不快になって

いた繁雄もつられて笑った。

そのとき、峰太が店に入ってきた。繁雄が呼んだのである。

「山洪商会はどんな感じだ。仕事は多いか？」

「ぼちぼちですよ。新年度の公共事業が入り出したところです。皆、長谷の事業に期待していますよ」

「冗談じゃない。あんなものつぶしてやる。漁協の根性を見せてやる。ところで道代はどうしている？ 直哉にいじめられていないか？」

「いじめられているということは聞かないですが、社長はあまり家に帰らないみたいです。このママと遊んでいるのではないですか？」

そう言つて峰太はめぐみを見た。

めぐみは何も知らない顔をしている。

「直哉なんかとはさつさと別れた方がいい。このままでは不幸になる一方だ」と言つて、繁雄はテーブルを拳で突いた。

「そうは言つても、結婚しているのだから、簡単には別れられないわよ。しばらく、様子を見ましょう」とめぐみが言った。

「いらいらする！」そう叫んで繁雄はプレジデントを飛び出した。

梅雨末期の大雨が続き、川に手を出せない日々が過ぎていった。しかし、この大雨がなかったら川は細り、真夏には腐つて、どうにもならなくなる。適度な大増水は必要なのである。

川の石に付着した藻類はみなこそげとられて、川は白川状態になった。アユは大石の裏や分流に集まり、水面に落ちる虫を食べたり、わずかに残った石裏の藻を食べたりして、飢えをしのいでいた。普通の釣り人には竿を出せない状況である。

しかし、ある程度水位が下がれば、繁雄にとつて十尾くらいのアユを釣ることは容易であった。このような状況でも、どこに藻が残っていて、どう釣ればよいかを知っていたからである。

水位が四メートルも上昇する大増水の時には、魚にとって避難する場所が必要である。避難場所の一つは水深の大きな淵である。三メートル、できれば五メートル以上の淵があり、そこに岩の穴などの隠れ場所があれば、魚たちはそこへ入つて不適な環境を耐えることができる。

もう一つは分流である。川が二つ、三つの流れに分かれていれば、主流の流れが速すぎ

て留まることができなくても、分流に避難することができる。

大きな淵を繁雄一人の力で造成することはできない。しかし、河川敷が広く、川が分かれそうな地点では、いくつかの石を動かすことによって、分流を造ることができた。許可なくして川を変えることはできないが、繁雄は誰もいない早朝に、この作業を実行した。そうすることによって、増水時にも、その後にも、アユが釣れる川を造ったのである。

釣れるとはいっても、この時期のアユは痩せていて、砂を食っていることが多く、食料には向かなかった。釣りに来る客もほとんどいなかった。オトリアユを獲る必要もなかった。繁雄は雨が上がり快晴の日が続いても、家でごろごろするばかりだった。あせる必要はなかった。梅雨が明ければ爆釣の日々が始まる。大勢の客がやって来るだろう。

そんなある晩、市井の家で土地開発反対派の集会をするようになった。集まったのは、市井のほか、長谷川の組合員が四名と、長谷川とは関係がない元組合長の坂本渉、そして繁雄の七名であった。繁雄にとって、いずれも友人であり、気心が知れていた。

「よく集まってくれた。とくに小倉川の向井さんと坂本元組合長には感謝したい」
市井が口を開いた。

「俺たちは仲間だ。川が汚れてアユが育つはずがない。このような死活問題を放っておけるものではない」と繁雄は言った。

「それで、この土地開発の概要はわかっているのか？」坂本が訊いた。
「これまでの情報では、相当規模が大きく、田畑が買収されている。飯井土建が進めているが、東京のリゾート開発会社やゼネコンも動いている。二十キロ先の山中にある高速道路のサービスイアにスマートインターチェンジが作られ、そこから海際まで大きな道路が通されるらしい。海の方には、海鮮市場や海釣り公園が計画されており、観光客がこの道路を通ると期待される。そこで、温泉、旅館、レストラン、淡水魚の水族館を合わせたリゾート施設をつくり、山の方には、自然散策公園もできるらしい」

「川はどうなるんだ」

長谷川の組合員が訊いた。

「よくわからんが、護岸改修をして絶対に氾濫しないようにするらしい」

「それでは、アユはどうなるんだ。河川改修したら、川が荒れて淵がなくなってしまうだろう」

繁雄はだんだん頭にきて叫んだ。

「細かいことは、これ以上訊かれてもわからない。ただ、相談したいのは、これからどう

反対していくかだ」と市井が答えた。

「俺たちだけで反対するよりも、組合で反対するべきではないか」坂本が言った。

「それはそうだ。坂本さんは理事の一人だから、組合の理事会で緊急に討議してくれませんか」と市井が提案し、坂本も了承した。

しかし、組合では風向きは異なっていた。他の理事は二人とも、反対するべきではない、と主張した。繁雄を除く小倉川の組合員も冷淡だった。川の水量が奪われるというような直接的な被害がない状況で、反対することなどできないというのが、組合長を含めた多数の意見だった。それでも、組合に対して、この計画を説明してもらいたい、という坂本の主張は通り、後日説明会が開催されることになった。

食料が尽きたので、スーパーに行った。今日は安いイワシとコアジが売られていたので、それぞれ一パック百円で買った。それから、賞味期限が近づいた、豆腐と油揚げを値引きで購入した。アメリカ産の豚の細切れが特売されており、三百グラムで二百五十円だったので、これも買った。そのほか、おから、豆腐、もやし、低脂肪牛乳も仕入れて、スーパーを出ようとしたら、道代に遇った。

「繁雄さん」と道代から声をかけてきた。

「お店の方は順調ですか？」

「それがね。長谷川で土地開発計画があつて、頭を悩ませているんだ」

「飯井土建が進めている事業のことね。うちも仕事をもらおうとしているみたい」

「村中は相当の曲者だが、裏ではもつと大物が動いている」

「うちの営業にとっては利益になるかもしれないけれど、自然が大規模に破壊されるのは嫌ね。長谷川のあの辺りは桜がきれいなところですよ」

「みっちゃん、そのことを人に言つてはだめだよ。直哉はもちろん、近所の奥さんたちに
も」

道代は少し微笑み、駐車場に向かっていた。

繁雄は峰太を誘ってプレジデントに行った。めぐみのほかに、見知らぬ若い女の子が働いていた。

「実はね、ママが妊娠して、しばらく店には出られないのだから。それで、新しい娘を雇つて、私がママの代わりをすることになったというわけ。あの娘は新しく入った、もえちやんよ」

「もえちゃん、よろしく」と繁雄が声を掛けると、もえも微笑んだ。

「めぐみママの誕生だな。おめでとう。それで、ママの子の父親は誰なんだい？」

「それがわからないのよ。直哉さんだと思うし、直哉さんもそう思っているようだけれど、他にも候補がいるしね。ママも笑うばかりで、誰の赤ちゃんか言わないの」

「ほんとうに道代は可愛そうだ」

「昔の將軍様だったら、側室の子でも喜んだものだけど、今の時代では、揉め事の原因になるだけね」

「直哉だったら、よそでできた子でも跡継ぎにしかねないな。それにしても、このままだと、道代に子供ができないのは道代のせいだということになってしまう」

「そういうことになるわね。直哉さんも、自分の子ができたことに喜びすぎて、それが本当に自分の子かどうか疑わないでしょうね」

「しらべたら父親が誰かわからないのか？」

「そうね。ママの子供をDNA鑑定すれば、真実がわかるかもしれないけれども、そんなことは絶対にしないでしょよね」

「そういうものかな」

「当たり前よ。検査のお金がかかるうえに、日本中の子供のDNA鑑定をしたら、妻の浮気がたくさん見つかってしまうでしょう。そんなことは夫も怖いから、やらないに決まっている。世の中わからない方がいいこともあるのよ」

「血液型はどうだろう」

「ママの血液型がわからないから、推測できないわ。もうこんな話は止めて、もっと楽しいことを話しましょう」

「めぐみは何かはまっていることはないのか？」と繁雄は話題を変えた。

「実はね、最近バードウォッチングを始めたの。野山に行つて鳥を見てみると、心が癒されて幸せな気分になれる」

「どんな鳥を見たんだ」

「最近初めて見たのはシジュウカラとメジロ。それからカワガラスも三羽見つけたわ」

「なんだ、初心者だな。カワガラスなんかいくらでもいるだろう。うちの近くにはカワセミもヤマセミもいるよ。もっと山の方に行くと、キビタキやオオルリもいる」

「始めたばかりだから、少しずつわかっていったらいいの。それに人に教えられても嬉しくないものよ。自分で一つずつ発見するのが楽しいのだから」

「峰太、どう思う、バードウォッチングって」

「焼き鳥の方がいいですね。ツグミ獲って食べたことがありますよ」

「峰太なんかには、バードウォッチングはわからないわ。頭の中は、ドジョウのことばかりでしょう。もうこの話題は止めましょう」

数日経った晩に、漁協への説明会が桜村屋で開かれた。出席したのは、組合長はじめ理事たちと、市井をはじめとする長谷川の組合員、それに繁雄だった。説明側は村中と飯井土建の社員が数名それに長谷町役場の担当者が三名だった。桜村屋の大広間に宴席が用意され、スクリーンとプロジェクターが用意されていた。

繁雄は言いたいことを言おうと意気込んでいたものの、宴席を見て変な気分になった。

何がめでたいというのだろうか。これでは接待ではないか。

「皆さん、ようこそいらっしやいました」と役場の課長が挨拶した。

「本日は、このたびの大規模開発についての漁協説明会を開催いたします。この計画は地域活性化の核となる事業として、皆さんにとっても大変メリットのあるものです。そういう趣旨をご理解頂きたく、本日はパワーポイントを用いまして具体的に、完成予想図や環境対策についてご説明しますので、よろしくご検討ください」

続いて村中が「まず乾杯しましょう」と言い、仲居たちがビールをついで回った。萌美は組合長にビールを注いでいた。繁雄も仕方がなくジョッキを上げて乾杯した。どこからともなく拍手が起きた。

その後のスライドでは、町の担当者から近年観光客が減少していることがグラフで示され、地域活性化に向けて町と県が行動計画を立てたことが説明された。ついで、高速道路のスマートインターチェンジができると、どのような経済効果が期待されるのかが数字で表示された。

さらに、新しい道路が建設されること、それを基点にいくつかの町と市が観光客にとって魅力的な施設やイベントを計画していることが、写真を交えて説明された。観光客が増えると、河川や海における遊漁者が増え、漁獲物が売れることも、数理シミュレーションによって予想された。最期に河川漁協にとってどういうメリットがあるのか、箇条書きで説明された。

1 遊漁者が増加する——奥さんと子供さんはレジャー施設で遊び、その間アユ釣りや溪流釣りを楽しむ旦那さんたちが増加する。

2 新しくきれいな宿泊施設ができることによって、富裕な釣り人が大勢訪れる。

3 新しい施設で、海産魚だけでなく淡水魚を直売するとともに、淡水魚の料理を提供する。

4 排水によって水質が悪化する分は、漁協に補償金を支払う。

「どうですか、皆さん。すばらしい計画でしょう。地域にとっても漁協にとってもメリットが大きいことがわかりでしょう。ぜひご賛同ください」と村中が言った。

「環境の悪化については、どう考えているですか？」

市井が訊いた。

「大きなプロジェクトですから環境アセスメントを実施しており、もうすぐ結果が出るはずです。何か問題があれば、それを軽減する対策を講じます。また、地権者の方々には大方了承を取り付けております」と町の担当者が答えた。

しばらく沈黙が続いた。その後、組合長と理事たちはこそそ話をした。市井も考え込んでいた。

繁雄はたまらなくなつて発言した。

「川への影響はどうなのですか。汚水だけではないですよ。土地開発で土砂が川へ入り込み、淵が埋まって魚の棲みかが失われるのですよ。護岸工事が行われて、桜の咲く美しい景観が壊されてしまいます。そういう点をどう考えるんですか？」

「環境アセスメントは景観や河川の影響も含んでおりますので、大丈夫です。河川工事も近自然工法を採用して、魚にやさしい川づくりを推進します」と担当者は答えた。

村中も続いた。

「これはこれは、小倉川の向井さん。あなたは川魚を愛しておられるから、ご心配はよく理解できます。ただ、言っておられることが、私も頭が悪くて川についての知識の乏しい者には、ちょっと抽象的というか、わかりにくく思います。今後、具体的に計画が進行する過程で、いろいろと要望を出していただければと思いますよ。とくに長谷川の皆さんには」

「それから、今後は漁協を対応窓口として一本化させていただきたいと思えます。組合員の皆さんの意見は組合で一本化してお伝えください」と町の担当が言った。

これだけ言われると、皆黙ってしまった。繁雄もさらに追及するのは止めた。もう少し検討してから相手の弱点を見つけようと思った。

その後、説明会は終了となり、宴会が始まった。長谷川の組合員からは、補償金はどうのこのの、という声が聞こえた。村中たちは笑っていた。繁雄はいたたまれなくなって、会場を後にした。

桜村屋の出口では、萌美が見送ってくれた。

「あまり愉快な話ではなかったようね」

「何かだまされているような気がする。自然を破壊することはまちがいない」

「長谷川のあの一带はきれいなところですよ。サクラソウも自生しているし……」

「サクラソウ？」

「サクラソウが自生地で咲いているのを見て、その可憐さに虜になったのよ。小さな花なのだけれども、素晴らしくて、わくわくしちゃう。そのサクラソウを栽培して殖やしている人から、いろいろ教えてもらったの。そして、長谷紅という名前の、この地域のサクラソウの鉢を分けてもらって栽培しているうちに、他の品種にも興味を持ち、インターネットで購入することにしたというわけ。思ったより安かったわ。持っているのは長谷紅のほか、浮間白、喰裂髪、南京小桜だけなのだけど。でも、もう今年の開花は終わっているの、花を見ることはできないわ」

「何だかわからないよ。今度花が咲いたときに見せてくれ。旦那さんがサクラソウを好きになつてくれればいいけどな——」

川の水が澄んできたので、アユ釣りが再開した。繁雄も竿を出し、天然アユを三十尾ほど持って帰った。腹に針がかかって、オトリとして使い物にならないアユは食用として冷蔵庫に入れておいた。

翌日も午後から竿を出し、四十尾のアユを釣った。さすがに小倉川である。アユの回復も早かった。繁雄は釣れたアユの種類をしらべてみた。この川では海から遡上するアユのほかに、県の水産試験場で採卵し育てた後、春に放流した人工アユがいる。その数は小倉川全体で五万尾程度である。人工アユは、天然アユと比べると、初期には大きいものの、病気に弱く死にやすかった。

繁雄はアユが釣れたときの感触とその外見によって、人工アユと天然アユをほぼ正確に見分けることができた。引きが弱く、体表の滑らかさに欠ける個体は人工アユである可能性が高かったからである。しかし、例外もいる。そこで、繁雄は四十尾のアユについて、水産試験場の講習会で教わった手法でしらべてみた。鱗の数や下あごにある孔を数えてみ

たのである。

その結果、海産アユか人工アユかが、よくわからない個体が三尾だけ見つかった。しかし、釣れた四十尾のうち、人工アユがせいぜい三尾にすぎないということは、比率としては低い。このことは、天然アユが豊富であるとともに、アユの放流効果が小さいことを示すが、そう結論付けるためには漁期全体にわたって資料を集める必要があった。

漁業協同組合は遊漁料を徴収するために、魚を殖やす活動をすることを義務付けられている。そして、その方法としては種苗を放流するのが手っ取り早い。少し放流して、勝手に遡上してくる天然アユで儲けるのが俺たちだな、まあ商売とはそういうものだ、と繁雄は思った。

翌日も大勢のお客さんが来たので、繁雄はおとり小屋に張りついていてた。すると、彦じいが出てきた。アユが獲れる場合をよくわかっている。繁雄は弱って死んだあと冷蔵庫で保管していたアユを焼いてやった。

「増水の後には、太っているのう」

「俺の河川管理がしっかりしているからだ」

「河川管理というが、この川の上流の自然が保たれているからじゃろう。お前の力ではない。長谷川みたいになったら、終わりじゃからな」

「説明会に行ってきたが、いいことばかり言う。客が増えてアユも売れて、皆が幸せになるんだと」

「わしはあの計画に大反対じゃ。あそこにはサクラソウの自生地があり、そこがつぶされてしまう」

「彦じいはサクラソウを知っているのか？」

「馬鹿たれが。わしを誰だと思っているんじゃ。あそここの自生地を見つけたのはわしじゃ。」

長谷紅という名前も付けた。その一部を自家栽培して増やしたものを、各所に配って系統保存しているんじゃ」

「えっ！ それでは桜村屋に配ったのも彦じいか？」

「そうじゃ。あそこのおやじは嫌な奴だが、萌美は自分の考えを持ったしっかり者だ。安心してサクラソウを預けることができる。道代にも配っている」

「サクラソウって何品種くらいあるんだ？」

「野生のものは別にして、栽培品種は二百くらいかのう。今でも新しく作られているから、実際にはもっとあるかもしれない。野生群落は消滅する一方で、残ったものも人が手を掛

けて維持している。ほんとうの自生地は珍しくなっちゃった」

「それでは、彦じいも反対同盟に入ってくれ。皆で反対するんだ」

「それはできん。わしは浮浪者で乞食、人間の屑とみなされているから、入ったらかえって迷惑がかかる。それにな、説明会ですっかり空気が変わってしまったようだ。反対同盟と言っても、誰が残るか疑問じゃのう。そもそも、川をなくすという話ではないのじゃ。

周りの土地を開発するというだけで、地権者も大半が同意している。川をいじるとしたら、県と町の土木であり、彼らは、安全のためだと主張するじゃろう。人の生命財産と魚のどっちが大切か、おまえは生命財産が失われたときに責任を取れるのか、と言われたらどうにもなるまい。だから、表立って反対しても権力につぶされるだけじゃ」

「それではほかに何か手はあるのか？」

「権力への対抗の仕方はいくつもある。おまえの頭ではわからんかもしれないが、考えて見ろ」そう言って彦じいはアユを頭から飲み込み、酒も飲んで眠ってしまった。

暑くなってきた。気温が三十五度を超えることも度々だった。アユ釣りは最盛期を迎え、アユは日ごとに成長し、また脂も乗ってきた。繁雄は午後になるとせせせとアユを釣り、それを売った。

繁雄の家にはエアコンがなかった。そのために、繁雄は夏になると、いくつかの戸をはずし、川面を流れてくる風が家の中を通るようにした。そうしないと母が汗をかき、辛そうであったからだ。蚊取り線香は炊きっぱなしだった。

それでも暑くてたまらない時には、繁雄は川へ飛び込んで泳いだ。残っているアユの数や大きさを知ることができるので、一石二鳥だった。夜には川の縁にハンモックをつるし、そこで寝た。ムカデに咬まれたり、ハチに刺されたりしたこともあったが、もう慣れた。涼しい野外で寝ると気分がよくなった。

盆が近くなると、どの家にも子や孫がやってきて、集落も活気づいてきた。繁雄の家には誰も来なかったが、アユ釣り客は増えた。帰省した男たちが釣りに来るからである。とくに嫁の実家に来た舅は、家にいろいろのであろうか、一日中釣りをしていたり、繁雄の小屋でうだうだしていたりすることが多かった。

「繁さん、久しぶり」と言った山根和幸はその一人であり、毎年繁雄のアユ小屋にやって来る。

「山根さん、今年のアユはいいですよ。型も大きい」

「このところ嫌なニュースばかりでストレスがたまっているんだ。新聞記者も辛い職業だ

よ。こうしていても、いつ呼び出されるかわかったものではない」

「その分、給料がいいでしょう。贅沢ですよ」

「この川は釣れても釣れなくても気分がいいんだよ。何か癒される感じがする。川が自然のまま、護岸も醜くないからだろうね」

「それが売りですからね、美しい川ではアユもよく育つのですよ」

「だいたいね。嫁の実家なんだけど、居心地が悪いんだよ。俺は酒を飲めないのだけでも、無理やり注いでくる。酒が飲めないことが欠点みたいに言うんだよ。頭の中が保守的で、新しいことを一切受け付けない。このあたりの政治家で相楽という国会議員がいるだろう。あいつの信奉者らしく、何かと相楽先生、相楽先生だ。新しい開発計画を推進しているらしい」

「そうなんです。隣の長谷川で大規模な開発計画があり、高速道路のサービスセンターと絡んでいるようですが、俺たちは反対しているんです」

「知らなかったな。東京でしらべてみよう。さて、午後の釣りに行ってくるかな。少しは釣って帰らないと、また舅はだめだと言われてしまう」

盆になると、釣り人は増え、毎日朝から晩まで攻められるので、アユは釣りにくくなる。しだいにアユは淵の中に隠れてしまい、当たりはまったくなくなってしまう。そんなときに、山根が高校生の甥っ子を二人連れてやってきた。

「こいつら、アユ釣りは初めてなんだよ。なんとか一尾でいいから、釣らしてあげたいんだ。協力してくれないか」

山根の頼みなので、どうしたらよいか、繁雄は思案した。そして、少し下流の水泳場に連れて行った。そこでは大勢の子たちがワイワイ言いながら泳いでいた。繁雄は水泳場の少し上の瀬に山根たちを案内し、そこで竿を出すように指示した。

子供たちが騒ぐことによって、水泳場のアユは上流の瀬に逃げているはずである。ふだんはあまり釣れないポイントでも、このときはばかりは釣れることを、繁雄は知っていた。

山根が竿を出すとすぐによい型のアユが掛かり、それをオトリにして高校生たちは次から次へとアユを釣った。アユを掛けてから、どうやって取り込むかを知らなかったので、繁雄はとりあえず引き抜けと言い、飛んできたアユをたも網で受け取ってやった。山根も高校生も大いに満足してくれた。

やがて盆も終わりに近づき、公民館で宴会と盆踊り大会が開かれた。この時ばかりは参加しないわけにはいかない。繁雄はアユを焼いて持っていった。

村の自治会も山洪家が牛耳っていた。山洪勇三が自治会長を勤め、実務は直哉が仕切っていた。仕切っているといっても、新年や盆の集まりを運営し、自治会費を使う程度であったが、それでも山洪商会の威光を示すのに効果があった。

そのほか、自治会の中に不審者や問題児がいるときには、その監視や警察への連絡を担うこともあった。ここでは、問題児とは繁雄のことだった。

繁雄が宴会場に行くと、道代がいた。宴会場で働いており、料理や酒を手際よく準備していた。

「みっちゃん、ご苦労さま」と繁雄は言った。

「アユ持って来てくれたのね。どうもありがとう」

「アユくらい持ってこないと、おたくの旦那さんに何を言われるかわからないからね」

ほかにも奥さん連中が周りにいた。照枝がどうして来ないのかと訊かれたので、体の調子が悪いと答えておいた。女性は次から次へと話しかけてくるので苦手である。繁雄はもっぱら峰太や山根と雑談した。

子供が大勢集まって来たので、宴会は賑やかに進化した。やがて、盆踊りが始まり、それに合わせて歌う者もいれば踊る者もあり、まさにお盆のクライマックスを迎えた。繁雄は踊る気分になれずに、公民館で酒を飲んでいた。

そこへ直哉がやってきた。

「おまえ、開発計画に反対しているんだってな。ほんとうか？」

「当たり前だろう。川が醜くなるのを見過ぎすわけにはいかん」

「俺たちは皆、あの計画で恩恵を受けるんだ。そんな反対運動などみとめられない」

「俺はお前に雇ってもらっているわけではない。みとめるとかみとめないとか言われる筋合いはない」

「お前なんか、村の恥だ。さっさと出て行け」

「お前こそ、美しい村を食い物にする悪人だ。山洪商会なんか、つぶれてしまえ」

今にもつかみ合いの喧嘩になりそうなところに割って入ったのは道代だった。

「止めてください！」と叫んだ声は思いのほか力強く、直哉も繁雄も一瞬ひるんだ。繁雄は道代に言われた以上、引き下がるしかなかった。もう少しで、直哉が愛人を作り、その愛人が妊娠したことを暴露してしまうところだった。

盆が終わり、漁協では総会が開かれた。反対同盟はもろくも崩れていた。地域の発展のために協力するべきだ、という意見が圧倒的多数を占め、反対意見を述べたのは繁雄と市

井だけだった。長谷川の他の組合員の関心は、補償金がもらえるかどうかに移っていた。組合長の春田は、補償金については組合に一任して欲しいと言い、了承された。

繁雄の意見に対しては、「川がつぶされると言っても、どこでどのような影響が出るのか明確ではなく、それによってアユなどの水産業にどの程度の被害が出るのか算出できない」として却下された。市井は一応反対だと言ったが、立場上そう言わざるをえないという雰囲気であり、何が何でも反対だと言う者は繁雄だけになった。

腹の虫がおさまらない繁雄は、その日の午後、長谷川でアユを釣りまくった。数を釣るための釣りではなく、力任せの釣りをした。太いハリスに五号錘をかませ、一般の釣り人が怖くて竿を出せない激流におとりアユをぶちこみ、特大のなわばりアユを掛けては、強引に引き抜いた。錘が川底の石やゴミに引っかかると、どんな荒瀬でも突入して、おとりアユと仕掛けを回収した。そういう荒いポイントはどこどころにしかなかったもので、繁雄は歩きながら二キロメートルを釣りまくった。最大のアユは、一六〇グラムにも成長していた。そんなアユを一五尾獲って、おとり小屋に戻ったときには、すっかり暗くなっていた。

繁雄は焼きたてのアユを持って、一人でプレジデントへ行った。

「お土産を持ってきてくれるとは珍しいわね。何かあったの？」

「いや、ちよつとね」

「土地開発の件でしょう。この界限では皆知っているわよ」

「直哉が言いふらしているのだろう。自分の会社の儲けのことしか考えない浅ましい奴だ」「あなたが、自分の川でもないのに、どうして反対するのか理解できない、と言う人が多いようね」

「いい話ばかり聞かされて騙されているんだ。土木や建設で儲かるところはいいかもしれないが、あとはだめだ。あそこでアユが売れると言うが、その分、これまで売っていたところで売れなくなる。年に何万人もの観光客が来ると予想しているが、人口減少時代にそんな数字はあてにならない。地方のレジャー施設なんて、バブルが終わって、どこも廃墟になっているではないか」

「そうかもしれないわね。でも、まあ、それを見ていくのもおもしろいんじゃない」

「おまえは気楽でいいな。開発事業でこの店の客は増えるかもしれないな」

「ほんとうにひねくれ者なんだから。そう言えば、桜村屋の萌美さん、来週結婚式だって。

お父さんはいかつい顔をしているけれど、萌美さんはきれいな花嫁さんになるでしょうね」

「政略結婚か。こういう田舎の女は、美人になればなるほど不幸になるんだな」
「あなた、萌美さんのこと好きでしょう。道代さんの次くらいに」と言ってみぐみは笑った。

3 オオタカとサクラソウ

繁雄はサクラソウについてしらべてみた。

彦じいと言っていたように、サクラソウには多くの品種があり、野生種に近いものと、人為的に見栄えがするように改良されたものがあるらしい。

花が大きく鮮やかであったり、花びらが二重になっていたりするものは、園芸用改良種である場合が多かった。一方、本来の生息地に残る野生種は年々減少しており、北海道の研究者が自費で生息地を買い取って保護したことが話題になっていた。埼玉県には特別天然記念物に指定された生息地があり保護されているが、保護されずに絶滅した地域も多いらしい。

一方、園芸用品種については、所有者や販売業者が勝手に名前をつけている場合があり、あてにならないことがあるらしい。それでも、新しい品種をつくっている大阪や仙台の大家は信用できるらしい。萌美が持っていると言っていた品種は、野生種か、それに近いものばかりであった。それを教えた彦じいはそれなりの識別眼を持っているようだ。

サクラソウの長谷紅は開発を止める武器になるかもしれない、と繁雄は思った。

インターネットでしらべているうちに、この地域で自然保護活動を行っている高校教師に気がついた。堀場純一という名前で、日本野鳥の会と自然保護ネットワークの会員らしい。繁雄は堀場に連絡を取り、長谷町の喫茶店で会うことになった。

堀場は理知的な感じの男だった。小柄で、威圧感はなかった。初対面の繁雄を旧知の友人と会うかのように接してくれた。

「あの土地開発については私たちも憂慮しているのですよ。それに対して、漁協の一員であるあなたが反対されていることに少なからず驚きました。私たちの情報では、漁協は開発に賛成と聞いていたものですから……」

「初めは反対だった人たちも、地域活性化とか補償金とか調子の良いことばかり聞かされているうちに、変わってしまったようです。しかし、私は反対です。今後の見通しはどうでしょうか？」

「現在、開発が希少動植物やその他の環境へ与える影響が知られています。その結果を見て戦略を考えたい、と思っています」

「そうですね。それではサクラソウを配慮して、計画が中止されることもあるのですね」

「アセスメントというのはそういうものです。しかし、調査をするのは開発側の会社ですから期待はできません。私たちはどういう結果が出されるのかを注視するとともに、サクラソウやその他の生物について独自に調査をしています。サクラソウの自生地は少なくなっており、全国的に保全運動が高まっています。ただ、どの程度配慮すればよいのかについて、定説はありません。環境省のレッドリストにおいて、サクラソウは絶滅危惧種に指定されていたのですが、つい先日、準絶滅危惧種に降格されました。つまり、それほど絶滅の危機にないということになりました。私たちは、その評価はおかしい、私たちの県ではほんとうに絶滅しそうだと考えています。しかし、そういう状況ですから、自生地の周囲だけ囲って保全すると言われたら、その周囲の土地開発を止めることはできないかもしれません」

「そうですね。いろいろむずかしいですね。それでも、先生のお話を聞くことができ嬉しいです」

「今度、現地で観察会をするので来てください。そうだ、川魚についても講師をしていただけませんか？」

「わかりました。連絡を待っています」

繁雄はともかく一歩前進したと感じた。漁協はあてにならない。自然保護の人たちといつしよに活動しようと思った。

帰り道で偶然、萌美に遇った。

「このたびはご結婚おめでとうございます」

「繁雄さん。お久しぶりね。この前の集会では嫌な思いをさせてしまっごめんなさい」

「お父さんはお元気ですか」

「元氣すぎて困ったものよ。私の夫はおとなしいだけの人なので、完全に父に牛耳られている。父も嫌いだけれど、夫にもうんざり。何にも興味がなく、ごろごろしているだけでつまらない男。少しは働くように言ったら、怒ってサクラソウの鉢を放り投げるのよ。結婚は失敗だったわ」

「いいのかい、そんなことを言って。俺がこの話をよそで喋るかもしれないよ」

「どんどん喋ってちょうだい。それがもとで離婚できれば嬉しい限りよ」

「そのうち愛着が湧くかもしれないよ。今は結婚したてで憂鬱になっているだけさ。もつと気長に考えよう」

「他人のことだと思うから、そんなことが言えるのよ」

萌美は繁雄をじっと睨んだ。

萌美の気迫に押された繁雄は、「じゃあ」と曖昧に言って別れるしかなかった。

翌日、オトリ小屋にいと峰太がやって来た。

「久しぶりだな。開発反対派の俺を避けていたんだろう」

「そんなことはないです。ただ忙しかったので」

「直哉はどうしてる？」

「仕事は増えており、会社は順調です。社長は子供ができたとはしゃいでいますよ。裕子ママの赤ちゃんの父親は自分だ、と思っっているようです。もちろん、このことは道代には内緒ですよ」

「どうするんだろう」

「もし、裕子ママの子供が社長の子だと確かめられたら、社長は道代と離婚せざるをえなくなるかもしれない。それでママと結婚すれば、プレジデントは終わっちゃいますよ。俺たちが息抜きをする場所がなくなるのは嫌です。それに、ママは奔放な性格だから、山洪商會を道代みたいに支えるのは無理です。だから、このままが最高だというわけですよ」

「それでは道代はどうなるんだ？」

「裕子ママの子供のことを知らなければ、どうということはないですよ。ただ、このまま道代に子供ができなければ、辛い思いをし続けることになりますね。道代に子供ができないのは社長のせいではなくて、道代に問題があるということになるので。だから道代は一生負い目を感じて生きることになるかもしれません」

「そんなことを俺は許さない」

「もし、社長と道代が離婚して、社長が裕子ママと再婚したら、道代は捨てられたようになってしまい、やはり可哀想でないですか。どっちにしても地獄ですよ」

「直哉を襲ってやろうか。昔からずっと考えていたんだ」

「だめですよ。社長を殴ったり刺したりしたら、あいつらの思うつぼですよ。今や、兄貴は地域の敵ですからね」

「……」

「ちよつとアユを釣ってきます。オトリください」

「渇水気味でむずかしいぞ。淵で泳がせれば大物が出るかもしれない。でかいのがつれたら持って来い。漁協のホームページに載せてもらうから」

アユの友釣りの方法は、引き釣りとは泳がせ釣りに大別される。引き釣りでは、竿を上流に引きながら、アユを自分の入れたいポイントに誘導し、その後もラインのテンションを保つ。一方、泳がせ釣りではラインのテンションを緩め、アユが自分の力で泳ぐのをコントロールしながら、追われるのを待つ。泳がせ釣りではラインが流れの抵抗を受けないように、極細のラインを用いるほか、オトリアユを泳がせる技術がいる。早瀬では引き釣り、とろや淵では泳がせ釣りを行うことが多いが、技術があれば瀬でもアユを泳がせることができる。すれたアユは、オトリアユが自然に泳がないと追わないことがあり、渇水この時期には泳がせ釣りが向いていた。

峰太が釣ってきたアユは粒ぞろいであったが、どれも一二〇グラムくらいで、ホームページに載せるほどではなかった。それでもこの時期に十尾以上釣ってきたのだから、峰太は繁雄の弟子である。二人で一尾ずつ味わい、残りは峰太から道代に渡すことにした。

生物の観察会が開かれたのは、次の日曜日だった。集まったのは、繁雄と堀場のほかに、堀場の高校の生物部の学生が五人、小学校の先生が三人、それに野鳥愛好家の老人が五名の合計十五名だった。皆、双眼鏡やデジカメを持っていた。

まず最初にサクラソウを見に行った。すでに花は散り、茎と葉だけがわずかに残っただけであり、これがサクラソウだと教えられないとわからなかった。学生たちがときどきやってきては、雑草を引き抜いているらしい。生息地は幅十メートル、長さ三十メートルばかりの広さで、周囲をロープで囲われていた。

堀場は、このサクラソウの花は淡いピンク色で、花卉の切れ込みが深く、茎は長めだと説明したが、花の時期に見てみないとわからないとわからない、と繁雄は思った。

そのうち、学生の一人がロープの中でサクラソウが踏みつけられた跡があると言い出し、皆で確認した。偶然入ったというよりも、意図的に踏みつけたようであった。

「こまめに来て、確認しないとだめだな」と堀場は言い、学生たちに見回りするように指示した。たったこれだけの生息地だったら、ちよつとしたことで破壊されてしまう、と繁雄は思った。今回の踏み荒らしは開発派の仕業にちがいない。

次に、森の中に入って、野鳥の観察をした。かつては、この辺りで希少なオオタカが営巣していたことがあったらしいが、最近では見ないらしい。それでも、堀場たちはコゲラやカツコウなど二十種あまりの野鳥を見つけることができた。繁雄が見つけられなくても、

ベテランの愛好家がびったりと焦点の合ったフィールドスコープの画面を見せてくれたので、勉強になった。

その後は繁雄の出番だった。まず初めに投網を打ち、アユのほかウグイ、オイカワ、カマツカ、カワムツなどを捕った。皆、大喜びで、とくに高校生はアユを触って歓声を上げた。老人たちが食べたいと言うので、捕れた魚をアユ缶に入れて、川につけた。

次に、用意しておいたタモ網を使ってみた。石をひっくり返したり、草の下をガサガサと足で掻き回したりして、下流に構えたタモ網に追い込むのである。この漁法では、カジカ、アカザ、タカハヤなどが捕れた。高校生の女の子たちが裸足になって挑戦した。白い足が太陽の光で一層白く見えた。何て気持ちが良いひとときなのだろう。繁雄は開発のことを忘れることができた。

夕方、スーパーに立ち寄った。日曜日の午後五時。先日、道代がいたのと同じ時間である。長谷の件で、繁雄は山洪商会には行きにくくなった。道代に遇えらしたら、この場所しかない、と思ったのだ。野菜売り場から魚を置いてある一角に向かうと、道代の後ろ姿があった。髪の毛は束ねておらず、肩にかかっていた。

「みっちゃん、元気かい」

「こんばんは、繁雄さん」

「山洪商会は順調なようだね」

「それは皮肉で言っているの？ 乱開発で儲けている、と言いたいのでしょう」

「そんなことはないよ。まだ長谷の事業は始まっていないのだから」

「大手と絡むと、いろいろと仕事回ってくるのよ。でも私はそれほど嬉しくないわ。何でも引き受けて儲かるかもしれないけれども、私としては皆が幸せになる事業を請け負って欲しい。サクラソウの自生地がつぶされるのも嫌だわ」

「サクラソウの鉢を育てているんだって？ 彦じいに聞いたよ」

「少しだけだけど、大事にしているわ。サクラソウは簡単に殖える植物ではなくて、夏から冬にかけては葉も茎も枯れてしまうの。肥料や水のやり方が悪いと、根が萎縮したり、次の芽が出なかつたりする。冬には根を取り出して、植え替えてあげないといけない。それから、ヨトウムシなんかがりつくと、葉を撒かなければいけないの。とても苦勞するのだけれども、それだけに春に開花すると、とても嬉しいのよ」

「直哉は何と言っているんだ？」

「あの人は、お金が入れば嬉しいだけの人よ。サクラソウを見てきれいだと思うような人

ではない。それに、最近は夫婦の会話もない。家に帰って来ないことも多いのよ。繁雄さん、あの人がどこに行っているのか知っているなら教えてくれない？」

「さあね。飲み歩いているんじゃないか」

「私、赤ちゃんが欲しいのだけどできないの」

「大丈夫、そのうちできるよ」

「そうね」

そう言って道代は帰っていった。

夏も終わりを迎えていた。アユを焼くと卵巣や精巣が目立つようになってきた。雌アユは子持ちアユと言われ、重宝される。

釣れるアユは重くなっていったが、数を獲ることはむずかしかった。この頃には、放流された人工アユはほとんど見られなくなり、釣れるのは天然アユばかりである。その中で、まだ十五センチに満たない小型アユが釣れることもあった。これまで群れていたアユが、ようやくなわばりをつくったのであろう。可哀想であるし、帰っても売れないので、繁雄は小さなアユを放流した。

土地開発についての住民説明会が公民館で開かれた。今回、漁協関係者は繁雄と市井だけであり、主な出席者は長谷の地権者や自治会関係者だった。堀場も参加していた。

直哉が司会役を勤め、その補佐として道代も出席していた。初めに飯井の社員がパワーポイントを用いて計画の概要を説明し、ついで町の担当から地域振興のすばらしいモデルケースになるとのプレゼンテーションがあった。先日の漁協向けの説明とそれほどちがわなかった。

質疑応答の時間となった。住民からは工事にもなう騒音やトラックの運行量についての懸念が示された。飯井の社員は、夜間は工事をしないこと、土砂の運搬はできるだけ避け、開発地域内で生じた土砂は、開発地域内で使うことによって、無駄を省くことなどが説明された。

「希少生物の保全はどうするつもりですか？」堀場が訊いた。

「現在、環境アセスメントをまとめているところであり、詳細は申し上げられませんが、希少動植物については十分に配慮するつもりです」と担当者が答えた。

「サクランウについては把握されているのでしょうかね」繁雄も発言した。

「もちろんです。我々は自然を破壊して開発しようとするではありません。自然と共生

し、そのすばらしさを多くの人たちに知ってもらうために、この計画を実行するのです。ですから、皆さんがこうして欲しい、と思われることはできるだけ取り入れていくつもりです。希少生物についても皆さんには独自に調査、研究していただき、その成果をどしどし教えてください。地域の皆様と理解し合い、創り上げていきたい、と願うものです」と言ったのは村中だった。

さすがにこう言われると、それ以上何の意見も出なかった。しかし、どのような開発も、初めはこのような理想が唱えられるが、実際にはちがうことが多い。私は堀場と今後とも注視していくことを確認した。

九月に入り、少し涼しくなってきた。雨が降り川は生き返った。友釣り客も再び増えてきた。繁雄も午後から川に入り、二十尾の良型アユを持ち帰った。すると、彦じいがやってきた。このじいさん、どこかで俺を監視しているのかもしれない、と繁雄は思った。タイミングが良すぎるのである。

腹に針がかかって弱ったアユを焼いてやった。

「住民説明会に行ってきた。村中の奴、自然と共生すると言いやがった。必要なことは何でも取り入れるから研究しろ、と提案したんだ」

「何が何でも開発したいのじゃろう。しかし、近頃はごり押しの開発はうまくいかないことが多いから。自然を大事にしようんじや」

「どうしたらいいと思う？」

「そうじゃなあ。せっかくそう言うのだったら、自然研究会でもつくって、事業に口出ししてみたらどうじゃろう」

「メンバーは俺と堀場先生と高校生、それに彦じいか」

「馬鹿じゃのう。もっと気のきいたメンバーがおるじゃろう」

「わからんのか？」

「萌美と道代じゃ。おもしろいではないか。開発側の身内をメンバーに入れるんじや」

「……」

「嫌なのか」

「嫌ではないが、引き受けてくれるかな。それに彼女たちが板ばさみになったら可哀想だ」

「お前は二人をわかっておらんのか。どれだけ強いかわらないのじゃな」

「俺から誘ってうまくいくかな？」

「わしが加入させてやる。心配するな。おもしろくなってきたな。ワッハッハ」

会の名称を堀場と話し合った結果、小倉長谷自然研究会とすることにした。繁雄が中心メンバーとしてなっている以上、長谷だけにしない方がいい、と堀場が言ったからである。そして、彦じいと言った通り、萌美と道代も参加した。ほかに峰太と三人の高校生も加わった。顧問は彦じいである。一回目の顔合わせを桜村屋で開いた。

「みっちゃん、よく参加してくれたね。直哉は怒らなかつたかい？」

「不満そうだったけれども、村中さんが調査・研究せよと言ったのだから、止められないわ。私も山洪商会のことを忘れられるので嬉しいのよ」

「直哉は好き放題して遊んでいるのだから、みっちゃんも少しは好きなことをした方がいいよ」

「繁雄さん、こういう場所では道代と呼んでくれない？ ちゃんづけは恥ずかしい。それから、私は萌美さんとサクラソウについてメールで情報交換していたのよ。実際に萌美さんのサクラソウを見に来たこともある」

「え、萌美と知り合いだったのか？」

「そうよ、繁雄さんのこともよく話していたのよ」と萌美が言った。

「どうせ、悪口だろう」繁雄は照れて言った。

「高校生は初めての人が多いから、私から紹介しよう」と堀場が言い、山口翔、飯沼玲、深沢優衣が紹介された。自然観察会に来ていた高校生であった。山口は積極的に発言し、何でも自分でやってみようとする子だった。体格がよい。飯沼は大人しくて、あまり発言しないが、冷静で頭の良さそうな子だった。深沢は人の笑いを誘うことが多いお茶目な子だった。

「今後のことだけでも、私としてはNPOを立ち上げたいと思っているんだ。それで皆さんの意見を聞きたい」と堀場が言った。

「NPOって何ですか？」繁雄が訊いた。

「民間の非営利団体の略称だよ。利益を上げててもよいが、それは事業に使うこととし、会員に配分してはならない組織のことを言うんだ。宗教や政治のための活動は禁じられている。自然保護のNPOは全国各地で活動しているよ」

「それをつくってどういう意味があるのかしら？」萌美が訊いた。

「一番大きいのは知名度が上がり、会員を集めやすくなることだ。知事にみとめられた正式な団体だから、女性も入りやすい。団体として口座を開設し、寄付や助成を受けることができる。税金についても優遇される」

「それではデメリットは？」萌美が畳み込むように訊いた。

「それはわしが答えよう」

彦じいが初めて口を開いた。

「毎年、活動内容を報告することが第一の問題じゃ。予算もきっちり管理しなくてはならん。仲たがいで解散するときも、ただ終わりというわけにはいかない。そして、もし活動内容に敵対する勢力が現れた場合には、その標的にされるかもしれない。そういう覚悟も必要じゃ」

「おもしろいわ。私は賛成よ」と言ったのは道代だった。

「経理は私が引き受けてもいい。でも私たちだけで認可が取れるかしら？」

萌美も乗り気だった。

「おいおい、二人とも、そんなに積極的でいいのか。身内が怒って何をするかわからないよ」

繁雄はほんとうに心配して言ったが、二人とも笑うばかりだった。

「確かに、このタイミングで活動することについては、町や県はおもしろく思わないかもしれない。学者の先生に入ってもらおうか」と堀場が言った。

「それならわしに考えがある。少し時間をくれ、交渉してみるわい」

彦じいは学者との付き合いもあるらしい。それにしても急展開になったものだ。漁協が頼りにならない、と気がついた時点で終わりかと思っただが、これからおもしろくなりそうである。そして、繁雄は道代と萌美に定期的に会えることが嬉しかった。

九月も半ばになって、アユの腹はますます膨れ、オレンジ色の婚姻色が目立つようになってきた。アユの行動も慎重になり、一日中釣れるのではなく、午後からぼつぼつ掛かり始め、日没時に入れ掛かりになることが多かった。

成熟するにつれて、アユの肉質は落ちてきたが、子持ちアユは高く売れた。肉よりも卵を食べるためである。繁雄は釣ったアユのうち型の良い雌を選んで、旅館や料亭に売った。

子持ちアユを十尾ばかり焼いたものをお土産にして、久しぶりにプレゼントに行った。

「おいしそうね。ありがとう。お客さんも喜ぶわ」めぐみが出迎えてくれた。

「ママはまだお休みか？」

「出産は終わったのよ。今は赤ちゃんを育てるので手一杯らしい」

「父親は現れたか？」

「私はときどきママのマンションに行って、手伝っているのだけれども、そこで出会うの

は直哉さんだけね。やはり、あの人が父親だと思うけれど、確証はないわね」

「ほんとうに道代は可哀想だ」

「あなたたち、開発反対派のグループをつくったらしいわね」

「よく知っているな。でも開発反対派ではない。自然を守る会だ」

「似たようなものでしょう。相当話題になっているわ」

「俺も有名になったか」

「あなたのことなんか、話に出ないわよ。道代さんと萌美さんが加わったということがゴシップなのよ」

「そうかな」

「あの二人はもともと、この地域では人気があったのよ。その二人が身内の事業に牙をむいたのよ。これがゴシップにならないわけがないでしょう」

「そうだとすると、調査・研究してみると、なんて言った村中は失言したことになるな」

「村中さんも、まさかお嬢さんがこんな活動をするとは思ってもいなかったでしょうね。」

これから、どうなるかわからないわね」

「俺にできることは何かな。頭の良さでは他のメンバーにかなわないからな」

「それは肉体労働でしょう。道代さんや萌美さんの手足になって働くのよ」

「それはいいけどな。でも、俺にしかできないことがほかにないか、よく考えてみるよ」

そう言って、繁雄はプレゼントを後にした。夜風が涼しくなってきた。アユが下流の産卵場へ向かって川を下り始めた。サクラソウも環境の変化を感じているだろう。

小倉長谷自然研究会の事務局は桜村屋となった。顧問として、県外にある椿原大学の重村一太郎教授に加わってもらうことになったが、先生は忙しいので、たまにしか来れないという。研究会では、毎月一回、月曜日の夜に例会を開くこととした。そのほか、必要に応じて、フィールド調査に出かけることにした。

第一回の例会では、高校生がサクラソウについて発表することになった。繁雄には、このあたりの川魚について説明して欲しいとの依頼があった。ただ彦じいは、勉強は苦手だと言って来なかった。

まず初めに、山口がサクラソウの生態について報告した。

「サクラソウは江戸時代に園芸用品種が多くつくられました。野生のサクラソウは土地開発や乱獲によって次々に絶滅し、現在では限られた県にしか分布していません。河川敷

のヨシ原のほか、カシワ林やミズナラ林の明るい林床に自生していることが多いですが、牧草地や水田、その周囲の農業水路の土手に生えていることもあるそうです。長谷のサクラソウはミズナラ林から流れてきた支流の河川敷にあります。サクラソウは、春に他の植物に先駆けて芽生え、サクラの花が終わった後で開花します。その後、葉も茎もしだいに枯れて夏を迎えるので、夏以降に自生地に行っても根茎しか残っていません。サクラソウが芽生えるときに、他の植物が繁茂していると、サクラソウは光を受けることができずに枯れてしまいます。そのために、サクラソウには、春に光が当たる環境が必要であり、人為的に火入れをする野焼きは好ましいと考えられています。川や湿地の近くでは、増水にもなつて上流から栄養分が運ばれるので、サクラソウは育ちやすいようです」

山口の説明はわかりやすく、繁雄でも十分に理解することができた。質問も出なかった。次に飯沼がサクラソウの殖え方について説明した。

「文献（1）によると、サクラソウには、受粉によって種子をつくる場合と、根が伸張し多くの芽生えを生む場合があります。根が殖えるとやがて、本体から分離し、遺伝的に同質のクローンができます。しかし、根が殖える方法では、遺伝的に均質な個体しかできず、やがて絶滅すると言われています。遠方の個体との受粉を可能にするのは、花粉を媒介するトラマルハナバチやその他の訪花昆虫ですが、これらは近年減少してしまい、機能しなくなっています」

「遺伝的に同じだったら、どうして絶滅するの？」と萌美が訊いた。

「人間でも近親者との結婚は禁じられていますが、それは有害な遺伝子が蓄積され発現されるのを防ぐためだそうです。サクラソウでも、遺伝的多様性が低いと発芽率やその他の活力が失われるそうです。それに、クローンだけでいいなら、そもそも花なんか付ける必要はないでしょう」

「どうしてトラマルハナバチが重要で、それは減ってしまったのかしら？」

道代も訊いた。

「花にはめしべとおしべがあり、おしべでできる花粉がめしべの先の柱頭というところに付着することによって受粉することは、皆さん御存知ですよ。小学校で習ったはずです」

繁雄は、そうなのか、人間と同じか、と思ったが黙っていた。

「一部例外がありますが、サクラソウの花には、おしべの先にあり花粉ができる葯という器官の位置が高く、柱頭が低い位置にある短花柱花と、その逆の長花柱花の二種類があります。どちらの花を付けるかは、クローンによって決まっています。ただし、受粉は同じ

タイプの花どうしてはむずかしくなっています。トラマルハナバチの大きさと形は、このサクラソウの花の形にぴったりと合い、花の蜜を吸うときに、異なるタイプの花に自然に受粉させられるのです」

「受粉に成功すれば、やがて種子ができて、そこから芽生えるというわけね。やはり、同じクロンどうしの交配を避けているのね」と萌美が言った。

「生物部の活動でわかったこともあるのですよ。深沢、説明してみなさい」

「それでは説明します。私、頭が悪いから変なことを言っても許してね」そう言って、深沢が自分の頭を両手の拳で叩くと、皆は一斉に笑った。

「長谷川の自生地では、ヨシ原の野焼きが毎年行われており、そこからサクラソウが芽吹いてきます。県道から離れたところに生育しているので、一般には知られておらず、そのために乱獲はほとんど行われていません。ただ、サクラソウが生育しているのは狭い範囲であり、その一群落しか残っていません。県下の他の生息地はすべて絶滅してしまったようです。昆虫による受粉はありますが、すべてこの群落内で行われているにすぎません。遺伝的多様性はしらべていませんが、低いと思われます。株数は四百くらいですが、ジェネットは十くらいです」

「ジェネットって何のこと？」繁雄は思わず訊いた。

「すいません。サクラソウは花の色や形の微妙なちがいから、同じクロンかどうかかわかるんです。ジェネットとは、クロンの種類数のことです」

「それならわかる」と繁雄は納得した。

「それから長谷では、二つの花タイプの比率が半々ではなくて、長花柱花が全体の七割を占めています。このことも長谷のサクラソウ個体群が衰弱していることを示しています。健全な個体群ならば、半々になるはずですよ」

「なかなかわかりやすい説明だった」と堀場が褒めた。

「ほかに質問ありませんか？」

「サクラソウは環境省のレッドリストではどういうカテゴリーになるのですか」

道代が訊いた。

「サクラソウは準絶滅危惧種です」と山口が答えた。

最後に川魚について繁雄が話をした。

「開発予定地の辺りは、長谷川では上流と中流の間くらいに当たります。多い魚は、アユのほかウグイ、カワムツ、オイカワ、アブラハヤなどのコイ科魚類とヨシノボリやウキ

ゴリなどのハゼ科魚類です。ほかに底生魚のカマツカ、カジカ、アカザがおり、春や秋にはヤマメやイワナも釣れますよ。大した希少魚はいませんが、先日の観察会で捕まえたアカザは絶滅危惧種です」

「ちよつと待ってください。絶滅危惧種つてことはオオタカやサクラソウより希少つていうことですか」と飯沼が訊いた。

「でもアカザなんてどこにもいますよ。小倉川ではときどき罟で捕まえて、天ぷらやから揚げにして食べるんですから」

「絶滅危惧種を食べてもいいのですか？ うっそー」深沢が大げさに驚いて見せた。

「アカザは絶滅危惧種の中ではもつとも低いカテゴリーだし、そもそも絶滅危惧種でも種の保存法などの法律で守られていなければ、獲っても罰せられることはないのだよ。アカザは、長野県のある川では一箇所から二千尾出現したこともあるし、たくさんいると思うよ。魚と鳥や植物では、評価委員が異なるから分類も変わるのではないかな」と堀場が言った。

繁雄はよくわからなくなっていた。淡水魚では、絶滅危惧のランクがもつと高い種でも捕獲できるし、インターネットで売買されていた。天然記念物に指定されている魚の生息地ですら、破壊されてしまうことがある。生物によって評価も対応も異なるのであろうか。

「これはむずかしい問題だから、次までの宿題としよう」と堀場が提案した。

「でも、オオタカやサクラソウは自然保護のシンボルなんだと思うよ。全国に分布していて、比較的よく眼にすることができるところこそ、自然の現状をあらわす指標になるんだ」

堀場の言うことはもつともだ、と繁雄は思った。しかし、それで長谷の開発を変更できるのか、繁雄にはわからなかった。

「道代に訊きたいのだけど、あれから直哉は俺たちの活動について、何か言っていたかな？

どうにも気になるのだけれど」

繁雄は話題を変えた。

「私、主人とほとんど話をしないので、よくわかりません。あまり家に帰って来ないし、どこかに別の奥さんと子供がいるのではないかしら」

一瞬、場に緊張が走ったが、繁雄は何も言わなかった。道代は知っているかもしれないし、あてずっぽうで言っただけかもしれない。

「父も何も言ってこないわ。自分で提案したことだから、いまさらだめだとは言えないのよ」と萌美が言った。

「よし、これで一回目を終えよう。NPOについては原案を作ってみるよ」
堀場が締めくくった。

アユ釣りも溪流釣りも、九月末日で禁漁となる。雨が断続的に降り続け、川は良い状態になっていた。九月最後の日曜日には朝早くから多くの釣り人がやってきた。今頃来る客はほとんどが年券を持っており、収入源になるのはやはりオトリだった。天然アユだけでは足りないので、繁雄は養殖アユを仕入れていた。この日は新たに百尾の養殖アユを用意していたが、一日で六十尾が売れた。最後の稼ぎ時である。

この時期には、どの川でも、投網やてんから網、引つ掛けなどの漁が行われ、友釣りを自由にできる川は少ない。繁雄はほかの小倉川の組合員とともに、この川を周年友釣り専用区とすることにした。アユを根こそぎ捕ってしまうことを避け、資源を守るためである。その結果、秋になっても釣り人が多いのである。

夕方になって、オトリ小屋で峰太と飲んでいたら、彦じいがやってきた。

「彦じい、勉強会に来なかったな」

「仕事があつて行けなかったのじゃ」

「仕事？ ただ、物もらいに行っていたのではないのか？」

「それなら、桜村屋に行った方が、いいものを食わしてもらえるじゃろう。そうではないんじゃない」

「俺は知っているよ。キノコだろう」

「ちょうど良い雨が降って、キノコが出てきたんじゃない。マツタケが湧いてくる場所があるからな、わしにしかわからんところに」

「一日いくら儲かるんだ？」

「一本二〜五千円として、十本以上は採れる」

「人の山に入ったら捕まるぞ。夜警団もできているらしいから」

「これ以上は言わん。お前らに知られては困るからな」

「ところで村中は、自然を守る会に何も言ってこない。潰しにくると思ったのだけど」
「そんなこともわからんのか。相変わらず馬鹿じゃのう。あいつらは、土地のめどはつけたが、開発事業の最終認可はまだ受けておらん。知事の認可を取るためには、環境アセスメントの結果を公表し、住民の支持も得ないといかん。そのために、身内が自然の会をやっていることは、かえって都合がいいんじゃないよ」

「それでは自然は守られるということか？」

「ほんとうにおまえは馬鹿じゃのう、ワハハハハ」と言って彦じいは山へ帰っていった。

それから一週間ほどして、環境アセスメントの結果が公表され、それを基に住民説明会が開かれた。場所は町役場の会議室である。今回は、地権者、自治会、森林組合、漁協それに小倉長谷自然研究会から、それぞれ数人ずつが参加した。

アセスメントの担当者はパワーポイントを使って、要点を要領よく説明していった。

「開発区域は二百ヘクタールに及び、施設が建設される観光エリアと自然を学び楽しむチュラルエリアに分けられます。観光エリアでは水田、畑、荒地を整備しますが、自然の地形を利用し、山を崩すことは極力行わないようにします。広い駐車場と遊園地のほかに、道の駅が建設されることになっています。一方、自然エリアでは、アスレチック体験ゾーンが手前に造られ、奥には遊歩道や展望台、自然探検ゾーンなどが整備される予定です。希少生物には極力配慮し、オオタカが生息するかもしれない地域は野鳥保護観察ゾーンとして整備し、サクラソウの自生地は人が立ち入らないように囲んで保護します。長谷川の一部には、魚類や両生類と触れ合う親水レクリエーションゾーンが設けられ、裸足で川に入って魚の手づかみができるようにします」

質疑の時間となった。

繁雄は真っ先に手を挙げて、川への影響についてどういう予測をしているのか質問した。「工事にあたっては、排水部分に貯水池を設けることによって、濁水がそのまま川に流入しないようにいたします。アユの時期に濁水が生じた場合には、前年実績と比較しつつ、補償金を組合に支払うことを検討しています。そのほか、部分的に護岸工事をしますが、これは住民の安全と川に親しむレクリエーションのためです」

繁雄がもつと訊こうとしたら、その前に組合長の春田が「よろしく願います」と叫んだので機会を逸した。その後、住民から騒音被害や大気汚染についての質問があったが、大きな問題はないとの回答だった。新しい職員の採用にあたっては、地元住民を優先するとの説明があり、それから住民による質問もなくなった。

このまま終わってしまうかと思っていたら、萌美が挙手した。

「オオタカについて質問します。今回の事前調査ではオオタカもその巢も見つからなかったという説明でしたが、過去には何度も目撃されています。大規模工事をすることによって、オオタカがこの区域を利用できなくなるとは考えられませんか？」

担当者はひそひそ話したあと、マイクを握った。

「仰ることはよくわかりますが、現在生息していない以上、その行動は追跡できませんし、対策も講じようがありません。この点についてはオオタカが見つかった時点で対応させていたideきたいと思います」

萌美はさらに質問した。

「サクラソウの自生地を取り囲んで保護するということですが、それでは植物園で栽培するのと同じではないですか。サクラソウは長谷の生態系の中で、多くの生物とかかわって生きているのです。種子をつくるためには、花蜂などによる受粉が必要ですし、河川から運ばれる栄養分も必要です。まだわかっていない生物間の関係がサクラソウを支えているかもしれない。それを遮ることになりませんか？」

「サクラソウの生育条件については諸説があり、あなたが言われることは関東地方のサクラソウ群落で主張されていることですが、それが正しくないという批判もあります。サクラソウを食べる動物や、光を遮って枯れさせる植物もいるので、生物間の関係が重要だという指摘はもつともだと思えます。長谷のサクラソウの生態を明らかにしつつ、保全する方針は私どもも支持するものです」

「だから、おまえらが管理するのではなく、サクラソウの自生地をそのまましておくのが一番なんだよ。その周囲一キロメートルを自然保護区にしてくれないか」

思わず繁雄は怒鳴っていた。

「そういう考え方もございますが、近年どこの自生地でも環境教育を兼ねて、サクラソウを市民の方々に見てもらい、その中で保全するのが一般的な保全方法です。専門家の意見を聞きながら、注意深く見守っていきたい、と考えています」

「工事をする事によつて、サクラソウに砂塵が降りかかることの影響は調査されているのでしょうか。少なくともサクラソウが開花し枯れるまでの期間は、工事を止めてもらいたいです」と発言したのは道代だった。

萌美に加えて道代も口を開いたことで、会場はざわついてきた。村中も直哉も苦虫をつぶしたような顔をしていた。

「サクラソウの保全については、明らかに調査不足です。長谷のサクラソウにとって必要な環境条件が何なのかも明らかにされていない。また、工事の影響評価も十分にされていない。したがって、さらに一、二年しらべてから保全策を提案するべきです」と堀場が言った。

担当者はひそひそ話すばかりで、答えられなかった。

そこで村中が立ち上がって、「本日の説明会はこのへんで終わりにいたします。今後の保全についての対応は、専門家を含めた第三者委員会の意見を参考にしながら進めていきたいと思えます」と言うと、一斉に拍手が起こり、それ以上の異議は封じられた。

私たちは、言うべきことは言ったものの、今後の展開には自信が持てなかった。サクラソウについて、さらにしらべて、次の勉強会に備えることにした。

帰り際の駐車場で、道代がアユを食べたいと言ったので、アユ小屋に連れて行った。小屋には彦じいがおおり、私は大型の子持ちアユを焼いた。どこから、コオロギの鳴き声が聴こえた。

「説明会はどうじゃった？」

「何か煙に巻かれたようだった。第三者委員会を立ち上げるそうだ」

「御用学者を集めて工事は認可という筋書きが見えるのう」

「それでは、私たちは負けですか？」と道代が訊いた。

「そんなことはない。あいつらに見たら、予想以上に抵抗されていると思っているじやろう。ただ、おまえらのサクラソウの知識は浅い。ネットや本に書かれていることを信じすぎている。次の勉強会には、わしも参加させてもらおうぞ」

「道代はほんとうに大丈夫か。山洪商会の経営にかかわることだろう」

繁雄は心配して言った。

「あの人は私には興味がないのよ。どこかにできた赤ちゃんのことばかり考えているのだから。経営を支えているのは、あの人ではなくて私よ。私がいなかったら山洪商会はつぶれてしまう。だから、サクラソウのことで私がひどい目に遭うということはありえない。それでも、離婚になったら嬉しいわ。体面を気にして別れてくれそうにないのだから」

「おいおい、やけになっていないか。あの事業がつぶれたら、山洪商会にとっても大打撃だろう」

「そうでもないわ。ゼネコンの下請けの下請けだから利益は少ないのだけど、断ったら次から仕事をもらえなくなるから、断ることはできないのよ。それよりは、どこかで新築の家を建てたり、公共事業を請け負ったりする方が利益が上がる。私がやけになつていたら、子供ができないことくらいね。あの人の子供が欲しいのではなく、あの人に子供ができて、私にはできないことが悔しいのよ。ねえ、繁雄さん、私に子供ができるかどうか、試してくれない？」

「えっ、何てことを言うんだ」と繁雄は驚いた。道代がここまで苦しんでいるとは思わなかった。

「わしもまだできるかもしれんぞ」と彦じいが出たので、三人は爆笑し、今日のもやもやした感情を吹き飛ばした。

照江はますますふさぎこんでいた。繁雄が長谷の開発のことを話しても、よくわからないようだった。ただ、口癖のように、「山洪様にはさからうな」と言うので、それ以上くわしいことは言わないようにした。照枝は、機嫌の良い時には歌を口ずさむことがあったが、調子が悪いと寝込んだままだった。テレビを付けていると、気に入った番組があることがわかった。子供が出てくると、嬉しそうだった。一方、暴力シーンやニュースには関心を示さなかった。

いよいよ禁漁期になったが、紅葉目当ての観光客がやってきてアユ料理を食べていくことがあるので、店を開けていた。アユは冷凍ものを出すしかない。そのほか、繁雄はイワナとヤマメの燻製や、カジカ料理を準備していた。

小倉川ではサケの姿が見えた。サクラマスと同様に、北の海からサケが遡上したことに繁雄は喜びを感じていた。ただし、この地域ではサケの遡上は少ないので、それを捕って卵を取り出し、受精させて稚魚を育てる事業は行われていない。サケを捕って食べることできたら、どんなに素晴らしいだろうと思ったが、増殖のための捕獲以外は禁止されていた。

プレジデントに行くと、すでに数組の客がいた。その中には直哉もいた。繁雄がカウンターに座ると直哉がやって来た。

「うちの道代がお世話になってます」

「いやいや、お子さんができたようでおめでとございます」

「あなたたち、何を言っているの！ 止めなさい」
間に入ったのはめぐみだった。

「自然保護かなんか知らないが、勝手なことばかりしやがって迷惑だ。だいたい何でおまえがサクラソウなんだ。魚とは関係ないではないか」

「山洪商会は自然と人間との共生をめざしているんだらう。工事現場の看板に書いてあつたぞ。そこでは魚が川で跳ねている様子が描かれていた。それともあれは嘘っぱちか」

「めざしているから、何度も説明会を開き、おまえらの活動も容認してやっているんだらう。つけあがるなよ」

「偉そうなことを言っても、山洪商会の実権はおまえにはないらしいな。遊んでばかりいる奴は追い出されるぞ。みっちゃんのことをもっと考えろ」

「人の嫁を馴れ馴れしく呼ぶな。社長は俺だ。あいつの言うことなんか影響しない」

「子どもができたのだから、離婚してあげたらどうだ。みっちゃんを自由にしてやれ」

「うるさい、この川乞食が。おまえとちがって俺は金持ちだからな。嫁は何人いてもいいんだよ。どんどん子供をつくって、山洪商会を盛り上げるんだ。小倉川ももっと改修しないとだめだな。おまえの家の前で改修してやろうか。村を守るための洪水対策だ。町には公共事業の増額を働きかけている」

「山洪商会なんかつぶれてしまえばいいんだ！ そのための活動をしてもいい」

「もうだめ。これ以上言い合ったら、店から出てもらいます」

そう言つてめぐみは直哉を元のテーブルに引っぱった。

二回目の勉強会が桜村屋で開かれた。ちょうど、NPOとして承認されたところだった。そのために、今回は彦じいと重村教授も参加した。

繁雄が桜村屋に入った時に、居間で萌美の夫の努が寝転がってテレビを見ているのがあった。小太りで平凡な顔をしていた。繁雄は努と目が合ったが、努は何の反応も見せなかった。努が説明会や勉強会に出席することはなかった。

勉強会ではサクラソウの生存条件について議論することになった。

「サクラソウについて出版されている本に基づいて、ハナバチなどの昆虫が重要であり、周囲がコンクリート化されて虫がいなくなると困る、と主張したのです。それに対して、昆虫は必ずしも重要ではない、と反論されました。重村教授はどう考えておられますか？」と堀場が訊いた。

「サクラソウの自生地は北海道から九州まで何箇所もあり、それぞれ生育環境がちがうんだ。だから、ハナバチによる受粉が重要な地域もあれば、その他のハムシなどの昆虫や風による受粉が行われているところもある。それから、受粉が重要なのは、異なる遺伝子を運んでくれるからなんだ。そのときに、ハナバチだとかなり遠くから花粉を運んでくれるので、それだけ多様な遺伝子を媒介することになるんだ」

「遺伝的多様性については、前回の勉強会でも話題になりました」と山口が言った。

「ただね、多くの生物でしらべられているのは、DNAのほんの一部にすぎなくて、それも生存に影響しないものを見ていることが多いのだよ。それから、遺伝的多様性は高い方

が良いと思うが、どのくらい多様ならば良いのか、交配しないとほんとうに絶滅するかについてはよくわからない」と重村は言った。

「最近はや」彦じいが口を開いた。

「猫も杓子もDNAじゃ。生物学研究者の大半がDNAばかり見るようになってしまった。彼らはDNAの塩基配列のささいなちがいが意味があると考えたから、遺伝的多様性がないと絶滅するという神話をつくったんじゃない。だが、その証拠は必ずしも多くない。この神話を肯定したいから、そうではない事例や実験結果は無視される、ということもあるかもしれない。もちろん、遺伝的多様性が高い方が絶滅しにくいということもあるじゃろう。だが、それがどの生物についてもあてはまるとは言えないんじゃない。遺伝的に変わらないクローンだって生きているからのう。クローン生物は、その場所に適応した遺伝セットを持っていて、変なものとは交配しないんじゃない。フナなんか、ほとんどがクローンじゃ。クローンが劣っているというなら、どうしてそれが存在するんじゃない。おかしいじゃろう。まあ、遺伝的多様性が低いと危険かもしれない、と考えて保全策を検討するのは必要だと思うがな」

「彦じい、くわしいなあ。どこで勉強したんだ」と繁雄は訊いた。

「この方は大学院でサクラソウを研究していた私の先輩です。私は多くのことを学ばせていただきました」

一同は重村が言ったことに驚いた。浮浪者だと思っていた彦じいが、大学で研究をしていたとは、誰も想像できなかったからである。

「そんな立派な方がどうして……」

誰とはなく一斉に声が発せられた。

「そんなことを訊くな。それより、サクラソウの生態について、もっと考えてみるんじゃない。そう言われても、皆、彦じいのことが気になって仕方なかった。繁雄も、彦じいがどうして研究を止めたのか、あとで重村に教えてもらおうと思った。

ざわついた雰囲気打ち消すように、堀場が話題を変えた。

「それでは、生物部のみんなに、何が重要なのか、思っていることを発表してもらおうか」それに対して山口が答えた。

「サクラソウは春早くに他の植物に先駆けて芽を出し伸長して開花するので、ほかにそういう植物がないことが重要だと思います。サクラソウが光合成をするときに、光が遮られてはまずいのです。だから、サクラソウは森の奥では生育できないのではないでしょう

か」

「私は開花の後が問題だと思います。サクラソウは開花し種子を作ったのちに、枯れてしまいます。他の植物が繁茂している時には、根茎だけが生きています。この時に土が乾いてしまうと、水分を補給できなくて死んでしまうのではないのでしょうか」

いつもはひょうきんな深沢が真剣な表情で話した。

「それは良いことに気がついたね」と重村が褒めた。

「これまでに知られている自生地は、河川敷や小川などの近くにあるか、林縁部で日当たりが悪い場所にある。日当たりが悪いといっても、まったく太陽の光が入らないところはだめなんだ。山口君と深沢さんが言ったように、春には適度に陽が当たり、夏以降に土が乾燥しないことは重要だと思う。だから、サクラソウが芽生える時に、樹木の葉に覆われていないカシワやミズナラの林や、人間の管理下にあつて日当たりがよい河川敷や水田、牧草地に自生しているんだろう。後者では、夏以降に土壌が乾きすぎないことが重要で、そのために水辺が適していると考えられる」

「私はサクラソウがヨシ原に群落をつくることには、何か特別な理由があるのではないかと思います。夏以降はヨシに覆われてしまうのですが、だからといってヨシを刈り取ればいいとは思えません」飯沼が負けじと発言した。

「ヨシを刈り取ったら、土が乾きすぎてしまうよ」と山口が言った。

「春にヨシ原では野焼きをするじやろう。野焼きをすることによって、サクラソウを覆っていた枯れ草やその他の植物はきれいに焼かれて灰になるだろう。そして、それがサクラソウの栄養になるとともに、芽生える時の日当たりを保证するんじゃない」と彦じいが解説した。

「それから、サクラソウを栽培していると、鉢によって根茎が育つ場合と萎縮する場合があります。わしは最初、それが品種のちがいによると思っていたが、必ずしもそうではないようじゃ」

「私もそのことは気になっていました。冬に鉢替えをするときに根茎の状態を見ると、育っていないサクラソウがあり、その場合には花もきれいに咲かないの」萌美が続いた。

「どうやら、根が過密すぎるとだめになるようじゃ。適度に分割したり、間引いてやると勢いが出てくる。だから自生地でも、他の植物に圧迫されたり、虫などに食われたりすることも必要かしらん。わしの友人が酒田におつて、こういうことをよく議論していたんじゃない。サクラソウがヨシやフキと混生することによって、夏以降ヨシやフキがサクラソウ

の根茎の上に被さって乾燥を防ぐことと、これらの植物の芽や茎がサクラソウの根茎を圧迫して割っていくことが重要だと思っている。学会の定説とはちがうかもしれないがのう」

「ところで、今後の情勢はどうなるんだろう」

繁雄はもつとも気になって口にした。

「第三者委員会はサクラソウに配慮して工事を進めるべきだ、と言うじゃろう。その流れは変えられん。そこでわしらが具体的な提案をするんじや。それは工事の仕方や区域を変えることになるかもしれん。そのためには、もっと勉強し、これまでに長谷のサクラソウについてわかっていることを整理して発表していくことが必要じゃ」

今日の彦じいは真面目だった。

「NPOの活動としても、ホームページを開き、会報を出していくことが必要だ。次回までにその原案をつくるから、みんな協力してください」と堀場が提案した。

勉強会の後、彦じいが帰ってから重村から聞いた話は次の通りであった。

彦じいのフルネームは山下彦三郎で、大学院でサクラソウやフクジュソウなど、春に開花する草花の生態を研究していた。その頃は他の若者と変わらずに、大学の近くに下宿しており、服装も普通だった。

彦三郎は優秀な大学院生で、修士課程でいくつかの論文を執筆し、研究者としても成功を期待されていた。ところが、研究室の教授は何もしない人で、その無能さを隠すために、大学院生に自分の論文を書かせていた。そして、自分の研究を犠牲にしても、教授のために尽くす大学院生を寵愛し、そのような院生には簡単に学位を与えた。

彦三郎はサクラソウの研究をライフワークにしたいと考えていたが、教授のための仕事は嫌がった。彦三郎は学位も就職口も与えられずに、いつまでも大学院に留まっていたので貧乏だった。やがて、教授は新しいプロジェクトを始め、彦三郎にはサクラソウの研究を止めて、プロジェクトを推進するように命令した。当時の大学院では、教授の言うことは絶対であり、それに逆らうことは許されなかった。

サクラソウの研究をしたいという彦三郎の意志は固かった。教授の命令にしたがえば、サクラソウの研究を止めざるをえないと考えた彦三郎は、その研究室を辞めて、別の大学でサクラソウを研究しようとした。ところが、そのことをよく思わない教授は、学会中に彦三郎の悪口を言いふらし、彦三郎が研究費を獲得したり、研究職に就いたりすることを妨害した。彦三郎は結局、学位を取得することもできずに、大学や学会から消えることになった。

その後のことは、重村もよく知らなかったが、現在、彦三郎は彦じいとして、この地域の山に住みつき、サクラソウの保全に取り組んでいる。

4 四面楚歌

繁雄は帰り道でこれまでのことを反芻した。自分は漁協の組合員で、アユを中心にした川魚で生計を立てている。その川が荒らされるという危機感から、長谷の開発計画に反対した。森や野をつぶせば、川もだめになるからだ。その時点では、長谷の組合員と共闘していた。この共闘は小倉川で開発計画が生じた時に役立つと思われた。

しかし、その後の説明会や根回しによって、漁協は開発賛成に変わってしまった。雇用、経済振興、補償金、そういったものに皆が心を動かされてしまったのだろう。役所も賛成、漁協も地元自治会も賛成である。

そんな中で、俺は堀場とその生徒、彦じいと重村教授、そして道代や萌美と、NPOを立ち上げた。自分の生計は、川の荒廃よりも、漁協や町を敵に回すことによって、より強く圧迫されるかもしれない。皮肉な話である。けれども、繁雄は楽しかった。なぜだろう。それは、繁雄がNPOのメンバーを好きだからであり、いっしょにいて気持ちが高まるからである。そういうことは、これまでほとんど経験したことがなかった。

自分にとって友人とはアユであり、イワナであり、カジカだった。しかし、魚は人間ではない。アユ小屋に集まる客たちは、しょせん客であった。お金を儲けるための会話は、本心を言えるとはかぎらず、どの客も好きだというわけではなかった。とくに、経済的に豊かな客とは話が合わないことが多かった。嫁や子供のことを聞いても、自分とは次元がちがう世界のこととしか聞けなかった。

そういう生活の中で、彦じいや道代をはじめとして、気に入った人ばかりがNPOに集結した。集結しなかったのは、めぐみと峰太くらいだが、彼らはボスが推進派だから仕方がない。そう考えると、今の活動が繁雄にとって欠くことができないものになっていることに気がついた。

翌日の夕方に、彦じいがキノコを持ってアユ小屋にやってきた。峰太もいっしょにキノコを取ってきたらしい。マツタケも数本あった。とうとう彦じいは、マツタケが採れる場所を峰太に教えてくれたようだ。今日はこれで宴会をしよう、というので冷凍しておいたアユを雑炊にして出した。

「何だかおもしろくなってきたのう。わしもこの年になって人様の役に立つとは思わなかった。楽しくてしょうがない」

「俺は迷惑ですよ。うちの社長と道代の間で、どういう立場をとったらよいのかわからない」と峰太が言った。

「そんなもの、俺たちの味方をするに決まっているではないか。おまえは直哉の様子を探る役目だ」

繁雄は峰太を信じていた。

「社長から、兄貴と道代の動きを探れ、と言われてるんですよ」

「あいつはケツの穴が小さいからなあ。まあ、適当なことを言っておけばいい」

「でも、議員も役所も開発側ですよ。勝ち目はないですよ」

「馬鹿もん！」と彦じいが一喝した。

「開発を中止させようとは思っておらん。そんなのはしよせん無理だ。だが徹底抗戦して、環境に配慮させることができれば、わしらの勝ちだ。そして、それはそれほどむずかしいことではないんじゃないや」

繁雄と峰太は、彦じい大きな声を出すのを初めて聞いた。

「ところで、直哉と村中は、あれからよく会っているのか。ああいう層どうしが仲良く連帯できるとは思えんが」と繁雄は峰太に訊いた。

「この前、社長は、分け前が少ない、と怒っていましたよ。向こうはできるだけ安くすませたい、下請けなんかいくらでもいるみたいな態度らしく、こっちの要望を聞かないらしい。それでも、うちは断るわけにはいかないでしょうね。下請けは厳しいですよ。山洪商会の実務は道代が仕切っています。道代は不平を言わず、コツコツと仕事を進めています。彼女は実直で嘘をつかないので信頼されており、社長は蚊帳の外のことが多くなっています。よそに子供を作ったことで、女子社員から総スカンを食らっていますよ」

「よしよし、ますますおもしろい。峰太もマツタケを食え」

彦じいのご機嫌だった。

掘場から第三者委員会の人選について連絡があった。第三者だから、小倉長谷自然研究会からも開発側からも、誰も選ばれなかった。委員は五名で、県立大学の林学の教授、河川工学の専門家、農業土木の名誉教授、それに県外の私立大学の産業学部の准教授と自然観察インストラクターだった。名誉教授と自然観察インストラクターは女性であった。繁雄はこの人たちについて、インターネットで検索してみた。そして、林学の教授とインス

トラクターを除くと開発推進側のように思われた。

何となくすっきりしないので、繁雄は海釣りに出かけた。川での釣りができなくなるこの時期に、海では大物が釣れ始める。

繁雄は峰太からもらったドジョウをバケツに入れ、港の長い防波堤に向かった。ドジョウの背に針をかけ、テトラの間に落とし込むのである。魚がドジョウをくわえたら、しゃくって合わせ、根に入られないように抜き上げる。この日はカサゴが二尾にアイナメが四尾獲れた。川魚も飽きた頃なので、刺身と煮付けにしよう。照江も喜ぶだろうと思った。

冬の間、アユ小屋は閉鎖するので、どこかで働きたかった。照江がいるから出稼ぎに行くわけにはいかない。土地開発に反対したことは知れ渡っているから、土木で雇ってくれるところはないだろう。山洪商会もだめだから、ハローワークにでも行って、探してみるしかなかった。繁雄の心は重くなった。

次の勉強会も桜村屋で開かれ、萌美の夫は、この前とまったく同じ位置で同じ体勢でテレビを見ていた。今回も堀場と重村は来てくれた。

最初の発表は道代だった。

「北海道のサクラソウは、カシワ林に自生しています。文献(1)によると、カシワは落葉樹で海岸近くに多く、ミズナラなど他の落葉樹に比べて、葉をつけるのが遅いそうです。

そのために、カシワの葉が茂るまで、サクラソウは光を十分に浴びて葉を伸ばし開花できるといことです。そして、暑くなるとカシワの葉に被われることによって、乾燥や高温から守られるのです。カシワ林は山奥ではなくて人里近くにあるので、開発によって伐採されやすく、そのためにサクラソウは危機に陥っている、と考えられています」

「落葉樹の下にサクラソウが生えるというのは、本州でもそうなのですか」と山口が訊いた。

「本州ではサクラソウの自生地はもつと多様です。この点については萌美さんに説明してもらいましょう」

「本州のうち関東のサクラソウについては、前回説明があったとおりです。河川敷のヨシなどに被われる場所に生育するのは、カシワの場合と似ていると思います。河川敷は湧き水や増水時の冠水によって、乾燥しにくい場所だと考えられます。同様に他の地域でも、落葉樹や川などがキーワードになっています。あまり日当たりがよいと土が乾燥してしまうので、自生地は山の南側の斜面ではなく、北や西側にあることが多い、との報告があります」

「それなら、長谷の自生地はどういう位置づけになるのかな？」

繁雄が質問した。

「長谷のサクラソウも川沿いのヨシの中にあり、ところどころで水が湧き、小さなワンドができている場所に残されています。東側と南側にミズナラの林があり、日当たりはそれほどよくありません。ヨシは毎年、火入れによって焼かれており、このこともサクラソウにとつて重要だと思われます。それから、サクラソウにとつては周りの植物も重要なようです。北海道のカシワ林にはフキが生えており、岩手の小岩井農場ではミズバショウが見られます。鳥取では小沢沿いに、ギボウシの中で咲きます。もう絶滅してしまいましたが、山形県の庄内地方ではミョウガやヨコハマズランの中に残っていたそうです。これらの植物は湿り気がある土壌に生育するとともに、冬には枯れてサクラソウの根茎を守るように被うのです」

「なるほど。生育条件も地方によってちがうんだね。それでは、次に生物部の研究成果を発表しよう」と言つて堀場が山口を指名した。

「聞き込みによると、長谷の自生地のほかに、かつては小倉や長谷に十箇所くらい自生地があつたようです。サクラソウが減る原因ですが、第一は土地開発です。現在残っている自生地は林の中や縁が多いのですが、もともとサクラソウは平地にも多く自生していたと言われています。サクラソウの花期は短いですから、花のない時期に開発されて一気に絶滅したのです。水田の周辺では、圃場整備によって消えていったようです。ほかに、人間によって盗まれた例も多いです。自分の庭に移したいというのはましな方であり、掘ってきたサクラソウを売りさばく者もいるとのこと。このほか、湧き水の枯渇、森林の伐採による日当たりの変化、イノシシなどの動物による根茎の被害もサクラソウにダメージを与えます」

「よくまとめているねえ、感心したよ」

重村が褒めてくれた。

堀場もうんうんとうなずき、「問題は今回の開発にどう提言していくかだ。何を守るべきなのか、皆の意見を聞かせてください」と言った。

「サクラソウが引き抜かれたり、自生地の上に施設ができたりする、ということはないと思うんですよ。でも、サクラソウの周囲の土地が大規模に変わるので、その影響があると思います」と萌美が言った。

「まわりの落葉樹やヨシ原がなくなったら、サクラソウは生きていけなくなります。この

点は第一に守られるべきです」と山口が続いた。

「川の状態を変えてはだめですよ。水量が減ったり底質が変わったりしたら、伏流水に影響し、ひいては自生地周辺で土の湿り気が変わってしまう」と繁雄も発言した。

「大規模な開発だから、地盤を強化したり、土砂崩れを防止したりする工事が方々で行われるはずですよ。コンクリートで地面を覆う作業も行われるでしょう。そういう工事は、砂塵を巻き上げ、土壌や大気を変えてしまうと思います。それがサクラソウに悪い影響を与えるかもしれないわ」

道代の意見は当事者だけに説得的だった。

「サクラソウの周囲二百メートルは自然保護区として、杭を打って立ち入りを禁止すべきです。そうすれば、訪花昆虫もやってくるし、土も守られると思います。そのうえで、ヨシの野焼きや下草刈りを行うことが必要ね。夏の乾燥から守るために周囲の落葉樹を残すことも重要だわ」

萌美の言うことももつともだった。

「長谷のサクラソウでは、種子はどのくらいできていますか？」重村が訊いた。

「種子はできていますが、文献にある種子数より少ないです」と飯沼が答えた。

「自生地が一箇所だけになると、その内部だけでの花粉の受け渡しになるので、遺伝的多様性は期待できないですね。ハナバチや野ネズミは十分いますか？」とさらに重村は質問した。

「それはこれからしらべるつもりです。トラマルハナバチなどはネズミが掘った巣の中に棲んでいるのですよね」

山口が確かめるように言った。

「だから生態系全体が守られないとだめなんです」と重村は言った。

「この自生地が広く知れ渡ると、だれかに盗掘されてしまうかもしれない」と深沢が心配したので、繁雄は「俺が守ってみせる。夜警団をつくって巡回しよう」と提案した。

今日の議論はホームページと会報にまとめることになった。その後、懇親会が開かれた。

その頃になって彦じいがマツタケを持ってきた。繁雄は冷凍ものではあったが、アユを提供した。料理はマツタケの網焼きとすきやきにアユ雑炊と豪華だった。

「彦じい、勉強会にも参加せんかい」と繁雄が言った。

「どうもなあ、むずかしい話は嫌なんじゃ」

「昔は研究しておったんだろう」

「だから嫌なんじゃ。わしは落ちこぼれじゃからのう」

「萌美さん、旦那様はいつもあんなふうにごろごろしているのか？」

繁雄は訊いてみた。

「何かをしようという気持ちがないのに、プライドだけは高いトドだわ」

「何のために桜村屋に来たのだろう」

「私を監視するためじゃない。父のスパイかもしれない……」

「萌美さんも道代さんも、美しく聡明で私たちの憧れです。二人のような女性になりたいです」と言ったのは飯沼だった。

「私たちだめですよ。つまらない男と結婚してしまつて。だから、飯沼さんや深沢さんはちゃんとした男を見つけないとだめよ」

道代が笑いながら言った。

そこで彦じいが「わしはどうじゃ。まだ若いぞ」と言ったものだから、一回は爆笑した。

「ところで重村さん、第三者委員会はこういう結論を出すでしょうか？」と堀場が訊いた。

「あの先生方は穏便な方ばかりですから、事業を止めることはないでしょう。一方で、自然には十分配慮するように言うでしょうから、その後でこちら側がどこまで具体的に提案し、それが実行されるかが問題です。開発側は経費を抑えたいでしょうから、そこから先は闘争です」

重村の意見は彦じいのそれと同じだった。

「やりましょう。とことんサクラソウを守るんです！」と萌美が言い、一同は「おお！」と声を挙げた。

秋も深まりつつあった。小倉川の上流に紅葉狩りに来る客はいたが、繁雄の店に食事に訪れる客は例年に比べて少なかった。官公庁や会社による宴会の予約も、一つも入らなかった。冷凍したアユは大量に売れ残りそうである。繁雄は暇なこともあって、照枝が寝入った夜に、プレジデントに通うことが多くなった。

プレジデントでは客が増えていた。めぐみがママとなったからなのか、もえの人気が出てきたからなのかはわからなかった。

「景気がよさそうだな。裕子さんはもう来ないのか？」

「裕子さんは子育てに専念するのだから。山洪商会の跡取りだから、大事に育てなければ、と言っていたわよ」

「とうとうみとめたのか。それでめぐみはこの店をどうしていくつもりだ？」

「オウナーは裕子さんだから、山洪商會が成功するように運営しなければいけないわね」と言っつて、めぐみは笑った。

「ところで、萌美の亭主つて、とんでもない馬鹿者なんですつてね」

「家でごろごろしていて、トドみたららしい。でも馬鹿とは聞いていないが……」

「中学校時代、成績はクラスでビリ、運動もできずにいじめられていたんですつて。でもおじいさんが偉いから、大学にはコネと寄付金で入学し、桜村屋のご主人になったというわけ」

「そんな馬鹿ならスパイされる恐れもないか」と繁雄はつぶやいた。

「えっ？」

「いやいや、こっちの話だ。それに君だつてあいつらのスパイかもしれない」

「あなたにもけつこう情報を流しているから、こっちのスパイかもしれないわ」

その晩、繁雄はとことん飲んで動けなくなり、プレジデントのすぐそばにある、めぐみのアパートに泊めてもらった。照枝のことが気がかりだったが、家を出るときにはぐっすり寝ていたので、大丈夫だろうと思った。繁雄の頭の中では、土地開発のこと、村中のこと、そして照枝、道代、萌美のことが渦巻いていた。

第三者委員会は予想通り、工事の認可を答申し、その条件としてサクラソウへの配慮を求めたが、どのような配慮をするべきかについては、何も提言しなかった。これを受けて、開発会社、行政、そして小倉長谷自然研究会の会合が町役場で開かれた。研究会からは重村、堀場そして繁雄が出席した。萌美と道代は仕事があるので欠席した。

開発側の代表として村中が出席した。村中は繁雄を見るなり、にこりと笑つて、「組合員さん、えらく熱心ですな。お魚よりサクラソウですか」と言った。繁雄は何も答えなかった。

サクラソウの自生地については、工事計画に配慮のないことに驚かされた。第一に、サクラソウの自生地周辺で河川改修を行うので、工事の土砂が自生地に降りかかり、さらに堤防の強化によって自生地周辺の地下水の流れが変わる恐れがあった。

次に、サクラソウの東南方向の森林が伐採されることによって、日当たりが強くなり土が乾燥するように思われた。さらに、自生地の北側の一帯が何ヘクターにもわたつて、施設をつくるためにコンクリート化されるので、サクラソウをめぐる動物群がいなくなるということが危惧された。

重村と堀場は一つ一つの問題について、どうサクラソウに影響するのかを説明した。そ

して、このままでは何も配慮されていないので、みとめるわけにはいかないと述べた。県や市の担当者は困ってしまい、長い時間相談したうえで、小倉長谷自然研究会には環境改善のための施策を示すこと、開発側には研究会の指摘に答えるように計画を一部変更することを提案した。村中は苦虫をつぶしたような顔をしていた。

この結果を受けて、研究会ではいくつかの対応策をホームページ上に公開した。その内容は、河川改修をサクラソウの自生地周囲二百メートルでは行わないこと、自生地東南の森を五百メートルの範囲で伐採しないこと、北側は一キロメートルまで開発しないことなどを含んでいた。

ホームページにかなり具体的に自生地の情報を出したことによって、自生地が荒らされる恐れが出てきた。そこで、昼間には高校生のほか、萌美と道代が交代で見回り、夜間は繁雄と堀場、それに彦じいがときどき見て回るようになった。繁雄にすると、暇な時期である。いくらでも行ってやろうと思った。

このところ照枝は完全に寝たきりになっていた。一日に二回、デイスービスの訪問を受け、おむつを替えてもらった。食事は流動食を中心に、スプーンで与えるのだが、デイスービスが頼めない場合には繁雄が与えた。機嫌がよいときにはニコニコとしており、テレビを見ることがあったが、不機嫌だと眉をしかめ、何を言っても首を振った。機嫌がよい時には、車いすに乗せて小倉川を見せてあげた。

そんなある日、見回りに行った山口と飯沼から、サクラソウの根が一部、掘り返されている、との連絡があった。ちよつと手で掘って確認した程度らしいが、掘り返された土は新しかった。次には本格的に盗むつもりかもしれない。

その日の夜、繁雄は彦じいと自生地を潜んで、誰かが来るのを待っていた。満月に照らされた河原では、ヨシが風にそよんでいた。まだ開発されていない山奥からの風は、豊饒な香りがした。遠くでシカがキエーと鳴いていた。近くを二匹のタヌキが通り過ぎて行った。幻想的な風景だった。

「彦じい、寒くないか」

「わしは山に住んどるんじや。これくらいどうということはない。いつもと同じじや。それよりわしがいっしょではつまらないだろう。道代か萌美だったらよかつたな」

「何を言うか。乱闘になるかもしれないのに、彼女たちを連れて来れるか」

「乱闘か、おもしろいのう。でもわしは逃げるぞ」

「大丈夫だ。俺一人で捕まえて見せる。三人までなら大丈夫だ」そう言って、繁雄は自分でつくった木刀を彦じいに見せた。

繁雄は中学時代、毎日のように喧嘩をしていた。殴り合いをしたこともあれば、木刀を使うこともあった。幼い頃から川で鍛えてきた繁雄は、よほどのことがない限り負けなかった。体力があるので、やがて相手が疲弊し、逃げて行った。

「傷つけてはだめだぞ。向こうの罠かもしれないからな。木刀は脅しか、正当防衛だけのために使えよ。もし、お前がやられそうになったら、熊よけの笛を鳴らし、警察だと叫んでやる。ほんとうにどうしようもない場合に備えて、クマ撃退スプレーも持って来た」

そう言いながら、彦じいも繁雄も誰も来ないかもしれない、と思っていた。今日来るという確証はなかったからである。

そうこうして一時間が経った頃、足音が聴こえた。繁雄も彦じいも、それが獣ではなく、人のものであることがわかった。二人は自生地奥に隠れており、相手からは見えない。どうやら一人らしい。二人は少し安心した。

その人影は自生地を蹴らしきものを振りかざして、根を掘り始めた。少し待ってから、繁雄はそいつの前に出て、「何をしている！」と叫んだ。

根を掘り返していたのは萌美の夫である努だった。驚いて腰を抜かした努は抵抗することもなく、繁雄に捕まった。小太りで動きが鈍く、闘っても勝てないことは、本人がよくわかっていたのだろう。彦じいは証拠写真を撮り、証拠物品の鋏も押収した。

「どうして、こんなことをしたんだ！」

「……」

「誰に頼まれたんだ。村中か？」

「……」

「彦じい、どうしようか。警察に通報しようか？」

「やめておけ、法的に違法かどうかむずかしい。それに警察はあいつらの味方をするかもしれない」

彦じいは努に聞かれないように小声で言った。

二人はとりあえず努を桜村屋へ連れていくことにした。どこかに努の仲間がいるかもしれないと警戒したが、誰もいなかった。努だとわかって安心したとともに、どうしてこの男がここに来たのか、真相を究明しなくてはならない、と繁雄は思った。

努と萌美は大広間の中央に置かれていたテーブルに、向かい合わせに座った。努は下を

向いており、萌美は努を睨んでいた。繁雄は彦じいと萌美の横に座った。

「どういうことか説明してちょうだい」

萌美は低い声で言った。

「……」

「どうなんだ。黙っていたら何もわからないではないか」

繁雄が促した。

「警察を呼ぶわよ！」

萌美は声を大きくした。

「……欲しくなったんだ」

「何をだ」

「サクラソウの根を持ってきて、花を咲かせようと……」

「サクラソウなら、うちにあるでしょう。なんで自生地の根茎を盗ろうとしたの？」

「……野生のサクラソウの方が綺麗だと思った」

「嘘をつくな、誰かに指示されたんだろう」

「……」

「父が指図したなら、そう言ってちょうだい。どうなの！」

「……」

「黙っていると言うことは村中の指示だな」

「……ち、ちがう」

「どちらがうの？」

「おまえがいつも偉そうにしているのが気に食わなかったんだ。俺を馬鹿にして、俺よりサクラソウの方が大事だと言わんばかりだったから、嫌がらせをしようと思ったんだ。自生地のサクラソウをつぶせば、おまえは悲しむだろう。その顔が見たかったんだ。でも、ごめんなさい」

そう言って努は顔をテーブルに押しつけた。

「何を言っているのよ！ 出て行ってください。この桜村屋にあなたの居場所はありませぬ！ 今すぐ出て行きなさい——」萌美は声を張り上げて叫んだ。

「ごめん、ごめんよう。ゆるして、ね、ゆるして」努は半泣きだった。

「だらしない奴じやのう。繁雄、土下座の写真を撮っておけ。村中に突きつけてやろう」彦じいは冷静だった。

翌日、繁雄と萌美は村中を訪ね、事の顛末を話した。

「お父さんがあの男をそそのかして、自生地をつぶそうとしたのでしょ」

萌美が詰問した。

「俺は知らん」

「これが証拠写真だ」

繁雄は自生地を掘り返す努と桜村屋で土下座する努の写真を見せた。

「証拠って、この男がやったという証拠だろう。俺とは何の関係もないことだ。この男はお前の亭主なんだから、お前にこそ連帯責任があるのではないか。それを俺の仕業にしようとするのはけしからん話だ。名誉毀損だ」

「訴えてくださってけっこうです。それでこの問題が世間に大きく知られたらいいんだわ。自然に配慮しない乱開発が注目されるでしょう」

「もう帰れ！」

「自生地をつぶそうとするような幼稚なやり方は止めてくださいよ。そうでないと第三者委員会に告発しますからね」と繁雄は言っ村中のもとを去った。

研究会ではこの事件をホームページに掲載したが、努の名前は出さなかった。そして、皆で不審者を監視しましょう、と注意を呼びかけた。努は次の一日だけどこかに行っていたが、すぐに桜村屋に戻り、居座り続けているらしい。

もう客も来ないのだが、繁雄は午前中アユ小屋にいて、本を読んだりネットサーフィンをしたりしていた。陽が照って暖かい日には、川を下る風が心地よかった。そうこうしている、彦じいと峰太がやってきた。

「おみやげだ」と言っ、二人は栗とくるみを持ってきた。繁雄は栗ご飯をつくり、くるみはネギや味噌と和えた。

「桜村屋は毎日修羅場らしい。萌美はけっこうきついからな。それでも、あのだめ男は家を出ていかないらしい」と彦じいと言った。

「しかし、あのように自生地が荒らされたら、全部盗られてしまうことも考えないといけないな。もともとわずかに残っているだけのサクラソウだから、将来は厳しい」と繁雄は心配した。

「そんなことはわかつとる。打つべき手は打ってあるんじゃない」

「それは、株を手分けして栽培しているということか？」

「まあ、そんなものだ。それだけではないがのう」

「ほかに何があるんだ？」

「今は教えてやらん」

「桜村屋よりも、山洪商会の方が修羅場かもしれませんよ」と峰太が言った。

「直哉と道代のことか？」

「社内が二つに割れているんですよ。その上に、社長は裕子さんと子供を実家に連れて来ようとしているみたいです。会長は孫が来ると言って大喜びだそうです」

「それでは道代の立場がない」

「それで、二人が言い争いのを聞いてしまったんです。社長は子供を作れないおまえが悪いと言い、道代は不倫したくせに何を偉そうにと……」

「やれやれ、萌美も道代もえらい目に遭っているのう。女は男しだいと言うが、どうしてあんな馬鹿夫と結婚したんじゃない？」

繁雄はせめて自分が夫だったら、二人ともどれだけ幸せにできただろう、と想像した。自分は確かに貧乏だが、努や直哉ほど腐っていない。萌美と道代がこんな目に会うのは、魅力的であるがゆえの試練なのだろうか。

繁雄はもつと情報をえるために、プレジデントに行ってみた。今日は誰も客がおらず、繁雄はめぐみともえを独占することができた。

「裕子さんが直哉の実家に住むというのは本当か？」

「よく知っているわね。その通りよ。ママはもうマンションを出て行ったわ」

「そんな馬鹿なことがあるものか。道代がいるんだぞ」

「まあ、でも直哉さんの家に住むのではなく、おじいちゃんの家に住むのだから、ありえない話ではないわね」

「よくも、そんなことができるものだ」

「ママは繁雄さんとすごく仲がいいのね。恋人なのかしら？」ともえが訊いた。

「恋人ではないよ。でも、どうしてそんなことを気にするんだ？」

繁雄はもえに訊き返した。

「開発側の人達が皆、繁雄さんの悪口を言っていくから、どうなのかなと思ったの」

「何で俺は悪口を言われなければならないんだ？」

「そうね、研究会の中で堀場先生はもともと自然保護に熱心で、教育者としても立派な人でしょう。このあたりには教え子も多く、悪い噂は聞こえてこないわ。道代さんと萌美さ

んはそもそも人気があるうえに、それぞれ山洪商会と桜村屋を支えているから、中には悪く言う人もいるけれども、たいがいはいは、できの悪い夫を抱えてお気の毒、というところね。それで、結局、あなたと変なじいさん——これは彦じいのことね、が彼女たちをそそのかして地域の発展を妨げている、ということになるわけよ」とめぐみが答えた。

「……」

「でも、繁雄さんは魅力的よ、悪のヒーローなんて——」

もえが繁雄の膝に手をかけて言った。

「何で俺が悪なんだよ。自然を守るヒーローと言うべきだろう。悪と言うなら、直哉や村中だろうが——」

「ここで噂話をするのは、山洪商会や飯井土建と関係のある人ばかりだから、あの人達の悪口を言えるはずがないでしょう。馬鹿じゃない。あなたがそんなことを気にするなんて」と言ってみぐみは高笑いした。

「がんばってくださいね。もえは繁雄さんの味方よ」と言ってみぐみも笑った。

繁雄は、もえという女はあぶない奴だと思った。調子が良すぎるのである。こういう奴こそ、村中のスパイかもしれない。あぶないから、さっさと帰ることにしよう、と思った矢先に、直哉が入ってきた。

「これはこれは、研究会の向井先生ではないですか。こんなところでお勉強ですか？」と直哉から声をかけてきた。直哉は数人の子分を連れていた。

繁雄も、「これはハーレム社長、跡継ぎができてよかったですね」と言い返した。

めぐみはすぐに直哉の方に行き、お絞りを渡しながら、繁雄に帰るように手で合図した。繁雄もこんなところで言い合っても仕方がないと思い、プレジデントを後にした。

それからしばらく経った十一月の初めに、照江が息を引き取った。風邪を引き、その後肺炎にかかって入院したが回復しなかった。

照枝にとって一番幸せであったのは、いつだったのだろうか、と繁雄は考えてみた。

照枝は長谷町で川漁師を営む家に生まれ、親どうしが懇意にしていたために、英明と見合い結婚した。英明は若いころから腕の良い川漁師として知られ、その頃にはアユも溪流漁もモクズガニも今よりずっと多く漁獲されたので、貧しいながらも充実した日々を過ごしていた。アユ小屋で、アユを焼いたり、酒や料理を出すのは照枝の仕事だった。

繁雄は子供の頃から腕白で、禁漁期に魚を捕ったり、他人の畑を荒らしたりすることがあった。直哉が嫌いだったので、山洪商会に侵入しては、工具や洗濯物を盗んだが、それ

がばれた時には英明に何十回も殴られた。

泣きじゃくる繁雄の頭を抱いてなくさめてくれたのが照枝だった。そのたびに、照枝は「山洪様には逆らうな」と言ったのだった。そして、その頃が照枝にとって、もつとも楽しい日々だったのではないか、と繁雄は思うのだった。

照枝の葬儀は家族葬として、繁雄の家で密やかに行われた。参列してくれたのは、村の数人と道代や萌美を初めとする研究会のメンバーだけだった。親戚筋とはもう付き合いがなくなっていた。繁雄の畑の一角に先祖代々の墓があり、照江の遺骨は父の横に納められた。

5 山桜誕生

年が明けた一月三日は冬にしては暖かかったので、繁雄は小倉川の川べりに椅子を置いて、日向ぼっこをしていた。照枝がいなくなって、ひとりぼっちになってしまい、このごろは彦じいも訪ねて来なかった。すると、道代と萌美が揃ってやってきた。

「どうしたんだい？」と繁雄が訊くと、

「一人で寂しいと思って、お年始に来たのよ」と萌美が言った。

萌美は桜村屋のおせち料理を持ってきた。道代はシチューとローストビーフを作ってきた。

「嬉しいな。二人とも女性らしいところがあるんだな」

どう感謝したらよいかわからなくなった繁雄は、素直にありがとう、と言うことができずに、少しひねくれた言い方をした。

「いつもお世話になっているから、このくらいどうってことはないわよ」

道代が笑って答えた。

三人はアユ小屋に移動して、コーヒーを飲んだ。一月なのに、ユスリカが空を舞っていた。まだ雪は積もっていなかった。

萌美は例の事件があつてから、努を追い出そうと何度も試みたが出て行かなかったらしい。追い出しても、いつの間にか戻っている。旅館なので鍵をかけて締め切るわけにもいかない。

そうこうするうちに、村中が努を追い出してはならんと命令した。萌美は離婚したいと申し出たが、それもみとめられなかった。離婚するためには、相当の期間別居して、結婚

生活が成り立っていないことを証明しなければならない。

一方、道代は、裕子とその子が直哉の実家に住むことで、すっかり山洪商会に嫌気がさしたらしい。直哉は裕子ママのところにはかりおり、山洪商会の経営や経理は道代が仕切っていたが、幹部の多くは直哉の父の勇三の意のままに動く人達であった。勇三が裕子とその子を庇護することによって、彼らは道代から離れつつあるらしい。

「今日は折り入って、お願いがあつてお邪魔しました」と萌美が言った。

「あらたまつて何だよ」

「私たちがひどい目に会っているのは知っていますね。私の夫はいつまでも桜村屋を出て行かないので、嫌で嫌で仕方がないのよ」

「それはわかっている」

「山洪で起こっていることもご存知ね」と道代も言った。

「道代もさぞかし辛いだろう」

「それでね、私たち家を出ることにしたの」

萌美が言った。

「あんなひどい家にいたら、おかしくなるだろう。出ていけ、出ていけ。ところで、出て行くって、どこに行くんだ？」

「そのくらいわかるでしょう」と道代が言った。

「わからん。ふつうは旅館にでも行くところだけれども、旅館から出て行くんだからな」
「勘の悪い人ね。二人ともここに住みたいので、お願いに来たのよ」と言つて萌美は笑つた。

「えっ……」

「俺は独身で、ほかに誰もいないんだぞ」

「だからいいんじゃない。奥さんがいたら来れないでしょう」と道代は言った。

「……」

「嫌な男と同じ屋根の下で暮らすのは、もう耐えられない。旅館もしよせん父のものだから、もうやらないことにしたわ」

「私も山洪商会は見捨てる。新しい人生を歩みたいの」

「……俺に襲われるかもしれないぞ。それでもいいののか？」

「襲いたかったら襲つてもいいわよ」道代が真顔で言った。

「俺の家は狭くて汚いんだぞ。こんなところに住めないだろう」

「狭かろうと汚かろうと、嫌な男と離れて暮らせるだけで幸せなのよ。私たち二人いっしょだから、合宿のようなものだわ。いいでしょう？ それでここを研究会の拠点にして、父や開発側の連中をやっつけましょう」

萌美も真剣だった。

道代と萌美に強く見つめられ、繁雄は同意せざるをえなかった。

それから二日して、二人は引越してきた。それぞれの自動車に、布団のほか、衣類とサクラソウの鉢を積んできた。そして、照枝が使っていた部屋に、二人とも住みついた。これまで働き続けてきたので、二人とも貯金を持っていた。それで新しいテレビとパソコン、それに大きな冷蔵庫を購入した。

その日の晩は、引越越し祝いの宴が開かれた。参加者は研究会のメンバーと峰太であった。

「繁雄がいつぺんに二人も奥さんをもらうとは、予想外の展開じゃったなあ。わしが狙っていたのだが」と彦じいが言い、一同大笑いした。

「桜村屋は誰が仕切るのだろうか？」

堀場が訊いた。

「そんなこと知ったことではないわ。父が何とかするでしょう」

「山洪商会も大騒ぎです。道代は社長のようなものでしたから」

「社長や会長が取り組めばいいじゃない。私はもう御免だわ」

「それで二人は何をするんじや」

彦じいが訊いた。

「私は知り合いが温泉旅館をやっているの、それを手伝いに行くわ。ずっと旅館をしていたから、それ以外のことはできそうにないし……。ここから車で四十分くらいかかるけれど、大丈夫よ」

「私はしばらくゆっくりしたい、と思っているの。研究会の事務局をしながら、このアユ小屋を大きくしてみたい」

「大きくって、どういうことだ？」

「この辺りにはほかに料理屋や旅館はないでしょう。だから、アユ小屋だけでなく、いろいろなものを楽しむことができる、もっと大きな店にしたらどうかあって、ずっと思っていたのよ」

「そう言われても、先立つものが……」

「いっぺんに大きくするというのではなく、少しずつ改良していくのよ。儲けを出して、それを施設に注ぎこむのよ」

「大きくなったら、私もここで働くわ。そんな日が待ち遠しい」と萌美も乗り気である。

「なんだか、えらいことになったのう。繁雄、何とか言ったらどうじゃ」

「ここは夏にはなんとか利益が出るが、冬はどうにもならないんだ。俺も今年はお嫁ぎに行こうかと思っていた。そんな状態で、どうやって儲けを出すんだろう」

「私たちがいろいろ考えるから、繁雄さんはいつも通りにしていればいい。損はしないようにするわ」と萌美に言われ、繁雄は同意せざるをえなかった。

今日の宴会では、各自が持ち寄った材料を繁雄と萌美が中心となって料理した。

彦じいがシシ肉を持ってきたので、メインはシシ鍋だった。繁雄は小倉川に仕掛けたカゴでモクズガニを捕ってきた。山口は海に行き、メジナを釣ってきた。これは刺身と煮付けになった。峰太は自分の畑でつくった野菜を持ってきてくれた。堀場は実家がうどん屋ということで、しめのうどんを用意した。そして、飯沼と深沢は手づくりの餃子を包んできた。

「よし、これからここが研究会の本拠地だ。自然を守るためにがんばろう！」と堀場が言い、皆で盛り上がっていった。

翌日からさっそく萌美は働きに出かけ、道代はアユ小屋と隣接した繁雄の家の掃除と改築の準備を始めた。繁雄は道代がせわしなく動くので、どこかへ出かけるわけにもいかず、アユ小屋でごろごろしていた。

気がかりなのは直哉である。人の嫁をかどわかしたと言って、子分を連れて怒鳴り込んでくるかもしれない。繁雄はアユ小屋と自分の家の方々に木刀や鉄パイプを隠しておいた。

道代は、アユ小屋を改装してきれいにしたうえで、机や椅子を増やして、居酒屋か小料理屋を開くべきだ、と主張した。

この案に萌美も賛成した。萌美はどうせなら思い切って増築して、立派な店にするべきだと言った。それに合わせて、繁雄の家も一部分直すことを提案し、これに道代も同意した。そのための予算は、道代と萌美で折半するらしい。二人は相当貯め込んでいるようだった。

繁雄はそんな店を開いて客が来るだろうか、俺は嫌われているから誰も来ないのでなかるうかと思っただが、二人の勢いに抵抗することはできなかった。

その後、道代や萌美が引越してきたことに対して、直哉や村中がとやかく言ってくる

ことはなかった。

サクラソウの自生地では、侵入者がいたということで、フェンスをつくり、入口にダイヤル式の鍵をかけることになった。研究会には鍵の番号が教えられた。土地開発について、研究会の要望の全部はみとめられなかったが、一部は取り入れられた。

自生地の周囲百メートルはコンクリートで舗装されず、立ち入り禁止となった。研究会には、一年を通してサクラソウの管理をすることが依頼され、そのほかヨシ原の野焼きなどは地元の自治会が継続することになった。

家では道代が食事を作り、掃除もしてくれるので、繁雄は何もしなくてよかった。彦じいや峰太もしょっちゅう飯を食いにやって来るようになり、開店前でありながら営業していると勘違いするほど、にぎやかになった。

繁雄はプレジデントにも顔を出した。

「あー、着たわよ。ハーレムの王様が……」

めぐみが歓声をあげた。

「王様じゃないよ。居候みたいなものだ」

「このところ、うちではあなたの話で盛り上がっているのよ」

「出て行かれた方はどうなんだ。その話が聞きたくて来たんだ」

「そうね。ここだけの話よ。社長は、はじめは出て行く奴は出て行け、みたいなことを言っていたのだけれども、山洪商会では大騒ぎになったらしい。何しろ道代さんは山洪の内情や弱点を知っているのだから、それを暴露されたら困るでしょう。だから、とりあえずは平静を装っているよね。裕子ママは喜んでいたけれど……」

「それで桜村屋は？」

「一週間くらい休業した後で、大女将だった萌美のお母さんが復帰して営業を再開したらしい。しかし、萌美さんが出て行ったことは皆に知れ渡っていたので、その後お客さんは集まらなかつたんだって。あの馬鹿旦那には何もできないし、桜村屋では萌美さん目当てのお客さんが多かつたから」

「それは、ざまあみろだ」

「結局、桜村屋はまた休業状態になっちゃったみたい」

「そうか、そうか」

「ところでさあ、あなたは道代さんか萌美さんとやったの？」

「……何を言っているんだ。手を出せるわけないだろう」

「そんなの、どちらかがないときに、押さえつけてやっちゃえばできるでしょう。それを皆、噂しているのよ」

「できないから、ここに来たんだろう」

「まあね、二人とも別居の事実を重ねて、くそ亭主と別れるのが目的だから、その途中であなたと浮気したら、元も子もなくなるわね。誰かがどこから監視しているかもしれないし……」

「そういう言い方は止める」

「それじゃあ、あとで私のアパートに来なさい。可哀想で見られないからね」

「……」

アユ小屋と繁雄の家の改築は、道代がよく知っている大工に依頼し、順調に進んでいた。繁雄と峰太が手伝ったので、居酒屋の部分は予想以上のスピードで完成しそうだった。

改築の間、繁雄と二人の女性は、隣接した部屋で過ごすことになったが、道代も萌美も繁雄を気にする素振りを見せなかった。一方、繁雄は、風呂や朝の着替えの時間に、まちがいがないように注意した。

繁雄の冬の仕事は、風呂用に薪を用意することと降雪時の雪かきだった。生活費のための収入としては、萌美の給料しかなかったので、食費を切り詰めるために、繁雄は川にカゴ網を仕掛けてモクズガニを捕ったり、投網で雑魚を捕ったりした。

道代には、カワムツやアブラハヤは厭きたので、海に行つて魚を釣ってくるように頼まれたが、冬の日本海は波が荒く、むずかしかった。そのほか、冬場は肉が欲しいとのことで、繁雄は狩猟講習会に行くことになった。

道代の家は農家だったので、道代は繁雄より畑仕事が上手だった。米は峰太が持ってきてくれた。その代わりに、峰太にはいつでも飯を食べさせた。

二月のバレンタインデーになって、繁雄にとつて嬉しいことがあった。

強引に押しかけて来たこともあって、道代と萌美が繁雄にプレゼントをくれたのである。二人は、繁雄が使っているアユ竿が頑丈だが古いことを知っていたので、最新の高性能なアユ竿を買ってきてくれた。九・五メートルありながら、その重さは三百グラムもなかった。竿先が何かに少し触れただけで、手元では強い衝撃を感じた。おそらく、二十万円以上しただろう。

さらに、道代は編んでいたセーターを渡してくれた。セーターの腹部にはアユのイラストが描かれていた。女性にプレゼントをもらったことのない繁雄は、そのセーターを毎日

抱いて寝た。

居酒屋で出す食事について、萌美と道代は熱心に語り出した。

ここでしか食べられないものを出そうということでも一致し、川魚料理、マツタケ、モクズガニ、山菜、ヤマイモなどはすぐに決まった。川魚を飼う池や生簀があるので、そこでニジマス、イワナ、コイを飼うことにした。このほか、広い鳥小屋を作って、地鶏を飼うことにした。

ニジマスやイワナは、塩焼きのほかにムニエルやフライにして出し、コイは洗い、甘露煮、鯉こくなどにする。地鶏からえられる卵や肉は親子丼やオムレツにして、この店の目玉にすることにした。アユや地鶏からとったダシを用いたラーメンも考えることにした。

美味しいものを出すとすると、料理人がいた方がよい。桜村屋が休業したこともあり、萌美は桜村屋の料理長であった加賀屋涼をスカウトした。加賀屋は萌美を信頼していたので、即座に協力したい、給料はいくらでもよい、と言ってくれた。その人柄は温和で優しく、皆に涼さんと呼ばれていた。

研究会の例会では、サクラソウだけでなく、この地域の自然について勉強し、その保全に努めることになった。

とくに問題になったのは、外来生物がはびこっていることだった。河原や堤には、アレチウリやセイタカアワダチソウが繁茂していた。生えている樹木はハリエンジュばかりである。カメも外来種ばかりが目立ち、小倉川の下流でカミツキガメが見つかったこともあった。哺乳類ではヌートリアやアライグマが現れるようになった。

繁雄がとくに関心を持っていたのは、オオクチバスとウチダザリガニだった。どちらも特定外来生物に指定されており、生態系への影響が大きいことから、移植したり飼育したりすることが禁止されている。

オオクチバスは、繁雄のアユ小屋から車で十分ほど上流に行ったところにある田山池に放流され、そこから小倉川に流れてくることがあった。この魚はアユを好んで食うので、繁雄は自分のなわばりで見つけると、ヤスで突いて駆除していた。しかし、田山池のオオクチバスをどうにかしないと、いつまで経ってもバスは小倉川に流入してくる。

ウチダザリガニは、田山池からさらに二十分くらい走った山奥の明神池に棲んでいた。どうして、この池にいるのかは謎だった。ウチダザリガニは植物から動物まで何でも食べるので、池の生態系は大きく変わり、希少なトンボが絶滅したらしい。

駆除をしている他の池での報告によると、カゴ網などで捕ることはできるが、繁殖力が

強いために、捕っても捕っても減らないという。食べると美味なので、たくさん捕って居酒屋で出したらよいかもしれない、と繁雄は思った。その点では、オオクチバスも利用できるかもしれない。田山池は山間にあつて水質がよいからである。繁雄は春になったらオオクチバスとウチダザリガニの駆除に取り組むことにした。

繁雄にとって、大きな変化のある一年だった。照江の面倒を見ながら、アユ小屋を一人で営業していた生活は、充実していたが孤独でもあつた。友人といえば、峰太とめぐみ、それに彦じいくらいであつた。

ところが、今では道代と萌美が家族のように一つ屋根の下に住んでおり、堀場をはじめとした研究会のみんなとも仲よくなった。家事は道代がやってくれ、収入は萌美に頼っている。自分にはすることがなくなったかのようにあつたが、ここに外来種の駆除という新たな目標が生まれた。その変化に繁雄はとまどうとともに、嬉しさも感じていた。

皆が帰つたあとで、繁雄は萌美と道代に訊いてみた。

「二人はいつまでここに居るつもり？」

「来たばかりなのに、そういうことは訊かないでちょうだい」と萌美が言った。

「私たちは、離婚したいのよ。でも、それが今すぐにはかなわないから、山洪の家を出て、ここに居候させてもらっている。相手に過失があるから、いずれ離婚はみとめられるはずよ。でも、そのときにここを出て行くかどうかはわからないわ。もちろん、繁雄さんに追い出されたら仕方がないのだけれど……」と道代も続いた。

「いや、迷惑とか、そういうことではないんだ。俺は二人とも好きだし、支援したいと思つている。ただ、将来の展望というか、覚悟というか、そういうものを聞きたいと思つたんだ」

「離婚した後で、どうするのかは私にもわからないわ。それまでに何年もかかると思うの。道代さんの場合は、夫が不貞をして子供まで作つたのだから、割と早く離婚できるにちがいないわ。慰謝料も取れるでしょう。でも、私の場合には、夫は罪を犯したわけではなく、サクラソウを盗もうとしたという、いわば倫理的な過失を犯しただけだから、なかなか離婚はできないかもしれない。それでもいいの。あとはどうとでもなれよ」

「繁雄さんは、私たち二人のどっちが好き？」と道代が訊いてきた。

「……そんな決められないよ。どっちも好きだ——」

「私は離婚が成立したら、繁雄さんと結婚してもいいわよ。子供の頃から好きだったから。でもね、今はだめなの。それはわかつてちょうだい」

「私も同感だわ。以前はそうは思わなかったけれども、だめ亭主を見ていたら、繁雄さんの良いところがわかってきた。でも、どうしましょう。二人のどっちが結婚したらいいのかしら」

萌美はいたずらっぽく笑った。

「二人いるうちはだめよね。もし、どちらか一人がここを出て行く時があり、その時にもう一人がまだ繁雄さんを好きでいたら、結婚することにしましょうよ」

道代が大胆な提案をし、萌美も同意した。

繁雄は何が何だかわからなくなり、口をぽかんと開けていた。

「でも、めぐみさんと結ばれるなら、それでもいいわ。あなたの自由だから」

今度は道代が笑いながら言った。

寒い冬は瞬く間に過ぎ去っていった。結局、ハローワークで仕事は見つからなかった。繁雄の射撃の腕はまだ良かったが、猟友会の狩りに同行させてもらい、獲物の一部を分けてもらうようになった。

猟友会のメンバーは七十歳台が中心で、なかには八十歳以上のベテランもいた。繁雄は久々に入ってきた若手有望株ということで、期待されていた。その並外れた体力は、獲物を運んだり、さばいたりするうえで戦力となり、狩りの仕方でも人より速く覚えていった。

萌美と道代は新たな営業をめざして最終準備に入っていた。

居酒屋の名前は「山桜」になった。山洪商会の山と、桜村屋の桜をとったものであり、それぞれに馴染みのある客を期待したものであった。

十一時半から昼の部を始め、ラーメン、親子丼、蕎麦、お茶漬けなどを出す。ほかに、川魚料理もリクエストがあれば提供する。夜の部は十八時から始め、季節の料理や肉料理も出す。天然のヤマメやイワナも入手できれば使うことにした。店は道代が仕切り、繁雄と萌美が手伝うことになった。

繁雄の家の改築は半年くらいかかりそうだったが、居酒屋の部分は三月下旬にほぼ完成した。許認可を取得する手続きは道代がすべて行い、四月初めに山桜はオープンした。

新しい山桜を宣伝するパンフレットを作ったものの、山洪照会にも、桜村屋にも、役場にも、置かせてもらえなかった。しかし、その分、道代も萌美も知り合いに電話をしたり、メールを送ったりして、山桜を利用してくれるように依頼した。プレジデントのめぐみも、ことあるごとに山桜を宣伝してくれた。

まだアユも捕れない時期に客が来るだろうか、と繁雄は懐疑的だったが、開店日には大勢の客が押し寄せた。その多くは山洪商会と桜村屋の関係者や顧客であり、道代と萌美のファンであった。そのうえ、料理も美味しかった。評判が評判を呼び、遠ざかっていた役場や開発側の社員もやってきた。

繁雄は忙しくなった。店の手伝いと魚の調達、それに山菜取りに時間を取られた。広い小屋に放し飼いにした地鶏の世話は、繁雄が担当した。芽生えてきたサクラソウの見回りも欠かさなかった。それは峰太や彦じいも同じで、それぞれができる範囲で協力してくれた。

五月からの外来種駆除のために、県の特別採捕許可を取得した。といっても、繁雄が単独で出しても許可が下りるとは思われなかったので、重村を筆頭申請者とし、オオクチバスとウチダザリガニを捕獲対象とした。刺し網、カゴ網、釣り、ヤスで捕る計画だった。申請書に「駆除するため」と書くこととめられないことだったので、个体数を把握し、駆除技術を開発する研究のため、という理由を記入した。

それでも居酒屋が休みの時や萌美が手伝ってくれた時に、繁雄はプレジデントに飲みに行った。

「山桜社長がいらっしやったわ」とめぐみは茶化して言った。

「社長じゃないよ、小間使いだ」

「繁盛のようでおめでとう。おかげでうちはさっぱりだわ」

「まあ、そう言うなよ。共存共栄でいこう」

「女の差かしらねえ」

「料理がちがうからだろう。値段もうちの方が安い」

「まあ、いいわ。愚痴を言うのはみっともないわね」

「峰太に聞いたんだが、この店を買い取ったんだって」

「そうなのよ。裕子さんはもうすっかりママをやる気をなくして、山洪家の一員になってしまい、噂では二人目を妊娠しているんだって。それで、この店に戻ることはいらないだろうから、私に安く譲ってくれたの。それなのに、客足が鈍ってしまっ……。また、愚痴を言ってしまったわね」

「どんまい、どんまい。今度何かつまみになるようなものを持ってきてやるよ」

「でもね、困っているのは私だけではないのよ。長谷では、桜村屋が休業しただけでなく、開発地に予定していた新館を建てる話も消えたらしい。山洪商会は赤字になってしまった

ので、峰太はクビになるかもしれない」

「二人がいなくなったくらいで、そんなにちがうのか？」

「商売には顔が必要な。その点で、萌美さんと道代さんには、カリスマ的な魅力があるのよ。萌美さんは桜村屋を辞めても、すぐにほかの旅館から声がかかり、おかみの補佐をしているでしょう。旅館に着いた時に、あの人が出迎えてくれたら、お客さんは嬉しくなるらしい。そういう力を持っているのよ。道代さんも人気があるから、あなたの居酒屋も客が絶えないのだわ。客商売って、そういうちよつとしたことで、大きく影響される。誰が何をしても成功するというものではないのよ」

その数日後に、繁雄は村中に偶然遇った。サクラソウの自生地を見回っていた時に、開発予定地に来ていた村中と鉢合わせになったのだ。

工事はすでに始まっており、重機が畑や野を押しつぶしていた。自然のままの大地は雪に覆われていたが、ほじくり回された地面は赤茶色に染まっており、そこら中をナイフで刺されて出血しているようだった。

「こんにちは」

何も言うわけにはいかないので、繁雄は挨拶した。

「……」

村中は一人きりで、予定地を見つめたままだった。

「お嬢さんは元気ですよ」

繁雄は意地悪だと思ったが、萌美について報告した。

「勝ったつもりでいるのか——」

「えっ？」

「おまえが企んだのだろう」

「何を言っているんですか。あなたが馬鹿な夫と結婚させたから、こうなったのではないですか」

「おまえが何をしようと、ここには夢の楽園ができるんだ。それをしっかり見ておくんだな」

「美しい自然を潰して、何が夢の楽園ですか。恥ずかしいと思わないのですか？」

「荒地や森林だけでは何も生まれないだろう。せいぜい、おまえみたいな田舎者が勝手に楽しんでるだけだ。しかし、夢の楽園ができれば、何万、いや何十万もの人々がここで遊ぶことができるんだ。子供たちも大喜びだろう。そして、それがこの地域の経済を活

性化し、皆の生活を潤すんだ。それがわからないのか」

「きれいごとを言っているけれども、飯井やあなた自身が儲けたいだけでしょ。そして、開発の裏では、いろいろ汚いことをしているんでしょ」

「失礼なことを言うな。人を批判するなら、証拠を出してからものを言え」

「ここに桜村旅館の別館をつくるつもりだったんでしょ。しかし、萌美さんは出て行ってしまった。旅館ももう終わりですね」

「このままではすまないからな。憶えとけ」

村中の言葉は脅しにすぎない、と繁雄は思った。

「そういう態度をあらためないと、お嬢さんは二度とあなたのところには戻りませんよ」と繁雄が言うと、村中は空を見つめたまま、何も言わなかった。

山桜はますます忙しくなっていた。一方、山洪商会は人員整理を始め、峰太も解雇されてしまった。峰太は山桜を手伝うことがあったので、直哉の標的になったのだ。そこで、峰太は山桜の従業員として毎日働くことになった。

その頃に、ある男が繁雄を訪ねてきた。長谷で反対運動をしていた市井隆の息子の忠志だった。

「こんにちは、向井さんと話をしたくてまいりました」

忠志はまだ二十代の若者で、漁協の組合員でもあった。何かスポーツでもしていたように、筋肉隆々の体つきをしていた。

「どうだい、長谷の方は？」

繁雄は見に行ったばかりであったが、訊いてみた。

「どうもこうもないですよ。川には濁り水が入って、放流したヤマメもどこに行ったのか、釣れなくなりました。護岸工事も始まって、川はぼろぼろになりそうです」

「お父さんたちは何も言わないのか？」

「あの人はすっかり丸めこまれてしまって、ものが言えなくなっています。補償金をもらおうとしています。どうやらろくにももらえないようです。河川改修は地域住民を氾濫から守るために行うので、補償の必要はない、と言われたらしいです」

「それで君はどうしたいんだ」

「私を研究会に入れてください。父たちのように補償金をもらいたいのではなくて、長谷の自然を守りたいんです。サクラソウの自生地は私の家の近くなので、監視を手伝わさせていただきます」

「それはもちろん大歓迎だよ。監視していないと、あいつらは何をしでかすか、わかったものではないからな」

「それでは次から勉強会に参加してもいいですか？」

「もちろんだ。俺から堀場さんに連絡しておくよ」

「ありがとうございます。それからアユ釣りも教えてください。長谷の組合員は網を打つのは上手ですが、釣りの名人はいないので――」

「まったく、釣りもわからんから川もわからんのだ。そういうことだから、長谷川もだめになるんだ。これから、しごいてやる」

「それではよろしくおねがいます！」

「元気がいいわね。頼もしいわ」と道代も喜んだ。

「お昼を食べていきなさい。何か用意するわ」

まだ十一時で開店前であったが、道代はマスのムニエルとオムライスをつくって、忠志に食べさせた。

「このオムライスは絶品ですね」

忠志は大声で褒めてくれた。

「地鶏の卵を使っているから、一味ちがうんだよ」と繁雄は言った。そして、忠志は研究会にとって大きな戦力になると確信した。

実際、忠志の協力によって、サクラソウの監視を今まで以上に頻繁に行うことができた。直接自生地に行くだけでなく、昼間には双眼鏡を使って、自宅から自生地を見張ってくれた。研究会にとってありがたいとともに、繁雄の負担は減り、道代や萌美は見回らなくなってもよくなった。

山桜が開店してから、一週間で経った。この間に一日平均四十人の客が訪れ、原材料費、光熱費、それに涼さんの給料を除いた利益は六万円になった。大儲けというわけではなかったが、なんとかやっていける数字だった。このことを踏まえて、皆で集まって今後について話し合った。

「思ったより多くの客が来てくれて、俺は嬉しいよ。にぎやかになって楽しい」と繁雄は言った。

「私も充実しているわ。お客さんが来てくれるということは、自分がやっていることがみとめられているようで嬉しい」道代が続いた。

「うまくいつているときこそ、足元を見つめ、将来のことを考えないといかん。どの店も開店当初はうまくいくものじゃ。だが、飽きられたら、客足が途絶えてしまう。お客さんにとって魅力的な店であり続けることが大事なんじゃ」

彦じいはこのごろは山桜に住みついている。

「私もそう思うわ。まずは反省点を挙げてみましょう」と萌美が言った。

「俺が思うに、一回来ただけで二度と来ないお客さんがいる。興味本位で様子を見に来ただけのようだった」峰太が指摘した。

「山洪の関係者で、そういう人がいたわね。でも、何度も来てくれるお客さんも多いわ。それから、初めは大勢でランチを食べに来て、そのあと一人で飲みに来るお客さんもいる。一方、ランチだけを繰り返し食べに来るお客さんもいるわ」と道代が続いた。

「お客さんごとに、ノートをつくつたらどうかしら。いつ来て何が好きかを書くのよ。桜村屋では、お客さんの予約があつたら、そのノートを見返して食事のメニューを変えたのよ。馴染みのお客さんとはできるだけいろいろなお話をして、趣味や宿泊の目的を教えてください。もらうことも多かったわ。そういうことは、頭の中に残っているけれども、ノートにも書き留めておいたの」今度は萌美が提案した。

「そのノートは桜村屋を出るときに、持ってきてしまったのじゃろう。だから桜村屋は休業したんじゃ」と彦じいが指摘した。

「私はね、将来ここに旅館を建てたいの。桜村屋はしよせん父の旅館でしょう。そうではなくて、私の旅館を作りたいのよ。それが夢」

「そのときは俺を番頭にしてください」と峰太が言ったが、「番頭というか、送迎の運転手に風呂掃除、薪割りと何でもやってもらうぞ」と繁雄が言い、皆笑った。

「旅館を建てるためには相当な覚悟とお金が必要じゃ。萌美はその設計と見積もりを考えてみなさい」と彦じいが助言した。彦じいは今日はまともなことしか言わない。

「利益が出たといっても、涼さんの給料を払うとわずかしか残っていないから、貯金をして旅館を作るまでの道のりは厳しいわね。ランチでの儲けは限られるから、夜のお客さんを増やさないとだめね。そのためには季節に応じた新しいメニューを考える必要がある。これから五月にかけての食材としては、何があるかしら」

道代は意欲満々だった。

「そうだな。まずタケノコ、それからコシアブラ、ギョウジャニンニク、ヤマウド、コゴミなどの山菜かな。山奥に行けば、まだタラの芽も採れるだろう。川ではイワナとヤマメ。

それからオオクチバスとウチダザリガニも捕ってくるよ」

「繁雄さん、オオクチバスとザリガニは少しでいいからすぐに捕ってきてよ。誰も食べたことがないから、使えるかどうか確かめてみたい」

「わかったよ。あとは涼さんの腕に期待だな」

「町から飲みに来てもらうためには、酔ったお客さんを送り届けるサービスが必要だわ。

前から相談していたのだけれども、道代さんと二人で中古の小型バスを購入しようと思うの。そうすれば、団体のお客さんが来てくれるでしょう」

今度は萌美が提案した。

「わかった。運転は俺と峰太にまかせてくれ」と繁雄は賛成した。

「あとサクラソウは心配ね。忠志さんが見張ってくれているけれど、周辺の環境は悪化するばかりだし、将来どうなるのか。父も何か画策しているかもしれない」

萌美の心配は皆の心配でもあった。長谷の土地開発は進んでおり、自生地自体は守られているが、周辺の山や野は次々につぶされている。サクラソウがいつか絶滅してしまうのではないかと誰もが感じていた。

「そのことじゃが、実はわしはこうなることを予期していたんじや。開発計画がなくても、全国でサクラソウの自生地は消滅している。そこで、まず初めに、サクラソウの自生地が小倉や長谷にいくつもあった頃に、その一部を栽培し、何人かに分けたんじや。危険分散じやよ。道代にも萌美にも大事にしてもらっている。同時に、わしにしかわからない場所にあるサクラソウの自生地を、誰にも知らせずに守ってきたんじや。そこへ行くには、車を降りてから二時間以上歩かないといけない。誰にも見つけられんのだよ」

「え！」と繁雄は声をあげた。

道代も萌美も口をぽかんと開けていた。

「堀場先生に知らせないと——」と萌美が言った。

「それは止めておけ。敵をだますには、まず味方からじや。小倉にも自生地があるとわかると、長谷の自生地を守ろうという気がなくなるし、新たな生息地は山奥だから監視もしにくく、盗掘されやすい」

しばらく沈黙が続いた後で、萌美が口を開いた。

「サクラソウの花が咲いたら、私たちを連れて行ってくださいね」

彦じいは満足げに微笑んだ。

やがて、アユが放流される時期になった。漁協の方針で、今年は長谷川に多くのアユを

放流するということだった。放流用のアユ種苗はキロあたり三〜四千円であり、一尾の重量が十グラムほどであるので、一キロで百尾くらいになる。これを今年は長谷川に六百キロ、小倉川に四百キロ放流するらしい。小倉川の放流量は例年と比べて少ない。

繁雄は釣れるアユの大半は海から遡上してくる天然アユであり、放流アユは病気にかかりやすく死にやすいことを知っていたので、漁協の方針には意見を言わなかった。長谷の開発にかかわってから、漁協の幹部ともじっくりいっていなかった。

アユの放流は、タンクの中にアユを積んだトラックから、ホースを使って川に流し込むのがふつうである。アユにストレスをかけずに、すみやかに放流するのがよいとされている。

しかし、繁雄は自分の区域に放流するアユについては、とりあえず河川敷に用意したコテナに収容し、ひれが赤くなったアユや奇形のアユを見つけたら取り除き、残ったものをバケツを使って放流した。この小さな気配りによって、病気の蔓延を防ぎ、奇形のアユが捕れることを避けることができた。

アユの放流場所は車が入りやすいところを中心として、場所によってめりはりをつけた。友釣りに掛かるアユの数は、その個体密度が高いほど多くなる。逆に個体密度が低いと、アユはなわばりを作らなくても十分に餌を食べていける。その場合には、多くのアユは、なわばりを守らずに群れてしまう。

天然アユが遡上してきても、サイズが小さいうちは、密度が低いのと同じであり、なわばりはできにくい。だから、繁雄は解禁当初から釣れるように、天然アユよりも大きな人工アユ種苗を、駐車場所の近くに多く放流した。

天然アユも少しずつ遡上するようになった。海で動物プランクトンを食べていたアユは、川の中で水生昆虫や藻類を食べるようになる。アユの成長はますます速くなり、やがてなわばりを作るのである。だから、早く遡上するアユが多いと、解禁当初から多くのアユが釣れることになる。

まもなく長谷のサクラソウが開花したので、皆でそれを見に行つた。盗掘騒ぎがあつたが、以前とほぼ同じ数の株があつた。ただ、これからしばらくがもつとも盗まれやすい。見回りを強化し、忠志にもより注意するように頼んでおいた。

自生地周りにはゴミが投げ込まれていた。空き缶やペットボトルなど、以前にはなかったものである。黙ってゴミを拾いながら、誰かがわざと放つたのではないか、と繁雄は疑つた。

山口たち生物クラブのメンバーが、花の数やその構造、去年と比べた株の様子などを観察し、記録していった。花を訪れる昆虫の数量もしらべあげた。周囲では重機がうなりをあげていたが、サクラソウは何事もないように咲いていた。今後、周辺の土地開発の影響が出るかもしれない。萌美と道代はホームページに載せる写真を注意深く撮っていった。場所が特定できるようなカットは撮らなかった。

繁雄が帰り際に川を見たら、やはり濁りが入っていた。忠志に訊いてみたが、これほど晴天が続いている時に川が濁ることは、これまでなかったらしい。長谷の漁協組合員の何人かは集まって、再度、補償金を求めることを検討しているのだという。まったく情けない奴らだ、と繁雄は思った。

山桜では、道代と萌美の鉢で栽培しているサクラソウが一斉に開花した。長谷紅はもちろん、その他の品種も美しく可憐だった。江戸時代から人々に愛されてきた理由が、繁雄にもわかる気がした。彦じいの鉢は、危険分散のために、まだ秘密の隠れ家に置いたままだった。

その三日後、繁雄、萌美、道代の三人は彦じいの案内で、隠されていたサクラソウの生息地を見に行った。朝の四時、まだ暗いうちに出発し、小さなスペースに停めた車には、山菜取りのカゴをわざと置いておいた。四人がサクラソウを見に行くとは誰も思わないだろうが、敵は多い。誰かに尾行される恐れはあったので、用心したのである。彦じいは自分のなわばりなので、暗い中をどんどん進んで行った。

「彦じいの隠れ家もこのへんなのか？」と繁雄は訊いてみたが、彦じいは教えてくれなかった。

「わしは命を狙われておるから、どこにいるかはわからないようにしているんじや。だから、おまえらにも教えられない」

「ひよっとして、彦じいはどこかに大金を隠しているのではないか？ 狙われているのは彦じいの命ではなく、財産なのではないか？」と繁雄は訊いた。

「どうかな。そうだとしても、何も教えられない」彦じいはごまかした。

「そんなのはいいけれど、サクラソウはまだ？ もう一時間も山道を歩いているわ」と萌美が言った。すっかり明るくなって歩きやすくなったが、サクラソウはまだ見えなかった。

道代は黙々とついてきた。

やがて、山を下ったところにある窪地に辿りついた。ミズナラの林に囲まれていたが、小さな沢が流れており、その周囲は開けていた。彦じいは沢沿いにさらに歩き、その奥に

あつた岩の割れ目から向こう側に抜けて行った。そして、そこにサクラソウがあつた。木漏れ日が降り注ぐ小川の横に、五百株ほどのサクラソウが咲いており、その色や形は長谷紅と変わりなかった。

「綺麗だ！」と思わず繁雄は口に出した。道代と萌美はうつとりと、花々を見つめていた。

「こんなところなら誰にも見つからないわね」と萌美が言った。

「ここは夏になるとフキに被われるんじゃないや。オオタカの巣を見つけたこともある」と言う彦じいは自慢げだった。

「すばらしいわ」道代も嬉しそうだった。

「ここは。パワースポットだな。何か神聖なものを感じる」繁雄も感動していた。

四人はその場所に二時間佇んだ。じっとしているだけで、オオルリ、キビタキ、クロツグミ、アカハラなどの野鳥が飛んできた。まるで夢に見る楽園だった。

その後、車に戻るまでに四人はタラの芽とコゴミを合計三キロほど採集した。どう見ても山菜取りの一行にしか見えなかっただろう。

6 小倉川の危機

繁雄は冬の間、アユも捕れなくて、なんとなく肩身が狭かった。萌美の給料と山桜の収益に頼っていたからである。そこで、県の許可証が届いたこともあって、オオクチバスとウチダザリガニを捕りに行くことにした。

オオクチバスが生息する田山池は地元の自治会が管理している。立ち入り禁止、釣り禁止となっているが、いつの間にかオオクチバスが放流された。その後は、看板を無視して釣り人が侵入し、バス釣りを行っていた。

周囲の私道に駐車され、畑にゴミを放られるので、自治会は迷惑していた。釣り人を注意しても、逆に怒鳴りつけられることがあるらしい。だから、自治会としても駆除は大歓迎のことだった。池の水は澄んでおり、泳ぎ回るオオクチバスを見ることができた。

繁雄はあらかじめ漁協に配布されていた、バスの駆除マニュアルを勉強していた。そして、今回はその中の手法の一つである、生き魚を用いた釣りを試すことにした。

バス釣りというと、ルアーフィッシングがよく知られているが、釣り人が多い池ではルアーは学習されていて、釣れないことが多い。そこで、ハヤやクチボソなどの小魚の背に針を掛けて泳がせると、それをバスが襲って釣れるのである。疑似餌に比べて、生の魚を

用いた方がよく釣れるらしい。

ルアーロッドを用いてもよいが、小魚を泳がせるためには、操作性のよい長竿の方が使いやすい。しかし、オオクチバスの中には大型のものもいるので、八メートル以上の竿が必要である、とマニュアルには書かれていた。

そこで繁雄は、それほど高価ではない古いアユ竿を持ってきた。そして、川で捕った長さが八センチほどのウグイを針に付けて、池に放ってみた。

浮きはすぐに底に引き込まれたが、これはウグイの動きによるものであり、少し待つと浮きが見えてきた。水面に出た浮きは、小刻みに上下しながら沖へ向かっていった。沖に見えた水草の脇に到達したときに、浮きは動かなくなった。そのときにいきなり浮きは真下に引きずり込まれ、見えなくなった。

オオクチバスが食ったのである。しかし、ここで合わせてはならない。小さな針を使っているのに、今合わせたら、すっぽ抜けるだけである。マニュアルに書いてあるように、繁雄は六十秒数え、一気に竿をふりあげて合わせた。次の瞬間、針はオオクチバスの喉にしつかりと掛かった。

繁雄はアユの友釣りでは、針がアユに刺さり、さらに深く食い込む様子を感じ取ることができた。同様に、オオクチバス釣りでも、針の掛かり具合や掛かったバスの大きさを感じることができた。バスは強烈な引きを繰り返したが、水面に浮いて空気を吸わせると急におとなしくなった。岸近くまで引き寄せた三十センチほどのバスを網ですくった。

長竿による釣りでは全長が六十センチを超えるバスも捕獲できるらしい。この日に繁雄は四尾のバスを釣り、その場でしめてクーラーに入れた。一回は掛かったバスが倒木の中に逃げ込み、枝を巻くように泳いだためにラインを切らざるをえなくなった。そのことが悔やまれたが、なにしろ初めてのバス釣りである。次からの教訓にしよう、と繁雄は思った。

次に、明神池にウチダザリガニを捕りにいった。高さが八十センチほどのカゴ網に魚のアラを入れて仕掛け、翌日に回収した。三個のカゴ網で六十四匹のザリガニが捕れた。

特定外来生物なので、生かしたまま持ち帰ることはできない。そこで繁雄は、捕れたばかりのウチダザリガニの頭と胴体を切り分けてクーラーに入れ、山桜へ運んだ。ウチダザリガニは網ですくっても捕れるほど、多く確認することができた。

山桜では道代が喜んでくれた。さっそく涼さんが、さまざまな料理を試してくれた。

オオクチバスは半冷凍にしてから皮をむき、から揚げやムニエルにするとおいしかった。

フライにしたものをキャベツといっしょにはさんだバスバーガーは、昼のメニューに使えそうだった。

ザリガニは茹でるだけでもう良かったが、頭でだしをとってブイヤベースにしたり、フライにしてタルタルソースをかけたりしても美味だった。

有害動物を食べるといいうのは、研究会をアピールする点でも効果的だ、と堀場や彦じいも賛成してくれた。いつでも出せるわけではないが、捕れた時には張り紙を出してメニューに加えることになった。仕事が増えることになったが、繁雄は嬉しかった。

萌美が将来の夢である自分の旅館の設計図を作ってきた。パソコンにイラストレーターという描画ソフトを入れて、つくつたらしい。頭のいい女だと、あらためて繁雄は思った。仮の名前は「山桜旅館」となっていた。

それによると、部屋数は七室で桜村屋より小さいが、大広間は二つあり、宴会に対応できるようになっていた。調理場は山桜に隣接しており、互いに融通できる設計だった。

山桜旅館の二階の部屋からは小倉川の流れが見えるようになっており、春には桜、秋には紅葉が楽しめそうだ。初夏にはホテルが舞うところも見えるかもしれない。建設には、およそ三億円かかるらしい。

「うーん、いい計画だと思うけれども、予算をどうするかが問題だな」と繁雄は言った。「すぐに建てることはできないわね。でも、そのうち何とかなるわよ」

萌美は楽観的だった。

「何とかなると言たって、三億だぞ」

繁雄には考えられない金額だった。

「父は桜村屋を含めて、かなりの財産を持っているのよ。父が死んだら遺産が入るわ」

「その時は桜村屋に戻ればいいじゃないか」

「馬鹿ねえ。そこに誰がいると思ってるの?」

「ごめん、頭が回らなくて」繁雄は謝った。

「山桜の儲けも旅館に使いましょう。私も早く離婚して、慰謝料をふんだくってみせるわ」
そう道代が言ったので、繁雄はびっくりした。あの道代が「ふんだくる」と言うとは…
…。

外来生物駆除に繁雄は忠志を連れていくようになった。忠志はフリーターで、コンビニなどでアルバイトをしているだけだったので、つごうはつきやすかった。川釣りが好きなだけに、バスを釣るコツもすぐにつかんで、繁雄と同じくらい釣るようになった。

ウチダザリガニもタモ網を使って、瞬く間にたくさん捕ってきた。河原の外來植物駆除は体力が必要な作業だが、それも忠志は黙々とこなした。駆除の成果は研究会のホームページに掲載し、研究会の実績となった。

忠志がよく働いてくれるので、ご褒美に繁雄はプレジデントに連れていった。

「どうだ、儲かっているか？」と繁雄は訊いた。

「まあ、ぼちぼちね。春になってお客さんは少し増えたわ」

「今度から忠志が来てくれるよ」

「若い男の子は大歓迎よ。これから何度でもお店に来てくれるでしょうから。忠志君、女のことなら、何でも教えてあげるわよ」

「えっ、いや……」

「年増の女には気をつけるよ。たぶらかされるからな」

「ひどいわねえ、私はまだ若いわよ」と言つてめぐみは笑った。「ところで、村中さんが飯井の社長になったこと、知っている？」

「知らないよ、萌美からも聞いていない」

「顧問の相楽文吾と社長の飯井泰三が相次いで亡くなったのよ。それで専務だった村中が社長となって、全実権を握ったというわけよ」

「顧問も社長も高齢だったから、実質的には村中が経営を仕切っていたのだろうけれど、これですます威張るだろうな」

「一つだけ大きな変化があるかもしれない」

「何だ？」

「努よ。祖父の威光で旅館の旦那になったわけだけど、萌美さんに逃げられて、お祖父さんもいなくなったのよ。どうなるかしら、興味があるわね」

「おまえの予想を言ってみろ」

「そうねえ。村中さんの考えしただけだけど、努が桜村屋を追い出されて、萌美さんが桜村屋にもどる可能性があるわね。村中さんにすれば、桜村屋がうまくいかなかったのは萌美さんが出て行ったからでしょう。その原因は村中さんではなくて努なんだから、努がいなくなれば、萌美さんがもどることを拒む理由はない、と思うかもしれない。離婚が成立するかどうかも重要ね」

「萌美は村中を嫌っている。おまえのシナリオはありえない」

「それはあなたの願望でしょう。でも、もう一つのシナリオもあるわ。それは、努がお祖

父さんの跡をついで政治家になるというものよ。なにしろ、地盤があるから、国会議員にでもなるかもしれないわ」

「あいつは確か次男だったろう」

「当人たちの希望や適性もあるから、長男でなければだめだということはないわ」

「努には何の適性もない」

「ともかく、そういうことになれば、村中さんと努はさらに強い同盟関係を結んで、この地域を今後何十年も支配していくでしょうね」

「冗談じゃない。そんなことは耐えられない」

「でも、その場合に、萌美さんはどうするでしょうね。議員の嫁として、努さんと仲直りするかもしれないし、桜村屋には二度ともどらないかもしれない」

「もう止めよう。仮定の話が多すぎる」

「村中さんって、いくつくらいですか？」忠志が訊いた。

「六十五歳くらいだと思わ」

「それなら、あの人が威張っていられるのも、あと十年くらいでないですか。その間我慢すればいいのではないですか」

「また、似たようなのが出てくるさ。直哉もいるだろう」

「山洪商会はどうなるのかしら。直哉社長は経営能力がないし、このままでは大変ね。ただ、山洪家には資産があるから、道代さんに多額の慰謝料を払い、離婚にともなって財産分与をしても、どうということはないでしょう」

「峰太はクビになったんだ。社員が可哀想ではないか」

「それは、あなたが悪いことになっているのよ。山洪の事業をつぶそうとしたうえに、道代さんまで引き抜いたのだから。道代さんが自分の意思で行ったのだろうけれども、世間の噂ではあなたがかどわかったことになっているのよ」

「かどわかった？ ひどい言いがかりだ」

「もうこの話は止めましょう。忠志君はどんな子なの。自分でどう思う？」

「いやー、ふつうですけど」

「つまらない答ね。ふつうの子なんていないのよ。スナックでは好きなものは何だとか、スポーツは何が得意だとか、好みのアイドルは誰だとか、何でも言って盛り上げるのよ」

「おいおい、おばさんがいじめるなよ」

「僕は川で釣りをしたり、魚を突いたり、サクラソウを見たりするのが好きです」

「馬鹿ねえ、それでは繁雄さんと同じじゃないの。つまらない」

「繁雄さんを尊敬しています」

「あーあ、ほんとうにしようがないわね。それでは若い子に相手をさせるわ。くどいてもいいわよ」

そう言っつて、めぐみはもえを呼んで忠志の相手をさせた。

別のテーブルで、めぐみと二人だけになった繁雄は「とりあえず、村中と努の動向をさぐってくれ」と言った。

「いい情報だったら高いわよ」

「大丈夫だ。俺は山桜グループのボスなんだから」と繁雄は胸を張ったが、実質のボスは萌美か道代であることを、繁雄自身がよくわかっていた。

やがてサクラソウの花は枯れ、梅雨に入り、アユ釣りが解禁となった。繁雄は例年通り、午前中にはアユのオトリと入漁料を売り、午後になると山桜のためにアユを釣った。釣れ具合は平年並みであったが、客は三割増えた。忠志の話だと、長谷川は濁りのために、あまり釣れないとのことだった。

山桜で充実した食事ができるので、立ち寄るアユ釣り客も増加した。新聞社の山根も六月からやってきた。そして、忠志と三人でアユ釣り談義が始まった。

「アユ釣りの極意は何ですか？」まず初めに忠志が訊いた。

「よし、俺が教えてやろう」と山根が言った。「一に仕掛け、二にオトリ、三に場所だ。腕のよさは五番目かな」

「それでは四番目は？」

「それは知識だ。この瀬が釣れるとか、きのうここに釣り人が入ったから釣れないとか、そういうことだ」

「ほんとうですか、繁雄さん」

「当たらずも遠からずだな」

「どういうことかな？」と山根は訊いた。

「仕掛けとオトリはそこそこのものでなければならぬ。場所の見極めは重要だが、川を見ただけではわからないから、竿を出すしかないな。大雑把には、食み跡の有無でわかるのだけれど、人が釣った後かどうかまではわからないだろう。だから知識も重要だ。でも腕のよさは五番目ではないな。腕が悪いと、すぐに仕掛けを絡ませたり、根がかりさせて

しまつて、釣りにならなくなる。やはり、腕のよさが一番だな。それから、あと一つ何か
が欠けているんだよな」

「釣りのセンスと経験だと言いたいんだろう」と言つて山根が笑つた。

「ちがうな」

「もつたいぶらないで、教えてくださいよ」忠志がせがんだ。

「それはな、アユの心だ」

「アユの心？」

「そうだ。自分がアユになつたと思つて考えるんだ。どんな場所に棲んで、どこで藻を食
みたいのか、考えてみるんだ」

「それは流れがあつて、藻のたくさん生えているところでしょう」と忠志は答えた。

「解禁当初はアユがたくさんいて、競争しているから、一等地になわばりができるだろう
な。誰でも釣れる時だ。だが、一等地といつても、流れが速ければ良いというものではな
いぞ。石が大きくて、その裏で休むことができる場所や、なわばりへの侵入個体が少ない
場所がいいんだ。速い流れを泳ぎながら侵入者を攻撃するためには、多くのエネルギーを
使うからな。だから、大石の周りには大きなアユが多いんだ。しかし、そういう場所のア
ユはじきに釣られてしまう。誰でもそういう場所を狙うからだ。そうすると、釣られにく
い場所になわばりを作つた方が長生きできるだろう」

「ボサの下とか竿が届かない場所ですか？」

「そうだ。それから、淵の中にもなわばりはできる。そういうアユはやはり釣られないで
残っていることがある。そういうのは、アユを引つ張るだけでなく、泳がせて釣るんだ。
ある時に、どこにアユがいて、どこになわばりを作っているのかを、川に立って考えるん
だ。それは、時期によつてもちがうし、アユの個体によつてもちがうんだ」

「個体によつてちがうんですか？」忠志ばかりが質問し、山根は黙つて聞いていた。

「当たり前だろう。動物にはみな個性があるんだ。アユだって、攻撃しやすいのあれば、
おとなしいのもある。大胆なのもいれば、臆病なのもある」

「そうだと、それをどう釣りに生かすんだい？」と山根が訊いた。

「アユの誘い方を一つのパターンだけにするのはなく、いろいろ試してみるんだ。オト
リを入れて二分くらいで掛からなければ、上下左右に動かすのも一つの方法だし、あえて
五分くらいじっと待つこともある。人が竿を出していないところでは、早めに一つの場所
を見切る方がよいが、すれている場合には工夫する必要があるんだよ。それから、なわば

りはいくつか固まって作られる傾向があるから、一つ釣れたあたりではまだ釣れると考えた方がよい。そういう、なわばりができるエリアでは、次のなわばりもできやすいので、何時間かしたらまた釣れる」

「それはどうですか？」

「いくつかのなわばりが隣接していれば、全体で侵入者を追い払うことができるんだ。なわばりの所有者どうしはあまり攻撃し合わないのだが、よそ者が来るとすごい勢いで攻撃するんだ。そういうなわばりでは藻の状態もよく、黒っぽい藍藻が多くなる。アユは藍藻を好むので、あるなわばりアユが釣られても、また別のアユがそこになわばりを作るというわけだ」

三人のアユ談義は尽きなかった。途中で道代がやってきて、ここでうだうだしているなら、もっとアユを釣ってきなさい、と言ったが、繁雄は動かなかった。朝から釣り人が攻めて、昼間は釣れなくなっている。次のチャンスは、アユが腹を減らして瀬に出てくる午後三時すぎである。それまでは休息していた方がいい。

それにしても、繁雄は楽しかった。美しい小倉川でアユ釣りを楽しみながら、暮らすことができていている。釣って、売って、食べて、儲かるのである。仲間もここに集結している。こんなに充実した日々は、これまでなかったような気がした。

同じ頃、オオクチバスは産卵期を迎えていた。平地では四〜五月に産卵するが、田山池は山の中腹にあったので、六月に産卵したのである。その産卵床の一箇所から、三千から六千個の卵が孵化する。それをオス親が守って育てるのであるから、恐るべき繁殖力である。

オオクチバス駆除においては、産卵床をつぶしたり、稚魚をすくいとったりすることがもつとも重要である。そうしないと、膨大な数の子供が育ってしまうからである。

繁雄と忠志は、ウエーダーを履いて池を一周しながら産卵床を探した。産卵床は直径五十センチほどの円形である場合が多く、白く浮いて見えるので、見つけやすかった。オス親がいる場合には、卵が産み付けられていた。二人は卵を見つけると、砂利ごとバケツに入れて取り除き、最後にあたりを踏みつけて、生き残りが生じないようにした。

この時期には、オオクチバスの食欲が高まり、釣りやすくなる。そのために、立ち入りが禁止されているにもかかわらず、侵入者が多かった。繁雄たちは、そういう輩を見つけると、注意して追い返した。繁雄が睨みつけると、たいいていの者は謝って帰って行った。

ある時、親子連れが茂みに隠れながら、ルアーを投げている。父親をどこかで見たこと

があると思つたら、以前に村中とともに山洪商会にやってきて、繁雄や道代に子が何人いるのか訊いてきた男だった。

「おまえ、何をしてるんだ！」と繁雄は怒鳴った。

「……」

「立ち入り禁止、釣り禁止だ」忠志も威嚇した。

「せつかく来たんだから、もうちよつと釣らせてくださいよー」

「何だと！」

繁雄は眉を吊りあげて、また怒鳴った。

「知らない仲ではないし、いいじゃないですか。うちの子も楽しんでいるんですよ。釣れたらあげますよ、だから釣らせてくださいよー」

「そうだ、警察を呼んで、逮捕してもらおう。そうしたら、飯井の評判も落ちるだろう」と繁雄はわざと聴こえるように言った。その男は慌てて帰って行った。

何もかもがうまくいっているように思えたが、七月になって台風が襲来し、川は大増水した。長谷川には開発地から赤茶色の濁り水が大量に流入した。小倉川も水位が五メートル上がり、下流の一部で氾濫した。アユ釣りどころではなかった。

繁雄はアユがこのような増水で死ぬことはない、と思っていた。問題は氾濫防止のために、小倉川で河川改修が行われることだった。さらに、小倉川の上流に県営のダムを建設する計画が立てられたことを、繁雄は組合長の春田から聞いた。

ダムは治水と利水のためにつくられ、農業用水と水道に使われるらしい。大雨が降ると、上流の水をダムに貯め、その後少しずつ放水する計画だという。つまり、濁った水が長期間、流されることになる。その結果、川の水質は低下し、アユの香りも失われる。繁雄には耐えられない話である。

早速、繁雄はプレジデントに行つて、情報収集をはかった。

「おい、どうなっているんだ」と繁雄はめぐみに訊いた。

「努が議員になることはなさそうだわ。やはり、あの男は家族の間でも無能者だと思われる。いるようで、議員の将来の跡継ぎは長男になるみたい。ただ、相楽家が権力を持ち続けることは確かだから、村中さんは努を置いておくでしょうね」

「それはわかった。それでダムの方はどうだ？」

「ダムが建設されると、いろいろな仕事ができるから、地元の企業にとっては利益が大き

いのでしょね。それで、今度のような増水と氾濫が起きるのを待っていたというわけだわ。村中さんが中心になって、国会議員や県議員が動いているらしい。長谷の土地開発と同じようなものね」

「また、村中か。あいつがやりたいことは、俺が嫌いなことばかりだ。闇討ちにしてやるうか」

「馬鹿言わないでよ。あなたこそ、夜道には気をつけた方がいいわよ。向こうには、いくらでも手下がいるのだから。それから、今日はほかにお客さんがいないから、大声で話してもいいけれども、ふだんは聞かれちゃうからだめよ。今日は休みでいいけれども、もえちゃんも信用してはいけないわ」

「ダムは国のレベルではもう造らない方針だろう。環境への影響が大きいからな。ダム建設には、多方面の反対があるはずだ」

「こういう田舎ではどうかしらね。川の氾濫防止のため、と言われると反対しにくいわね」
漁協では、緊急集会が開かれた。繁雄が入ると、一斉に視線が集まった。要注意人物と思われているのは明らかだった。

市井が近寄ってきて、「忠志がお世話になってるそうで、ありがとう。でも、あんまり過激なことは教えないでくれよ」と笑いながら言った。「冗談とも本気ともとれる口調であった。

小倉川の組合員は絶対反対を主張した。この漁業協同組合にとって、小倉川は長谷川よりも重要であり、組合員も多い。長谷川が開発事業によって、釣れなくなってしまった現在、小倉川までだめにするわけにはいかなかった。補償金が入っても、それによって漁協本部が潤うだけである。だめになった川で、いくらアユを放流しても釣れるようにはならない。そんなことは誰もがわかっていた。

組合長の春田とその他の理事たちも、県や市に計画撤回を申し込むことに賛成した。漁協を支援してくれるはずの県会議員にも依頼することになった。しかし、繁雄は漁協を信じているわけではなかった。

川では石の上の藻が剥ぎ取られて、アユ釣りができる状態ではなかった。これほど大きな増水だと、分流でも石裏でも釣れない。オオクチバスの生息池も濁っていて釣りはできなかった。道代には、「何でもいから捕ってきて」と言われたが、ザリガニくらいしか提供できなかった。アユ客が来ないこともあり、山桜の客も減っていた。

そこで繁雄は上流でイワナを狙うことにした。小倉川の上流にある原生林の中では、濁

りは少なく、例年なら二、三十尾のイワナが釣れるはずだった。ところが、この時には、イワナは釣れるべき場所で釣れず、たまに変なところで掛かるだけだった。

誰かに先に入られたのかもしれない、と繁雄が思った時、変な当たりがあり、変な魚が釣れた。それはブラウントラウトだった。茶色っぽい外来のマスで大きさは三十センチもあり、大イワナだと思っただけに、繁雄はがっかりした。ブラウントラウトは、大きなものでは十キロ以上になり、ヤマメやイワナを襲って食うことが報告されていた。

それだけではなかった。次の淵ではコクチバスが釣れたのである。コクチバスはブラックバスの一種で、他の魚を食う点ではオオクチバスと同じだが、河川に適応して増えることが知られていた。日本各地で分布を拡大させている。

ブラウントラウトもコクチバスも生態系へいちじるしい悪影響を与える点で警戒されていたが、それがこの地域で初めて見つかったのである。

繁雄はとつさに努と村中の顔が頭に浮かんだ。あいつらが放流したにちがいない、と思った。それではどうするか。とりあえずは、外来魚が繁殖して増えるのを防がなければならぬ。そのためには、捕って捕って捕りまくるしかない。繁雄は忠志と二人で、釣りや投網によって、ブラウントラウト六尾とコクチバス十尾を捕まえた。水が澄んだら、潜って残りを探すことにした。

山桜では研究会のメンバーが集まって、ダム建設と外来魚問題について話し合った。重村も来てくれた。

「やれやれ、自然破壊のピッチが速いのう。これでは、わしの住みかもつぶされてしまいそうじゃな」と彦じいが嘆いた。

「ダムは父の仕業だわ。その事業にかかわれば、とんでもない利益が出るもの。ずっと前から狙っていたんだわ」

「ダムも外来魚も絶対に許さない」

繁雄は怒りをこめて言った。

「まず、一つ一つ考えてみようではないか。ダムの方は、まだ計画が提案されただけであり、反対勢力も多いはずだ」と堀場が言った。

「漁協はあてにならないかもしれない」と繁雄が続いた。

「川の漁協はそうかもしれないが、海の漁協は強く反対するはずだ。海の魚は川から供給される栄養分に強く影響されるんだ。ダムができて生態系が変わると、海の魚が獲れなくなるかもしれないからね。それから、海水浴場やその周辺の観光業も、川からの砂の供給

が止められて、砂浜が消える恐れがあるから反対するだろう。莫大な建設費を県や市から支出するのだから、それだけで反対する人もいるはずだ」

さすがに堀場の視野は広がった。

「ダムを造るのに、いくらぐらいかかるのですか」と萌美が訊いた。

「ダムにも大小があるので、いちがいに言えないが、少なくとも二百億円はかかるだろうね。五百億円以上かかるダムも多い。計画して着工まで何年もかかり、それから建設に十年以上かかるから、請け負う企業は安定して儲かることになる」と重村が説明した。

「山洪商会の皆は喜ぶでしょうね。どうせ小さな仕事しか回って来ないでしょうけれど」道代が自嘲気味に言った。

「ダムの方は、私が各方面と話してみるよ。大きな反対運動が必要だ」と堀場が提案した。

「外来魚は絶対に許せない」

繁雄は机を拳で叩きながら言った。

「コクチバスもブラウントラウトも、県内にはいなかったから、誰かが意図的に放流したことになる。コクチバスは特定外来生物だから、その運搬、放流は犯罪だ。どこかの法人がやったのなら、一億円の罰金が科せられる可能性がある」と重村が説明してくれた。

「ブラウントラウトはどうですか？」山口が訊いた。

「ブラウンも世界的に生態系への影響が大きい魚として警戒されている。釣りには人気があるようだが、在来の魚への影響が大きいんだ。川で増えると、イワナやヤマメを減らし、アユを食べてしまうだろう」と重村が答えた。

「駆除方法がありますか？」深沢が訊いた。

「ともかく、コクチバスもブラウントラウトも侵入初期に捕ってしまい、繁殖させないことが必要だ。増えたら手をつけられなくなり、薬品で全滅させるしか方法がなくなってしまう」と今度は堀場が答えた。

「薬品って？」皆びっくりして一斉に訊いた。

「アンティマイシンAという薬品を川や湖沼に流して、生物を全滅させるんだ。アメリカでは実際に行われている。じきに自然に分解されて消失するので、毒性が残ることはなく、国立公園などで外来魚を駆除するために使われている」

重村はさすがにこの分野の論文にくわしく、専門家ならではの情報を教えてくれた。

しかし繁雄は、「それはだめだ。アユも死んでしまう」と反発した。

「日本の川の水は水道や農業に使われているから、無理だろうな。でも、小さな湖沼では

できるかもしれない。まあ、将来の話だ」と重村も言った。

「とりあえず、これからどうするの？」と萌美が質問した。

「県の水産試験場も、実態調査と駆除をしてくれるらしい。電気ショックという機械を使って川に電流を流し、浮いた魚を捕るらしい。魚は一時的に麻痺するだけで死なない。俺たちも釣り、投網、それから潜水しての魚突きで、一尾残らず捕ってやる」と繁雄が答えた。

「外来生物法があるのに、どうして放流するのかしら。嫌がらせだとしたら、また放流されるかもしれないわね」

道代が心配そうに言った。

「監視カメラを上流の駐車場に設置してもらったら、どうだろうか。そして、設置についてマスコミを使って宣伝すれば、抑止効果があるかもしれない」と重村が言った。この案に皆が賛成して、県に設置を依頼することになった。

小倉川の水位が元に戻り、アユが釣れ出した。梅雨明けの一番釣れる時期の到来である。ブラウントラウトもコクチバスもその後は見られなくなった。ダム問題については、三つの政党と市民団体が反対同盟をつくり、根気強く運動していくことになった。山根も全国版の新聞で特集記事を書いてくれた。

アユが釣れ出すとともに、山桜も盛況になっていった。バスによる送迎は正しい選択だった。夜の客が増えて、利益は倍増した。

ウチダザリガニはいくら獲っても減らなかった。池のオオクチバスは、さすがに釣れなくなってきたので、繁雄はドライスーツとシュノーケルを着用して泳ぎながら、オオクチバスを見つけるとヤスで突いて捕った。水の透明度が高く、繁雄が水の中で近づいてもバスは大して警戒しなかった。でかいバスほど当たりやすく、この頃には繁雄の腕前は上がっていたので、八割くらいは突いて捕れるようになっていた。

湖のところどころでは水草が生えていて、本来底生魚のヨシノボリが湖底だけでなく、水草にも張り付いていた。太陽の光が湖面を照らすと、ゆらゆらと揺れる水草とヨシノボリが金色に輝いた。この池にはかつてはイワナも生息していたが、バスが侵入してから絶滅した。残っているのは、バスのほかには大きなコイと小さなヨシノボリだけであった。オオクチバスはヨシノボリと昆虫類を食べていた。

やがて、オオクチバスも繁雄を警戒するようになっていった。繁雄は水草の陰に隠れて、

近寄るオオクチバスを突いたり、夕方に暗くなってから静かにバスに近づいて仕留めたりした。繁雄は大きなオオクチバスを見つけると、「見つけたぞ、村中」と心の声を挙げた。そして、ヤスが当たると「どうだ、村中」と雄叫びを上げた。

ところが、まもなく繁雄たちは新たな困難に直面することになった。山桜の隣接地に突然、重機やトラックが出入りし、騒音を立てるようになったのである。しらべてみると、山桜の下流側の二ヘクタールを飯井土建が買収し、整地し出したのである。何のための工事なのかわからなかった。ただ、山桜にお客が多い時に限って、大きな騒音を出したことから、営業妨害が目的のように感じられた。

「汚いことをしやがって」

繁雄は食堂の机を強く突いた。

「お客さん、また減ってしまったわね。どうしましょうか」

道代も困惑していた。

「父の暴挙で申し訳ありません。一時的な妨害ならいいのだけでも、こちらと同じ商売をされると死活問題だわ」と萌美が言った。

「土地の購入代に加えて、重機を動かす人件費がかかる。向こうも損をしているのではなからうか」と繁雄は推測した。

「長谷の事業で儲けているのでしょね。でも、確かに無駄なことだわ」と道代も同意した。

「ひよつとすると、父は私たちへの恨みで、正しい経営判断ができなくなっているのかもしれない。あの人のことだから、会社をワンマンで動かしているのでしょう。他の社員の忠告を聞かずに暴走しているのだとしたら、会社でも問題になるでしょう。もう年だから論理的な思考ができないのかもしれない」

「それなら、どうしたらいいんだ？」と繁雄が訊いた。

「放っておけば、自滅するのではないかしら。山洪商会のように。あつ、道代さん、ごめんなさい」と萌美が申し訳なさそうに言った。

「いいのよ。うちも世襲で無能な社長が会社をだめにしたものね」

「ただ待つだけでは嫌だな。村中の弱点はないのか？」

繁雄は萌美に訊いた。

「事業としては、長谷の開発が終わると収入源がなくなって困るでしょうね。ダムは難航しているし、旅館は休業状態だから、努を抱えているだけ赤字でしょう。それから、各方

面の政治家に献金しているのよ。小額の迂回献金を何十もしているはずよ。そこに不正が見つかれば、大きな弱点になるはずよ」

「そのあたりのつながりがあるので、努を追い出せないのかもしれないな。ただし、努はただのお荷物だ」

「隣の工事のことだけれども、ホームページなどを使って、反撃したらどうかしら」と道代が提案した。

「反撃？」繁雄は道代を見ながら訊いた。

「長谷の自然をつぶし、ダムをつくろうとする企業が、小倉で騒音を立てて営業妨害している、と書き立てるのよ。飯井とか村中とか、具体的な名前は出さないわ。でも、どこがやっているのかは、誰でもわかるでしょう」

「それはおもしろいわ。企業イメージを落とす作戦ね。私たちがひどい目に会っているとわかれば、支援してくれる人も増えると思うわ。父は慌てるはずよ」

繁雄もこの提案に賛成した。山桜のホームページのトップに「山桜、土建業者につぶされる！」という見出しのもとに、騒音被害に悩まされていること、この企業が長谷の開発によって巨額の利益を稼いでいること、土砂流入で長谷川をめちゃくちゃにしたが漁協にはほとんど補償金を払っていないこと、多くの政治家に献金していることを書き連ねた。

また、小倉長谷自然研究会のホームページと会報でも、ブラック企業がこの地域の自然を破壊し続けている、と批判した。

新聞社の山根は、この騒音問題がダムに反対したことへの報復ではないか、という記事を書いてくれた。また、同じ新聞でコクチバスやブラウントラウトの密放流が起きていることも紹介してくれた。

山桜に来た客たちも、騒音のひどさに怒っていた。やがて、この問題はこの地域で広く知られるようになり、町役場への苦情も増えた。その結果、隣地での工事は徐々に縮小し、ついには止まった。繁雄たちの勝利だった。

繁雄は久しぶりに峰太と忠志を連れてプレゼントに行った。

「本当にご無沙汰だったわね」

めぐみが迎えてくれた。

「いろいろと大変だったんだ。小倉川や山桜の危機だったんだから。それでどうだ、世間の評判は？」と繁雄が訊いた。

「村中さんは元々、評判良くなかったから、今度のことでますます悪者になってしまった

わね。あなたも同じように評判は悪かったけれども、道代さんと萌美さんのおかげで、少しは回復したかもしれない。彼女たちの人気は相変わらずすごいわね。欠点と言えば、あなたと同じ屋根の下に住んでいることくらいかしら」と言ってみぐみは笑った。峰太も忠志も笑った。

「それでどうなの。この人は道代さんか萌美さんとできているんじゃないの？」

めぐみは峰太に訊いた。

「そんなことはわかりません」と峰太が言ったところで、繁雄は怒鳴った。

「馬鹿、わからないじゃなくて、そんなことはありません」と言わないか。二人とも人妻なんだぞ。何も起こるわけじゃないか——」

「そうだったわね。離婚前にそんなことになったら、条件が悪くなってしまふものね。もえちゃん、浮気はなさそうだって、裕子さんに教えてあげて」

「えー？」と繁雄は声を上げた。

「冗談よ。馬鹿ね」と言ってみぐみは大笑いした。

「繁雄さんの彼女はめぐみさんだけですよ」

今度は忠志が確信に満ちた表情で言った。

「あら、そうなの。それじゃあ、私はどうしたらいいのかしら。山桜の味方をしたら、恋敵の道代さんや萌美さんを助けることになってしまふし、裕子さんの味方をしたら繁雄さんが困るのね。むずかしいわ」

「おまえは、役に立つ情報をくれたらいいんだよ。飯井はどうなっている？ 何か知っているだろう」

「やはり、この頃は、企業イメージが重要みたいね。ブラック企業と言われたら、仕事はしにくいわよ。新聞にまで取り上げられて、飯井は困っているようね。とくにダム問題は政治的対立も生み出しているから、村中さんとながりのある政治家には不利に働くと思わうわ。一方で、ダム反対を掲げる無所属候補が勢力を増しているらしい。だから保守系の政治家たちも、飯井や村中さんと距離を取り始めているみたいよ」

「飯井の中はどうなんだ。村中を脅かす者はいないのか？」

「それがあるのよ。まだ五十台の後半なのだけど、谷川という専務が頭角を現しているみたい。こんどの村中さんの失敗がどういうことになるか楽しみね」

「めぐみさん、何でも知っているんですね。すごいです」と忠志が感嘆した。

「そう言ってくれてありがとう。いつでも抱いてあげるわよ」と言ってみぐみはまた笑

った。

ガタンと音がして、直哉が入ってきた。一人だった。ふらふらと歩いていたので、もうだいぶ酔っているようだった。

「山桜さんたちがお揃いか」

直哉は吐くように言った。

「あらまあ、社長こつちでいっしょに飲みましょう」とめぐみが誘った。

「落ち目の俺がいてもいいのか？」

「社長、どうぞこちらへ」と峰太が言った。

「山桜の社長さんは嫌でないのか？」

「別にかまわないよ。もうおまえのことは何とも思っていないから」

「うちの経営が悪化しているから、何とも思っていないということか？」

「そういうことではない」

「おたくの道代さんが、離婚を前提として、慰謝料と財産分与を求めてくるんだよ。いくら要求しているか知っているか？ 五千万だよ、五千万だ」

「ほかに女を作って、子供を産ませて、いっしょに住んでいるのだから。そのくらい仕方ないではないか。たくさん土地を持っているのだから、それを売ったらどうにでもなるだろう」と繁雄は言った。

「土地はおやじのものだ。俺にはそれほど財産はない」

「村中に出してもらいなよ。仲良しだろう」

「あんな野郎、信用できるか。利益の少ない下請け仕事ばかり命令しやがって、儲かる仕事は自分のところで独占だ。山洪の利益は少ない」

「まあ、社長、一杯どうぞ」

峰太が日本酒を注いだ。

「みんな、幼馴染でしょう。恨みっこなしにしましょうよ」とめぐみが言った。

「俺の敵は村中だけだ。あいつをつぶしたいんだ」

繁雄は強い口調で机を叩きながら言った。

「山洪は飯井とはもう仕事はしない。竹渉産業と提携することにした」

「竹渉は飯井のライバル企業ね。県の東部に地盤があるのだけれども、このところ西部にも進出しているようね」めぐみは竹渉についても知っていた。

「それなら、山桜も竹渉とパイプをつくってもいい。今度、紹介してくれ」と繁雄は直哉

に言った。

直哉は苦笑しながらうなずいた。

翌日、繁雄は忠志と長谷を見に行った。長谷の開発はさらに進んでいた。サクラソウの自生地の周囲を除くと、すべての土地はかき混ぜられ、山の少なからぬ部分が削られていた。土煙がもうもうと立ち上がり、サクラソウの自生地にふりかかっていた。鳥は消え、川は濁り、アユ釣りをする者はいなかった。大型トラックがひっきりなしに行き交った。美しい自然が壊されるというのは、こういうことをいうのだ、と繁雄は実感した。

「長谷の人達はどう思っているのだろうか？」

繁雄は忠志に訊いてみた。

「みんな、あきらめてしまいましたよ。自分たちが賛成したから、こうなったんですからね。それでも、新しい施設で働こうと思っている人と、この村から出ていこうとする人がいるようです。漁協の組合員を辞めた人もいます」

「小倉川はこうならないようにしましょう。俺はそのためなら何でもするぞ」と言って、繁雄は意味もなく、サクラソウの自生地に向かって「オ——」と叫んだ。

山桜に戻ると、彦じいが来ていた。

「彦じい、久しぶりだな。どうしていたんだ。携帯も持っていないし、連絡しようがないじゃないか」

「携帯なんか、わしのおるところには通じないよ。ちよつとな、旅行をしていたんじや」

「何のためにどこへ行ったんだ？」

「いろんな自然を見たくなくなったんじや。保全活動の実態もしらべてきた」

「そんな金、よくあつたな？」

「馬鹿者、マツタケだけでどれだけ稼いでいると思ってるんだ。それに毎日節約しているからのう」

「貧乏そうに、うちへアユを食いに来ていたのは、芝居だったのか。騙されたよ」

「まあ、そう言うな。サクラソウの開花は終わっていたが、そういう時こそ、どのように保全しているのかを見る価値があるんじや。だから、埼玉、群馬、岩手、山形、長野などに行ってきたぞ。東北では、仙台と酒田でサクラソウの愛好家と語り合ってきた。久しぶりの旅はおもしろかったわい」

「あら、彦じい、来ていたの？」

道代も顔を出した。

「彦じいはマツタケで儲けた金で旅行していたんだって」

「そんなに採れるのなら、うちにももつと卸してよ」

「うん、うん、道代が言うなら、そうするわい」

「それで、旅行の成果はどうだったんだ」

「サクラソウの守り方は、やはり二通りじゃな。誰でもわかるように看板や柵をつくり、公園のようにして保全する方法は、町に近い河川敷で行われている。これは、長谷の自生地に近いな。もう一つは、誰にもわからないところで、ひっそりと保全する方法じゃ。山の中では、監視がむずかしいから、場所を特定されることが必要じゃ。これはわしの方と同じじゃな」

「サクラソウ保全の会はどんな感じだった？」と繁雄は訊いた。

「どこも、うちよりは大きい」と彦じいは笑いながら答えた。

「それから、保全の会が互いに交流していて、楽しそうじゃ。どこも長谷みたいに、みすぼらしい生息地ではないからな」

「私たちももつと連携しないとだめだわ。どこと連携したらよいか、わからないけれど」と道代が言った。

「それについては、重村さんと堀場さんに相談してみよう。俺にもよくわからないから」と言って繁雄も同意した。

「一方で、自然保護の団体どうしが対立している場合もあった。保全の会と研究者がうまく連携している場合もあれば、うまくいっていない場合もあった。むずかしいもんじゃな。むしろは小さな会だから、こうしてまとまっているが、会が大きくなると、会員どうしの軋轢が生まれるんじゃろうな」

「そういう保全の最終目標って何かしら。それがわかれば、私たちももつと前進できる気がするわ」と道代が言った。

「山桜の目標は、旅館をつくり、居酒屋も立派にして、収益を上げることだよな。割とはつきりしている。ダムを造らせないことや外来生物を駆除することも目標だ。でも、それだけだと何か物足りない感じがする」と繁雄が言った。

「ダムや外来生物はよそから降ってきた災難じゃろう。それに対応するのは必要なことじやが、そういうものが降って来ないようにすることの方が重要なんじゃない」

「それではどうしたらいいんだ」

「おまえは何でも訊きたがるのう。もっと自分の頭で考えんかい。そうしないと、ここも萌美と道代に乗っ取られてしまうぞ」と彦じいは言い、道代も笑った。

山桜では新たなサービスを始めた。川のすぐ近くに座敷をつくって、川の流れを見ながら食事ができるようにしたのである。京都の川床料理をヒントに、三か所設けた。暑い夏でも、川面を走る風は心地よかった。

川床料理としては、新たにウナギ料理、すき焼き、そうめんを始めた。すき焼きとそうめんは、京都貴船の川床では定番メニューである。

このほかに、涼さんの提案で、アユそうめんとイワナそうめんを始めた。塩焼きにしたアユかイワナにだし汁をかけ、魚の上に茹でたそうめんを載せるのである。和食ではよく使われる料理で、だし汁とそうめんが魚の味をよく引き立てた。このサービスは人気となり、一ヶ月先まで予約で埋まった。山桜の売り上げはますます伸びていった。

山桜では、おいしい天然アユが食べられるという評判が県外にも広まり、アユの供給が追いつかなくなってきた。繁雄と峰太、忠志が釣るだけでは足らなくなったのである。

そこで山桜では、釣り人から釣ったアユを買い取るサービスを始めた。アユは大きさを四等級に分け、大型のものはキロ四千円で買い取った。このサービスも当たり、釣り人はさらに増加した。

アユの釣り人は、天然アユでも食べ飽きている。その家族も同様である。近所や親戚に配るにしても、毎回では飽きられる。それを買い取ってもらえれば、ガンリン代やオトリ代の足しになる。

また、小遣い稼ぎのセミプロも現れるようになった。おかげで、山桜では、ますます多くのアユを提供できることになり、オトリも売れた。さらに、アユを売りに来た釣り人は、そのまま山桜で食事をしたり飲んでいたりすることが多くなった。アユの買い取りサービスは山桜の利益を二重に増加させた。

アユが十分に入手できるようになったので、山桜は萌美が働いている仲谷旅館と提携することになった。

山桜の利用者は、たとえオトリを購入したりアユを売ったりしただけのお客さんでも、仲谷を割引利用することができた。逆に、仲谷に宿泊したお客さんは、山桜で食事やアユを特別料金で利用できた。仲谷は温泉旅館なので、両方で温泉、釣り、酒、料理を楽しめることになった。このサービスを利用するお客さんは増えていった。山桜から仲谷旅館に、アユや山菜を供給する機会も増加した。

繁雄は山桜のお客さんに対して、アユのすばらしさ、ダムのない川の美しさを何度も訴えた。ここにダムを造ろうとする飯井土建は問題である、と力説した。そして、この考えは釣りや食事に訪れた人達に浸透していった。

同時に、すべての業者が、飯井のように自然をないがしろにするわけではないことも、わかってきた。企業イメージを高めるために、自然保護に配慮したり、積極的に協力したりする会社も確かに存在した。

翌週、繁雄は直哉とともに、竹渉産業を訪れた。応接室にやってきたのは社長の竹渉茂美だった。

「山桜の向井さん、お会いしたかったですよ」

竹渉はあいそよく繁雄に握手を求めてきた。

「はじめまして竹渉社長、向井です」

「いやあ、長谷の開発やダム建設問題でのご活躍は以前からうかがってましたよ」

「それは、さぞかしうつとうしい奴だと思っておられたでしょうね」

「いやいや、うちは飯井さんとはちがいますよ。地域の人たちの信頼をえてこそ、私たちの仕事は成り立つのですよ。強引なことをしてはいけません」

「飯井の村中さんをご存知ですか？」

「もちろん知っていますよ。うちとはライバルですからね。ただ、仕事のやり方がまったくちがう。向こうは政治家を利用して、強引に開発しようとする。うちは皆が必要なことしかしません。ダムで大儲けしようとするのではなく、小さな利益を効率よく積み上げていく、そして同じお客さんから何度でも仕事をもらえるようにしているんです」

「それはほんとうだ。俺は竹渉さんと長い付き合いだが、悪い評判は聞いたことがないと直哉が言った。」

「そうだとしても、自然を破壊することにはちがいないのではないですか？」

繁雄は意地悪く訊いてみた。

「建物を作ったり、原野を造成したりすることをすべて自然破壊というなら、向井さんの言うことはその通りだと思いますよ。でも、うちは皆が納得しない限り、工事は進めません。もちろん、希少な自然は尊重します。ここに、うちが担当した事業の概要がまとめられています。読んでいただくと嬉しいですよ」

そう言って、竹渉は厚い資料を繁雄に渡した。

「それでは竹渉さん、河川の護岸改修はどうですか。川を平坦にして、魚が棲めなくなっ

てしまうのではないですか？」

「よく訊いてくれました。うちの護岸改修はよその工事とは全然ちがうのですよ。まず、川をいじるときに、決して水を濁らせません。必要なときには、川の流路を変えて、陸地の部分だけを改修するので、下流には一切影響しないようにします。それから、新しい護岸には魚の棲みかとなるような、隠れ家をつくります。さらに、これまでであった淵とその中の隠れ家はそのまま維持されるようにします。川幅が狭く、これらのことが守られない場合もあるでしょうが、そういう場合にはそもそも工事を請け負わないことにしています」

「仰ることが本当か否かは、実際に工事を見た場所を見てから判断したいと思います」

「私が言いたいのは、土建屋が飯井のような企業ばかりではない、ということ。簡単には信じてもらえないでしょうが、これまでの実績やこれからの仕事をよく見てください」

そこまで言われたら、繁雄もわかりました、と言うしかなかった。帰ってから、皆の意見を訊いてみることにしよう。礼を言って帰るときに、玄関の水槽でアカザとカワムツが泳いでいることに気がついた。

7 山桜をめぐる人間模様

その年の九月にリーマンショックが起こり、世界中が不景気になった。日本でも不動産価格や株価が暴落し、小さな不動産会社や建築会社の多くが倒産した。輸出企業の業績は悪化し、給料は軒並み下がった。景気の悪化は、小倉町や長谷町でも例外ではなかった。しかし、もともと地価が高騰していたわけではなかったため、飯井や山洪が倒産することはなかった。

長谷の工事は進んだが、その全体計画は当初に比べて大幅に縮小された。そして五年後に長谷の開発事業は終わり、レストランと売店が開業した。小さな遊園地と運動場、背後の山を利用した公園もできあがった。

しかし、淡水魚の水族館はできなかった。維持費が高すぎるという理由からだったが、元々作る気はなかったのではないかと繁雄は思った。旅館も温泉施設も建設されなかった。施設全体は長谷ドリーミイランドと命名された。

一方、海の方のレジャー施設はまだできておらず、高速道路を降りて長谷に集まる客は少なかった。長谷ドリーミイランドにしても、周辺の開発にしても、リーマンショックの影響を受けて、中途半端なものになってしまった。

施設に雇われた地域住民は少数に留まった。地元の議員や役場の推薦する関係者が大半を占め、元から長谷にあった食堂と売店は閉鎖された。

サクラソウの自生地は工事の影響を受けて狭くなった。サクラソウの株数も減少した。周囲の木を伐採したことによって、日当たりが良くなりすぎたのが原因だ、と堀場は言った。工事中に砂塵を浴びたことも影響したかもしれない。

柵に囲まれていたので、サクラソウが荒らされることはなかったが、柵の外から見える自生地はみすぼらしかった。ハナバチや野ネズミはほとんど見られなくなり、サクラソウの種子はまったくできなくなった。

長谷川は工事が終わったために、澄んでいるように見えた。しかし、ひとたび雨が降ると、周囲から濁り水が入り、川底は土砂で埋まっていた。かつて見られた水深のある大淵は消失し、アユやヤマメが溜まる場所は失われていた。繁雄は、そんな場所では竿を出す気になれなかった。

リーマンショックの直後には、山桜の利益も減ってしまったが、皆の努力の結果、徐々に回復していった。

道代は直哉と正式に離婚し、慰謝料および財産分与として二千万円を受け取った。

この金額は直哉の財産からすれば安かったが、弁護士の話では妥当な金額らしい。直哉の父母が亡くなり、直哉は莫大な遺産を相続していたが、それは財産分与の対象とはならない、とのことであった。財産分与は、直哉と道代が結婚していた間に、直哉が貯めた金額を分けるという意味しかなかった。

道代が直哉と結婚を続け、直哉が死んだ時に山洪家の財産を相続する、と仮定しよう。その場合には、たとえ直哉が遺産のすべてを裕子に相続する、という遺言を残していても、道代は正妻としてその一部を取り返すことができる。そして、その金額は山洪家の資産から考えて何億円にもなるだろう。しかし、道代はそんな道を選択しなかった。

直哉は離婚して半年してから裕子と再婚した。萌美の離婚話は、努が拒否したために進まなかった。裁判をすれば離婚できたかもしれないが、萌美はそれを選択しなかった。山桜のイメージが悪化することを避けたかったからである。

秋の紅葉シーズンが終わった頃、繁雄は峰太と忠志を誘ってプレジデントで飲んでいた。

「村中はどうしているんだろう。最近、さっぱり見かけないな」

繁雄がめぐみに訊くように言った。

「飯井の経営は苦しいみたいよ。ゼネコンは工事で利益を出した後、一斉に去っていき、

ドリーミイランドの運営は飯井と町に任せられた。しかし、客が少ないので大幅赤字。村中はその責任を追及されているみたいね」とめぐみは答えた。

「海のレジャー施設を当てにしていたんだよね。そこへ向かう客が寄って行くと、でも、海の事業の方が止まってしまったから、誰も来ないんだ。レストランにみやげ物屋なんてどこにでもあるし、遊園地ももつと規模が大きいものが都会にいっぱいあるから、魅力はない。せいぜい、サルが利用するくらいだよ」と忠志も厳しかった。

「そんなことは最初からわかっていたことだ。でも、海の方の事業はどうして止まったんだ？」

繁雄が問いかけた。

「事業主体となっていた中規模のゼネコンが、リーマンショックでダメージを受けたうえに、東京のマンション建設でトラブルを起こしたようよ。マンションができたものの、いくつかの不正が見つかり、作り直さなくてはならなくなったんだって。また、この不正に関連して、経営陣の間でごたごたが起こって、新規事業どころではなくなったらしい。さらに長谷の施設が赤字ということで、やる気をなくしちゃったんですって」とめぐみが言った。

この店はほんとうに恐ろしい。めぐみはすっかりママが板につき、あらゆる情報を知り尽くしていた。山桜のことも、あまり話さない方がいいかもしれない、と繁雄は思った。

「また、アユでもイワナでも持ってきてよ。イワナの骨酒でもいいわ。うちももつとお客さんに来てほしいから……」とめぐみが言った。

この頃は、捕れた魚はもつぱら山桜で売っていた。だから、プレジデントにおみやげを持ってくることはなくなっていた。

繁雄が黙っていると、峰太が「ドジョウを持ってきましようか」と言ったのだが、めぐみは両手を胸の前で大きく広げて、ドジョウはいらないというジェスチャーをした。

山桜では従業員が増え、道代、峰太、忠志のほか、サクラソウの会にいた深沢優衣が加わった。忠志は立派な青年になっていた。若くてパワーがあった。一方、繁雄や峰太の体力の衰えは隠せなかった。

「忠志君はまだ結婚しないの？ いい男になったから、誰か紹介してあげようか？」とめぐみが声をかけた。

「繁雄さんをさしおいて結婚なんてできないですよ。それに俺には心に秘めた人がいるんです」

「おっ、それは誰だ？」と繁雄が訊いた。

「秘密です」

「いいから言ってみろ。応援してやるぞ」

「だめです。人妻ですから」

「人妻だったら、私ではないわね。残念だわ」

めぐみは大げさに両手を振り上げて嘆いて見せた。

「俺は知っている。兄貴はどうしてわからないのかな」と峰太が言った。

「わからん、わからん、めぐみはわかるか？」

「道代さんかな」と言ってみて、めぐみは繁雄の表情をじっと観察した。繁雄は目をぱちぱちさせていた。

「ほら、わかりやすいわね、この人は」と言ってみてめぐみは大笑いした。

「うそ、うそ、ほんとうは萌美さんでしょう」とめぐみは言い、忠志は赤くなって黙ってしまった。

「でも、萌美さんと道代さんのどちらかは、いずれ繁雄さんと結婚するのよ。そうでしょう？」

「そ、そんなことは約束していない。忠志が好きなら、それでいい。だけど、人妻だからむずかしいだろうな。年の差もある」と繁雄は言った。

「繁雄さんにはめぐみママもいるしなあ」峰太がいたずらっぽく笑った。

「萌美さんは別居の年数を重ねて、努と離婚することを考えているから、それまではおとなしくしていなさい。その方が結ばれる可能性があるわ。努は萌美さんに男の影ができる、離婚の際に慰謝料を取れるから、注意しているはずよ」

めぐみは峰太の挑発をかわして、忠志に助言した。

山桜では、従業員が増えたこともあって、バーベキューを楽しめるコーナーをつくった。

有機栽培の野菜しか使わないこととして、峰太の畑だけでは足りずに、何軒かの農家と契約をした。

地鶏の飼育小屋は増え、その肉はバーベキューの中心メニューになった。そのほか、町の畜産農家と契約して、豚肉も入手した。鹿や猪の肉も冷凍してあるものを提供した。峰太と忠志は和食を涼さんに教わり、洋食や中華料理も勉強して、一人前の料理人になっていった。涼さんは年をとったので引退したいと言い出し、団体客の予約が入った時だけ手伝ってもらうことにした。

あそこに行けばうまいものが食べられる、という評判は広まり、山桜はインターネットでも高く評価されていた。夜の宴会が多くなったので、売り上げはさらに伸びた。

彦じいは毎日楽しそうだった。

「ここにいれば、好きなものをいくらでも食べられる。わしも年を取ったから、一人でいるのは辛くなってきた。ここにおれば、孤独死せんでもいいのう」と言って笑った。

山奥のサクラソウの生息地は、そのまま保たれていた。

小倉長谷自然研究会は、重村教授の紹介もあって、長野、埼玉、鳥取の自然保護グループと密接に交流するようになり、道代や萌美は会の代表として、交流会に参加した。今頃になって、サクラソウは町の花となり、町のホームページや観光パンフレットで、サクラソウが咲いている風景が紹介されるようになった。

堀場はかなり離れた地区の高校に異動となった。公立高校の教師は、同じ地区にずっと留まることは許されず、自宅とは離れた地区に勤務することは避けられないのだそうだ。堀場の代わりに、山口と深沢が忠志とともに、長谷の生息地を見回ってくれた。

道代に慰謝料が入ったことで、山桜に旅館をつくる話が、少し現実味を帯びてきた。繁雄と道代や萌美がいっしょになると、必ず新しい旅館の話になった。

「山桜では大人数の宴会はできないから、大きな宴会場はどうしても欲しいわね」と道代が言った。

「私もそう思う。ちゃんとした調理場も必要ね。お風呂はどうしようかな。温泉まで掘るのはとても無理だけれども、風情のある岩風呂があるといいわ」

萌美も目を輝かせて言った。

「客室はどうするんだ？」と繁雄は訊いた。

「前にも計画したように、初めは七室くらいでいいと思う。宿泊客がいなくても、宴会で儲かるようにしたらいいのよ」と、そんなことは昔から考えているという表情で萌美が答えた。

「ここに泊まる人は何を目的で来るのだろう。目ぼしい観光地は見当たらないじゃないか——」

繁雄は旅館の成功に懐疑的だった。

「それを言ったら。桜村屋も同じことでしょう。それでも、萌美さんがいた時には、大繁盛していたではないの」と道代が言った。

「あそこも、集会や宴会で使われることが多かったわね。桜村屋と比べると、ここは自然

の中にあるから、目玉は紅葉、ホテル、それにアユ釣りかしら」と萌美も答えた。

「でも、三億円かかるんだろう。高いなあ。相当借金しないと無理だな」

繁雄はため息をついた。

「でも、私たち、ある程度の蓄えはあるのよ。残りを銀行から借りることができれば、建てられる」と言う萌美には、勝算がありそうだった。

「とりあえず、この地域に人が集まるようなプランを考えてみないか。もちろん、自然破壊はだめだ。お金をかけずに誰でも楽しめるようなものがよい」

この考えに道代も萌美も同意した。

「ところで、飯井は赤字で、村中の立場が危ないらしい」

繁雄はめぐみから聞いた話をした。

「私はずっと旅館に通っているから、よくわからないけれども、もう年だから引退すればいいのよ。やることなすこと強引すぎて、町に損害をもたらしたのだから、責任を取るべきよ」萌美は厳しかった。

小倉川では外来魚はすっかり見られなくなり、コクチバスとブラウントラウトの侵入はなんとか食い止められたようだった。それでも、繁雄は定期的に川に潜って、外来魚が残っていないか確認した。

オオクチバスも、何年か産卵を抑制したのち、残った大型魚をヤスで突いて捕獲することにより、根絶することに成功した。ウチダザリガニは減少したものの、絶滅することはなかった。そのために、山桜ではウチダザリガニをフライにしたりムニエルにしたりして、提供し続けた。

山桜では外来魚だからと言う理由で、ニジマスの飼育は止め、コイも人気がないので、飼わなくなった。ドジョウやコイは古くから農村地帯では重宝されてきたが、このごろでは食べる人は減っていた。

その結果、養殖魚の提供はイワナとヤマメだけにした。アユはオトリとしては使っていたが、料理としては出すのを止めた。養殖されたアユは、天然ものに比べれば美味しくなかったからである。そのほか、人気がないメニューは止めて、新しい料理を出す努力を欠かさなかった。原材料費が高すぎる食材も使わないようにした。

新しい旅館の設計図ができ、二つの銀行から融資を受けることになった。銀行が融資してくれた裏には、道代と萌美に対する信用があったと思われる。そのうえ、萌美が勤めていた仲谷旅館も一千万円貸してくれた。萌美の力量と返済能力を疑わなかったからである。

旅館の事業計画において、宿泊客をあてにするのではなく、山桜との連携を重視し、宴会を中心に運営することも評価されたようだった。

旅館の建設は見積もりを比較した結果、竹渉産業と山洪商会が請け負うことになった。実際の建設現場では、繁雄も峰太も忠志も働き、その分コストを削減することができた。道代と萌美はそれぞれ個人的に借金したが、繁雄には借金を負わせなかった。ただ、山桜の土地や建物は担保となっていたので、負債がかさめば繁雄もすべてを失うことになる。

山桜旅館が竣工したのは、一年半後だった。

萌美も道代も喜びで満ち溢れ、若い時にも増して魅力的に見えた。しかし、山桜の規模が大きくなり、借金を背負ったことは、必ずしも繁雄が望んだことではなかった。もっとささやかにアユ小屋さえ繁栄していればよかったのではないかと思っただが、ここには多くの仲間がいる。自分のことだけではなく、彼らの幸せも考えなくてはならない。繁雄は峰太、忠志、優衣たちの顔を思い浮かべた。

竣工式には、竹渉茂美や山洪夫婦のほか、両社の社員が大勢参加した。サクラソウの会からの友人である堀場や重村も、山口や飯沼とともに集まってくれた。町や漁協の関係者も顔を見せ、繁雄にとって嬉しいことに、新聞社の山根やその他アユ小屋の常連客も駆けつけてくれた。そして、その一番後ろには彦じいとめぐみも参列した。桜の花が舞っており、すばらしい季節に旅館が完成したことは、山桜の関係者にとってこの上ない喜びだった。

萌美は勤めていた仲谷旅館を辞めて、山桜旅館のおかみとなった。退職金は借金の一部返済にあてた。居酒屋山桜はそのまま道代が取り仕切った。新しい従業員を一名雇うことになり、旅館と居酒屋の忙しさに応じて、どちらかで働いた。

旅館は一人一泊七千円から一万五千円とし、一人の釣り客にも利用しやすい料金設定にした。宴会場は五十人まで入れる大きさだった。

萌美と道代が設計しただけあって、旅館の狙いは適切だった。開館直後から、旅館山桜は宴会場を中心に盛況だった。ただ、億単位の借金を返すためには、何十年もかかる見込みだった。

旅館ができたことよって、道代と萌美は元々繁雄の家であったところから、旅館で寝泊りするようになった。二人がいた部屋には、住み込みの従業員が引っ越して来た。

初夏になって、入院していた山洪勇三が死去し、続いて勇三の妻も亡くなった。一人息

子だったために、膨大な遺産を受け継いだ直哉であったが、間もなく大きな事故が起こった。山洪商会在が請け負っていた県道の土砂崩落現場で、山が再度崩れ、何人かの従業員が巻き込まれたのである。巻き込まれた中に、様子を見に来ていた直哉がおり、直哉はすぐに搬送されたものの、病院で息を引き取った。村全体が重苦しい空気に包まれた。

この知らせは山桜にもいち早く届いたが、裕子のことを考えて、道代は告別式まで山洪を訪れなかった。告別式は盛大に行われ、裕子の二人の子供は泣いていた。

山洪商会在はかつてほどの勢いはなくなっていたが、それなりに続いていた。直哉の後を継ぐには、子供たちは幼すぎ、裕子は向いていなかった。崩落事故の影響もあり、山洪商会在を早急に立て直すことが必要となった。

繁雄はアユ客を待ちながら、「何か、慌しく過ぎていくなあ。敵だと思っていた直哉がいなくなり、村中も勢いがなくなった」とつぶやいた。

「望んだ通りになって満足か？」と彦じいが訊いた。

「何か、気が抜けたような気がする。俺は山桜や旅館のことは道代と萌美に任せて、昔のようにアユだけ売って、のんびりと生きていきたい」

「借金を返さなくてはならないのじゃろう。そんな心構えでどうするんじや」

「何でも規模が大きくなればいいというものではないだろう。借金を返すために働き続けなければならぬ、というのはどうだろう。それよりは時間を作って、釣りや自然保護に労力をかけたい」

「それなら、旅館を建てる前に、道代と萌美にそう言えばよかったじゃろう」

「旅館を持つことが二人の夢だったと言われたら、反対できなかったんだ」

「これから、いろんなことが変わっていくじゃろう。変わらないのはわしくらいだな。今から何をしたいとも思わないし、何をしてくれと言われることもないからな」

「俺は変わるのか？」

「さあ、どうかな」

そう言って、彦じいは笑った。

その翌日、裕子が山洪照会の大野とともに道代を訪ねてきた。繁雄もそれに立ち会った。それによると、裕子は山洪の家に住み続けるものの、山洪商会在にはかかわらないということだった。

しかし、裕子は山洪商会在をいずれは自分の息子に継がせたい、と考えていた。そのために、山洪商会在を解散したり、誰かに譲ったりするのは嫌だという。大野はあくまでも番頭

として山洪商会を支えたい、と考えていた。二人が相談した結果、山洪商会の次期社長として道代がもっともふさわしい、という結論に至ったらしい。

「裕子さんは何をやるの？ 遺産がいっぱいあるから、何もしないで子育てをするのかしら？」

道代は二人の提案に驚きながら、少し毒のある返事をした。実際、裕子とその子供には、この周辺の土地や屋敷、山洪商会の財産など、数十億円の遺産が入ると考えられた。

「私はプレジデントのママに戻るわ。それが向いている」

「私からもお願いします。道代さんはかつて山洪商会を仕切っていたらっしゃったではないですか。あの時は会社もうまく回っていたし、従業員の信頼も厚いのですよ。道代さんと敵対していた古参社員はもういません。山桜の方は後継の方も育っておられるようですよ。道代さんには両方を仕切っていたいていいんです。今は山洪の危機なんです。ぜひ、お願いします」と大野も頭を下げた。

「ちょっと待てよ。道代は山桜の中心だ。簡単にそっちへ寄こすわけにはいかないよ」と繁雄は声を大きくした。「しらべてみたら負債だらけということはないだろうな」

「もちろん、うちの経営状態や資産をしらべていただいでけっこうです。でも、うちは健全ですよ。大きな事業や借金をするようなことは控えていますから」と大野が言った。

繁雄と道代は思わず顔を見合わせた。

「確かに、山桜は借金を背負っていますが、計画通りに進捗しています。だからこそ、私は山桜のために全力で働きたいのです」

道代は強い口調で言った。

「そう言われると思っていました。それで、この件の解決策を用意してまいりました。お金にかかわることなので、気を悪くしないで聞いてください」と裕子は言った。

それによると、山洪商会の経営自体はぎりぎりなので、給料は多く支払えない。しかし、道代が山洪商会に戻ってくれば、契約金として、裕子の個人資産から五千万円を渡す。また、裕子の長男が成人した場合には、経営を長男に譲ることとして、そのときにさらに五千万円を道代に支払う、ということだった。

この提案に道代も繁雄も黙ってしまった。あまりに思いもよらなかったことなので、何も言うことができなかつたのだ。裕子たちは、ゆっくり検討してください、と言い残して帰っていった。

山桜ではさっそく萌美と彦じいを交えて、この件について話し合った。

「俺は反対だ。道代の気持ちを考えてみる。あの裕子ママに金で買われるなんて、あまりに馬鹿にしている。本来、山洪の財産は道代のものになるはずだったんだ。それを使って引き抜こうなんて、虫がよすぎる」と繁雄が口火を切った。

「私は道代さんの気持ちしだいだと思うけれど、やはり気が進まないわね。一億円なんて今の裕子さんからすればどうということのない金額だから、騙されることはないでしょうけれど、結局は彼女の子供のことを考えての提案でしょう。それに利用されるのは、ちよつと気に食わないわね」と言う萌美も反対のようだった。

「でも、私がこの仕事を引き受ければ、借金は大幅に減ることになるわ。山桜が将来負債にまみれてつぶれる危険は小さくなるのよ。しかも、永久に向こうで働くのではなくて、いずれ社長は長男に代わるのだから、一時的な契約でしょう。私はこの提案を受けようと思う」

繁雄も萌美も何も言えなくなった。

道代はさらに話を続けた。

「五千万円をすべて現金でもらうと、半分以上贈与税を取られてしまうでしょう。だから、私は裕子さんと交渉して、契約金の一部として、サクラソウの隠された生息地を含む山を貰おうと思うの。山林の評価額は低いから、贈与税も少なくてすむし、何よりあの聖域を守る事ができるでしょう」

道代がそこまで考えていることに、皆は驚いた。

「道代がそう言うなら、それもいいかしらんな」

彦じい沈黙を破った。

繁雄はよくわからなくなっていた。山桜の借金が少なくなれば、自分が望んでいた平穏な日々が近くなるかもしれない。道代がいない間は精一杯働き、道代が戻ってきたら、引退して静かに暮らせるだろう。

でも待てよ、道代が山洪に行ったら、俺は萌美と結ばれるのだろうか。それとも、道代は旅館に住み続けて、二人とも変わらずにここにいるのだろうか。そもそも、自分は道代と萌美のどちらが好きなのだろうか。

——いや、そんなことを妄想してはいけない。自分は山桜の今後や道代の幸せをもっと真剣に考えるべきだろう。繁雄は思い直した。

その晩、繁雄は峰太を誘ってプレジデントに行った。めぐみの意見を聞きたかったからだ。

「早速、来たわね」と言ってみぐみが迎えてくれた。

「その言い方だと、知っているな。さすがに地獄耳のめぐみだ」

繁雄は笑った。

「当然よ。私にもかかわるのだから」

「えっ、どうしておまえが関係するんだ？」

「だって、裕子さんがここに戻ったら、私は失職するかもしれないでしょう」

「そんなことはないだろう。今、このオーナーはめぐみだろう。いっしょに働けばいいじゃないか」

「いい年をしたおばさんが二人も店にいたら、客が寄り付かないわよ。ママは二人も要らないの」

「そういうものかねえ。峰太はどう思う？」

「若いピチピチした娘がいた方がいいに決まっています。めぐみさんも、プライドがあるから、ここでまた裕子さんの下で働くのは嫌でしょう。だから、めぐみさんは山桜に来たらどうですか。人手が足りないから、俺たちは大歓迎です」

「そうできたら嬉しいわ。繁雄さん、いい？」

「えっ、どうしてそうなるんだ。よくわからなくなってきた。それに道代や萌美の意見も聞かないと……」

「じゃあ、ちゃんと話してね」

「裕子と道代の契約について、めぐみはどう思うんだ？」

「まあ、いいんじゃない。裕子さんにとつては、息子の将来が一番気がかりですものね。息子を山洪商会の社長にする方法としては、これしかないかもしれない。もし、道代さん以外の第三者が社長になったら、そのまま山洪を乗っ取られてしまうかもしれないでしょう。膨大な遺産を相続したから、道代さんに悪いという気持ちも働いたかな。それに、複雑な事情が影響しているかもしれない」

「複雑な事情？」と繁雄は訊いた。

「ここだけの話よ」

めぐみは小声になった。

「裕子さんの長男は実は直哉さんの子供ではないかもしれないのよ。遺産相続が確定した後で、裕子さんがそれとなく仄めかしたの。もちろん、それが嘘ということもあるけれど……」

「血液型でわからなかったのかな」と繁雄は言った。

「裕子さんは、あれで相当したたかな人よ。そんなことは計算済みだったと思うわ」

「直哉社長と同じ血液型の男と浮気したということですか？」と峰太が訊いた。

「裕子さんは独身だったから、浮気と言えるかどうかはわからないわね。裕子さんは同じ時期に二人の男と性行為に及び、受精に成功したのが第二の男だったら、その男は裕子さんを通して、直哉社長に託卵したことになる」

「カッコウがウグイスの巣に自分の卵を産んで育てさせるようなものですか。魚だったら、ムギツクによるオヤニラミへの托卵もありますよね。自分は努力しないで、他人に子育てをさせる卑怯な戦略ですね」と峰太が言った。

「それで、第二の男って、誰なんだ？」と繁雄は訊いた。

「確定していないのだけれど、当時付き合っていた男となると、竹渉さんか村中さんだと思うわ」

「えっ——」と言って、繁雄も峰太も絶句した。

「裕子さんは権力のある人が好きなのよ。それで、もし裕子さんの長男が直哉社長の子供でないということがわかったら、彼は山洪の社長になることができないかもしれない。道代さん以外が山洪の次期社長に就任するとしたら、このゴシップを嗅ぎ付けて、利用するに決まっているわ」

「もし、この話がほんとうならば、直哉は可哀そうな奴だということになるな。複雑すぎて、俺にはもう考えられない。話題を変えよう」と繁雄は言った。

「村中はどうしている？ 何か情報はないのか？」

「長谷ドリーミイランドについては、町と飯井で責任のなすりあいをしているみたいね。客がさっぱり増えないので、負債がたまる一方だとか。私も行ってみたけれども、売店では漬物やお菓子、それに野菜を売っていたけれども、魅力はなかったわね。どこにでもあるようなものばかり。漁協がそっぽを向いてしまったから、長谷川の魚もなく、遠くから取り寄せたニジマスの燻製とアジの干物があっただけ。レストランも、そばとラーメン、あとカレーライスとか、どこにでもあるものばかりだったわ。長谷定食というのがあったけれども、山菜とニジマスのフライそれに山芋がついていて二千円。ちょっと高いわね。遊園地やフィールドアスレチックスでは、客が少なくても安全のために、従業員を配置しておかなければならない。しかし、それではコストが大きすぎて赤字になってしまう。もう、どうしようもないわ」

「村中本人はだいぶ儲けたのではないか？」

「それはわからないわね」

「さつさと村中が死ねばいいのに」

「ああいう男はしぶといものよ。今、何を考えているかわかったものではない。気をつけなさいよ。それに、村中に隠し子がいたら、萌美さんの遺産は減ってしまうわよ」

小倉長谷自然研究会では、長谷の自生地をどうするべきかが緊急の課題となっていた。

自生地は年々縮小しており、このままでは絶滅するのは明らかだった。とくに、彦じい
が守ってきた小倉の自生地の存在を知らない堀場は、会の存亡にもかかわる重大問題だと
して、皆で解決策を見つけることを提案し、山桜旅館に集まった。

「とりあえず、できるかできないかは置いておいて、環境をどう改善したらいいのかを話し合おう」と堀場が言った。

「工事の影響で砂塵を被ったことがダメージを与えたと思います」と山口が口火を切った。

「砂塵だけでなく、林を伐採し一帯がコンクリートで固められたから、土壌が乾燥しすぎている。水を撒くのも大変だし、どうしたらよいかわからないです」

優衣が困ったように言った。

「フェンスで囲われているのも感じが悪いわね。住民の人達に愛されている、という感じがしないもの」と萌美が続いた。

「サクラソウの周りの植生に変化は見られるのだろうか？」

堀場が訊いた。

「ヨシに覆われていた植生ですが、ブタクサやセイタカアワダチソウなどの外来植物が侵入しています。気がついたら引き抜いています」と山口が答えた。

「やっぱり、環境が変わっているのね」と道代が言った。

「一帯のコンクリート化と護岸改修によって、ネズミの巣がほとんどなくなってしまいました。ハナバチも減っています。周辺の植物が少なくなったことが影響しているのです」と山口が説明した。

「長谷川にも変化がある。上流に小さなダムができ、水位の増減が小規模になった。たまに増水しても、サクラソウの自生地まで影響しない。だから、自生地はどんどん乾燥し、土地も痩せていくんだ」繁雄も考えていたことを発言した。

それに対して、「だからと言って、いちいち水を撒いたり、草を抜いたりするのは、手間

がかかるだけで抜本的な解決にならないと思う」と萌美が言った。

次に飯沼が「南側に広葉樹を植えること、自生地に近いグラウンドのコンクリートを剥がすことが必要だと思います」と提案した。「それから、長谷川の流路を変えて、一部の流路が自生地の方に流れるようにするべきです」

「それは正論だけど、木を植えても育つまでに何十年もかかるよ。それから、川の流路を変えることは、法律上できないはずだ」と堀場が指摘した。

「それなら上流側の河川敷に出る湧水がサクラソウの方へ流れるようにしたらどうかしら。川の本流ではないから、いいんじゃない」と萌美が言い、この問題は今後とも検討していくことになった。

「いずれにしても、活動資金が必要ね。今年の自然保護助成金に応募してみよう。これまでの活動実績があるから、取れるかもしれない」と最後に道代が提案し、この件は道代にまかせることにした。

終わってから、繁雄は萌美を呼びとめ、村中について訊いてみた。

「村中には愛人はいなかったのか？」

「よく飲みに行っていたけれども、愛人は知らないわ」

「隠し子もない？」

「私を知る限りでは、いないと思う」

「子づくりを勧めていたくせに、子供は萌美だけなのか」

「えっ、どういうこと？ 父は男の子が欲しかったのだけれども、母の体調が優れずに、できなかったみたい」

「ところで、村中はプレジデントの裕子ママとよく出かけていたらしい。村中と裕子ママはできていたのではないか？」

「付き合っていたという話は聞いたことがないわ」

「ここだけの話だよ。裕子ママの長男が竹渉か村中の子供ではないか、という噂が秘かに流れているんだ」

「うちの父は七十過ぎよ。少し前の話としても無理でしょう」

「いや、九十七歳で受精させた男もいるんだ。七十でも大丈夫だ」

「そうかなあ」

「村中の血液型を知っているか？」

「ええ、AB型よ」

「ああ、そうなんだ。それなら、たぶんちがうな。よかった。萌美にとってもよかった」
「なんで私にとっていいのよ」

「婚外子がいると、萌美が受け取る遺産が減ってしまう恐れがあるんだよ」
「ふーん、よくそこまで考えるわね。私は繁雄さんの素材でまっすぐなところが好きだったのよ。遺産だの、他人のゴシップだのに興味を持つ繁雄さんは好きでないわ」

血なまぐさい話はさらに続いた。

それから五日後に、山桜に村中がやってきたのである。萌美と繁雄が応対した。

「なかなか立派な旅館ではないか。よく資金を集められたものだな」

「いったい、何の御用ですか」

萌美が唸るような低い声で言った。

「川乞食でも、このくらいにはなれるんですよ」

繁雄も皮肉をこめて言い返した。

「そんなに喧嘩腰にならなくてもいいだろう。これまで不快にさせる言動があったことについては謝る」

「言動だけでないでしょう。長谷の自然をめちゃくちゃにして、山桜にも圧力をかけたでしょう」

「そう、受け取ったなら悪かった。今日は母さんに頼まれて、ここに来たんだ」

「何を今さら……」

「母さんは体の調子が悪くて、もう旅館のことは一切できない。それどころか、医者からは長くないと言われている。肝臓の具合が悪いんだ。それで、自分が築いてきた桜村屋がこのままつぶれていくのは耐えられない、と言うんだ」

「それは誰のせいかしら？」

「まあ、黙って聞いてくれ。努のことも謝りたい。もっと立派な男だと思ったから、おまえと結婚させたんだ。家にごろごろしているばかりで、何もしない無能者だとは思ってもよらなかった。もし、おまえが桜村屋に戻ってきてくれるなら、努とはすぐにでも離婚させてやる」

「させてやる——とは随分な言い方ね」

「言い方が悪かったなら許してくれ。でも、おまえも努とは正式に別れたいだろう」

「萌美さんには、山桜旅館を仕切ってもらわなくてはならない。桜村屋に戻るなんて考えられない」と言って繁雄は村中を睨んだ。

村中は繁雄の方は向かずに、萌美の目をじっと見つめていた。

「おまえが桜村屋に戻ってくれたら、努を追い出し、そこで旅館を経営しながら、母さんと暮らしてほしい。俺は自分の家に留まるつもりだ。そして、おまえの借金をすべて俺が返済する。返済しても、山桜の権利は一切求めない。ただの生前贈与だと思ってくれ。桜村屋にいてくれれば、山桜と桜村屋の両方の女将をしてもかまわない。俺は何も口を出さない。頼む」

そう言って、村中は頭を畳にこすりつけた。

村中の過去の言動からすれば驚くべき提案だった。村中が飯井の社長としての地位を失いかけているからだろうか、と繁雄は思った。初めて山洪商会で会った時と比べれば、村中は老いていた。

村中が帰ったあとで、皆でこの件について協議した。

「俺は絶対反対だ。村中のことだから、何か罣があるはずだ」と繁雄は疑った。

「でも、よく考えてみると、村中さんにとって努さんはもう何の役にも立たないお荷物でしょう。政治家になる可能性はまったくないわ。離婚が成立しても何も困らないし、むしろ出て行ってもらった方がよいのではないかしら」と道代が言った。

「それでは、どうして借金を肩代わりする、と言ったんだろう」

繁雄が疑問を口にした。

「もう先がないから、遺産相続を先にするつもりなのでしょう。そう考えると、父にとつて損することは何もないわ」

「遺産がすべて萌美のものになるとは限らんじやろう。村中が遺産を萌美にはやらないと遺書に書いたらどうじゃ」と彦じいが言った。

「それでも、子供としての慰留分が受け取れるでしょう」

この問題にくわしい道代が補足した。

「生前にどこかに寄付してしまう手もあるが、村中が寄付したい相手はもうおらんかもしらんな。飯井からは追い出されそうな状況だし、ドリーミイランドに寄付するのは自分の失敗をみとめるようで嫌だろう。せめて桜村屋を残したいんじや」

「父が何かの罪で訴えられるということがあるかもしれない」

「何かの罪？」と繁雄は訊いた。

「たとえば、飯井における背任やドリーミイランドをめぐる契約違反で告訴されることが考えられるし、そのほか強引なことをしているから内部告発もあるかもしれない。いろいろ

ろなケースが考えられるわ」

「そうすると、その前に財産を身内に分けておこう、ということか」

「旅館を稼動しておく、その資産価値も高まるし、そこで萌美さんのお母さんの面倒を萌美さんに見てもらえるという打算も働いたのかもしれないわね」という道代の指摘も鋭かった。

「やはり、そこまで追い込まれているんじゃない」

「私はこの案を受けてみようと思うの」

「山桜旅館はどうなるんだ？」

繁雄は声を大きくした。

「当分は、掛け持ちでやるしかないわね。私は大女将になるわ。女将は別に必要ね。そんな体制は旅館では普通のことよ。大事なのは、お客さんが旅館を訪れたり出発したりするときに、必ず女将の一人が心をこめてご挨拶することなのよ。ただ、私は桜村屋に住んで、母の世話をすることになるわ」

「これは萌美が決めることじゃ。ほかの者がとやかく言うことではない」

彦じいが珍しくはつきりと言った。

「山桜旅館が心配だな。せつかく、新しく出発したのに……」と繁雄は小声でつぶやいた。

「何を言うか。借金がだいぶ減って、旅館で儲からなくてもやっていけるじゃろう」

「従業員の給料が払える程度に儲かればいいということか」

「私は父にもう一つ提案をするつもり。それはサクラソウの自生地のことよ。みんなが提案した環境の改善案は、運営側にもみとめてもらわなくてはならないわ。フェンスをはずし、コンクリートも剥がし、木を植えて土壌の乾燥を防ぐ。湧水を引いてきて、外来植物を撃退する。これらについて、父がまだ力を持っているうちに、やっつけてしまいたい」

この考えには、一同驚いた。萌美はやはり萌美である。村中の狡猾さを娘も引き継いでいるのだ、と繁雄は思った。翌日、萌美は村中にこの条件を突きつけ、それを村中は受け入れた。

翌日、繁雄は峰太と忠志を誘って、竿を出してみた。アユが少ないことはわかっていたが、型の良いアユを釣ってお客さんに振舞いたい、と思ったからだ。ほかに釣り客はいなかった。今年は小倉川も長谷川も天然アユが不調なので、釣り人は放流量が多い他の河川に行っているのだろう。これほど釣れない年は久しぶりだった。

三人の名人が釣っても、半日で合計二十四尾しか獲れなかった。それでも二十四人に天然アユを味わってもらうことはできる。山桜では、久しぶりに天然アユが食べられるとあって、あつという間にアユは売り切れた。

日本酒を飲みながら、繁雄は峰太と忠志に、道代や萌美のことを訊いてみた。

「おまえらは今度のことをどう思う？　山桜の今後が心配だ」

「道代さんは山洪でうまくやれると思いますよ。かつて山洪を仕切っていて、社長よりもやり手だったのですから」と峰太が言った。

「萌美さんだって、元は桜村屋の女将だったんですからね。失敗するわけはありません。だんだん景気がよくなっているのです、あのあたりに旅館は必要でしょう。お客さんは入ると思いますよ。それに、俺は萌美さんを支えるために、桜村屋に行こうと思っています。」

桜村屋の料理長を務めるつもりです」と忠志が続いた。

「えっ、おまえが桜村屋に？　そう言えば、おまえは萌美が好きだと言っていたな。あれは本気だったのか？」

「ええ、まあ……」

「そうすると、山桜の料理人は峰太だけか。また涼さんに料理長に戻ってもらおうか」

「めぐみさんが山桜に入ってくれば大丈夫ですよ」と忠志が言った。

「どうだろう。めぐみのことは道代にも萌美にも、まだ話していないんだ。何と言われるか怖くて。それから、どちらの旅館も大女将は萌美だとして、女将はどうするんだ？」

「山桜旅館の女将は優衣ちゃんがいいですよ。まだ若いけれども明るくておちゃめで、誰にも好かれるから、向いていますよ」と峰太が助言した。

アユの遡上が悪かったので、アユ小屋の売り上げはさっぱりだった。繁雄はどうしてアユの遡上が悪かったのか、県の水産試験場に訊いてみた。小倉川の河川環境は良好に保たれており、漁協では産卵場を整備し、産卵期の親魚も保全していた。

水産試験場の研究員は、隣県を含めてどこも悪かったもので、河川の環境ではなく、海の環境が悪かったのではないか、と言った。

去年の秋に、海の水温が低下したために、河川の下流部で孵化したのち海に下ったアユの稚魚が死んでしまった可能性があるという。同時に、カタクチイワシが大発生したために、海の動物プランクトンが減り、アユにとって食物が乏しかったらしい。

そう言われれば、そうかとも思ったが、ほんとうか否かよくわからない答だった。この県では、海の水産試験場は充実しているが、川や湖を担当する研究員は管理職を含めて三

名だけであった。養魚場の世話や魚病の検査を含めて、それだけの人数しかないのである。

それで、河川の水産業を守れるのか、と繁雄はいつも疑問に感じていた。さらに、そんな体制で、川から海へつながる広大な生態系について研究することなど無理だろう、と思っていた。

聞くところによると、こうした現状は、海のない県を除けば、どこでも同じようなものであり、国の研究機関でも研究者は減る一方だという。しかし、漁協の組合員は海面よりも内水面の方が多い。まったく、内水面の水産業を馬鹿にしている、俺たちの意見が反映されていないという思いが、繁雄の腹の底から湧いてきた。

川に生息するアユが少ないので、産卵するアユも減ってしまうだろう。すると、来年遡上するアユはもっと少なくなってしまうかもしれない。負のスパイラルである。それが続いて、いつになってもアユが回復しない川もあると聞いた。漁協はつづれ、アユ釣りも絶えてしまう。

一方で、わずかに残ったアユが、ライバルが少ないために大きく成長し、たくさんの卵を産むことも考えられる。魚の産卵数は雌の体重が増えると、指数関数的に多くなるからである。生まれた稚魚も海でライバルが少ないために、生き残りやすくなり、その結果、来年の春には、多くのアユが遡上することになる。

どちらのシナリオがあてはまるのかは、川によって、またアユの個体数や大きさによってちがうだろう。しかし、養魚場の中とは異なり、広大な生態系の中の出来事である。人間がどうなるのかを予想したり、何らかの操作によって望ましい結果をもたらしたりすることには限界がある。

そういうことを考えると、アユ漁に依存する山桜は、これからさびれていく恐れもあった。急速に進行する地球温暖化が、アユを滅ぼす可能性だってある。

だから自分は、道代と萌美の決断を支持し、二人を助けていかなくはない。それによって、山桜の経営は安定するからである。峰太、忠志、優衣も自分たちの仲間であり、後継者である。彼らのことも考えなければならぬ。

めぐみのことを話したところ、道代も萌美も同じことを考えていた、と言ってくれた。萌美はめぐみと昔からの知り合いだったから賛成してくれるが、道代はひよっとしたら、めぐみのことが嫌いかもしれないと思ったが、杞憂だった。道代はよほどのことがない限り、誰かを嫌うような女ではなかった。そのことを繁雄はあらためて実感した。

スナックも居酒屋も同じようなものだから、めぐみならばうまくやっていけるだろう。めぐみには、道代の代わりに旅館で寝泊りしてもらうことになった。

裕子がめぐみからプレジデントを高額で買い戻したので、めぐみにはプレジデントを買った時に支払ったよりもはるかに多くの現金が入った。一方、裕子は勇三の屋敷に引越越し、道代は山洪商會に隣接した元の家に移ることになった。

道代と萌美のいずれかが家を出たら、残った方と結婚するつもりだった繁雄にとって、まったく想定外のことが起こったのである。二人とも家を同時に出て行ったので、繁雄はどちらとも結婚することがなく、取り残されてしまった。

この何年か、繁雄は道代と萌美にいろいろなことを任せていた。彼女たちは次々に新しいことを提案し、それを実行していった。アユ小屋の改築も、山桜の新しいメニューも、彼女たちが進めていった。繁雄は以前と同じようにアユ客を相手にしていればよかった。

しかし、道代も萌美もこれからますます忙しくなる。頼りにしていた忠志は桜村屋へ行ってしまふ。これからは、自分が中心とならなければいけない。とりあえずは、めぐみと優衣を一人前にしなければならぬ。そのために、自分が一生結婚できなくてもかまわない、と繁雄は思った。

アユを釣ってくれば、すぐに売れることはわかっていたが、少ないアユを根こそぎ獲ってしまうのは嫌だった。来年にはもっと多くのアユが遡上して欲しかったからである。産卵するアユを残し、たくさんの卵を産んでもらわなければ困るのである。だから繁雄はアユを捕ることを控えた。

その結果、繁雄は溪流に行つて、ヤマメやイワナを釣ることが多くなった。小倉川や長谷川の資源を枯渇させるわけにはいかなかったため、隣接する他の漁協の管理河川にも出かけていった。

放流に依存する川ならば、捕れる魚は放流されたものであり、捕りつくしたとしても、また新たな種苗が放流されることになる。天然資源だけに依存する川のように、資源の枯渇について心配しなくてよい。

もちろん、入漁のための釣券を購入して行ったのだが、繁雄の顔はそこでも知られていた。他の釣り人よりも圧倒的に上手だったので、持って帰る魚の量も多かった。そのために、その地域の組合員に睨まれたり、皮肉を言われたりすることがあった。

「たくさん釣ったようだね」と言われるくらいはましな方であり、あからさまに舌打ちされることもあった。繁雄は、それも仕方がないと思い、何を言われても黙っていた。自分

が釣った分、ほかの釣り人が釣れなくなるのは、必然だったからだ。

魚が捕れないなら、獣を捕るしかないな、と繁雄は思った。イノシシやシカは増える一方であり、かつてに比べて山里に出没し、畑を荒らすことが増えていた。農業や林業の被害は年々増加し、猟友会への期待も増していた。

繁雄は獣を撃つ技術も、撃った獣をさばく技術も身に付けていた。高齢のために引退する先輩たちに代わって、繁雄は猟友会の若きリーダーとなっていた。狩猟シーズンは寒い時期だったので、山桜の活動に支障が出ることはなかった。

ジビエ料理はしだいに人気が出るようになった。大手のスーパーでは、冷凍された鹿肉が売られていたが、牛肉よりも高い値段がついていた。それに比べると、山桜では安い料金でジビエを楽しむことができた。

8 繁雄の結婚

めぐみが山桜にやってきた。朝陽を浴びためぐみは、プレゼントでのめぐみとちがっていた。化粧を落としためぐみは、案外きれいかもしれない、と繁雄は思った。めぐみはプレゼントでは和服を見につけていたが、今日はジーンズを履き、やる気満々だった。

「プレゼントのように、座ったまま若い子に指図するだけでは、この仕事はできないぞ。自分でどんどん動いて働かないとだめだ」

繁雄は笑いながら、めぐみに言った。

「よろしくおねがいます。社長様」

めぐみも笑って答えた。

そう言えば、めぐみは山桜に来たことがなかった。それは道代への遠慮だったのかもしれない。

初めはもの珍しそうに山桜の店内を見ていためぐみは、やがて峰太に教えられて、何処どこにあるかを把握していった。さらに、一、三日経つと、料理の作り方も覚えていった。宴会や旅館が忙しい場合に備えて、めぐみには何でもできるようになって欲しかった。道代は山桜での仕事が忙しいようで、山桜にはほとんど立ち寄りなくなった。

昼過ぎになって、萌美と忠志がやって来た。

「まだ、桜村屋に予約が入らないので暇なのよ」と萌美は言った。

「ふいに客が来たらどうするんだ？」繁雄は訊いた。

「知り合いの娘を雇って、お留守番をさせているから大丈夫よ。女将候補なんだけれど、このまま客が来なければ辞めてもらうしかないわね」

萌美は自嘲気味だった。

「いつも自信満々の萌美にしては弱気だな」

「どうも、村中の旅館ということで、町の関係者が避けているようなんです。宴会の予約も入らない」と忠志が言った。

「まだ、始まったばかりだろう。宣伝して、徐々に信頼を獲得していくんだな」

「今日はこれから道代さんとめぐみさんといっしょに、二つの旅館と山桜のメニューについて話し合うつもりなのよ。戦略会議ね。繁雄さんも聞いてちょうだい」

そこへ道代とめぐみもやって来た。

魔女の集会だな、と繁雄は思ったが、口には出さなかった。

皆は山桜の中に入り、優衣がお茶を持ってきた。

「山洪商会はどんな様子だ？」

繁雄は道代に訊いてみた。

「社長がいなくなつて、社員の動揺は大きかったようね。仕事の依頼も減っているし、辞めていく社員もいるわ。でも、負債はほとんどないし、裕子さんがバックアップしてくれるから大丈夫よ」

「ところで、二つの旅館の戦略なんだけれど、山桜旅館の方はこれまでと同様に、宴会客を中心に、釣りやレジャーのお客さんをターゲットにすればいいと思うのよ。一方、桜村屋の方は、昔とちがう戦略を考えなくてはだめだ、と思っているの」と萌美が言った。

「昔は役場の関係者が多く、高級な感じだったな」

繁雄は桜村屋の萌美に川魚を持っていった頃を思い出した。

「涼さんの料理も評判だったのよ。別に忠志がだめだというわけではないのだけれど、まだ若いから、その若さを武器にした料理を提供したいと思っている。つまり、高級感で勝負するのではなく、新しい時代に合った旅館にしたいのよ」

「よくわからないな。具体的にはどういうことなんだ？」

「まず、宿泊料金を思い切り安くしてみたい。商用のお客さんに的を当てると、ビジネスホテルと競合することになる。ビジネスホテルは朝食付きで五千円くらいでしょう。こちららは夕食も付けて、八千円程度に押さえない。そのうえ、一人のお客さんに泊まりやすいように、ビジネスパックという低料金で一人用の宿泊プランをつくるのよ。一部屋の宿泊

人数によって、料金が変わるなんてせこいことはしないで、一人でもどんどん泊まってく
ださい、というメッセージね」

「それだと、利益率が下がるわね」と道代が言った。

「誰も泊まらないより、絶対いいわよ。利益率は従業員の数で調節すればいい。桜村屋
は部屋が多いから、この戦略の方がいいと思う」

「料理の質を落とすということではないですよ」と忠志が口を挟んだ。

「原材料費がそれほど高くなくても、うまいものは出せると思います。それに、何よりの
強みは、山桜と連携しているということです。単独だと、食材を仕入れても、お客さんが
いなかったら無駄になってしまうけれども、桜村屋と山桜のどちらかにある食材は、融通
できるでしょう」

「山桜では、自分たちで獲ってくる食材を使っているでしょう。その精神は桜村屋でも大
事にしたいの。例えば、珍味セットなんか出したら評判になると思うわ」

「珍味って何だ？」と繁雄は訊いた。

「繁雄さんが獲ってくるザリガニや川虫や蜂の子なんかを少しずつ大皿に並べて出したら、
話題になるはずよ」

「あれは珍味ではなくて、ほんとうに美味しいんだ」と繁雄は少しか反発しながら言っ
た。

「鍋料理でも、変わった山菜を入れたら、全然食感がちがうと思います。それから、和風
にこだわらずに新しい料理も創ってみたい。例えば、イワナやアユのアクアパッツアなん
てどうでしょうか？」

「そんなもん食えるか」

繁雄はまた噛み付いた。

「今度食べて見てください。いいダシが出るように、アサリの代わりにウチダザリガニを
使ってくださいよ。自信作です」

「アユは確かに目玉なんだけれど、今年みたいに獲れないと困ってしまうわね。それだけ
に頼ると失敗しちゃう」と道代が言った。

「山桜旅館はどうでしょうか」

繁雄は話題を変えた。

「そうね、アユが不調だから、思ったよりお客さんが来ないわね。そう思うと借金がほと
んどなくなっってよかったわ。やはり、アユだけに頼らない長期的な戦略が必要ね」と萌美

が指摘した。

「私の力不足ですいません」

優衣が珍しくおらしく言った。

「そんなことはないわ。これから優衣ちゃんの魅力でお客さんが増えるはずよ。あまり堅くならず、昔みたいに天真爛漫に振舞ったらいいのよ」と道代が優しく言った。

「山桜旅館の戦略としては、レジャー客と宴会客をターゲットにすることは変わらないでいいと思うの。料理については、桜村屋の大衆路線とのちがいを出すという意味で、思い切り高級なものを出してもいいと考えている。こちらはスペシャルパックとして売り出すの。めったに獲れない産物をメニューに入れることも考えてみたい。自分たちで入手できるマツタケやモクズガニはもちろん、日本海のキジハタやタチウオなど、旬の魚を使ってもいいわね。地鶏や地豚も出したいわ。でも、ズワイガニ、ウナギや高級和牛は、どこでも使いそうだから止めましょう。フォアグラ、キャビア、ウニ、アワビも使いたくない。高価なものを出しただけの料理は、品がないから避けたいわ。川魚についても、ただの塩焼きは止めて、手の込んだものを出しましょう。アユやヤマメは姿寿司にしましょう。お腹の中に酢飯を詰めるのよ。問題はレジャーだけれど、釣りだけだとしよせん、お客さんが限られてしまう。ホテルや紅葉は季節が限られる。もっとほかにアウトドアを開発できないかしら」

萌美は熱を込めて語った。

「さすが、萌美さん、アイデアがいっぱいね」と言って道代が驚いた。

「長い間、夢見ていたことだから、このくらい当然よ」

「料理はよいとして、客を集める方法が問題だな。何があるかな。スキー場をつくるなんというのは金がかかるし、村中の発想だからだめだな」と繁雄が言った。

「自然を楽しむコースをつくって宣伝したらどうかしら。バードウォッチングや植物採集のコースを整備してつくるの。秋に木の実やキノコを採るのもおもしろいわ。山洪で整備を請け負ってもいいわよ」

道代が社長らしく言った。

「私は閑散期にイベントを開いたらいいと思う。農園をつくって、無農薬野菜を食べる会とか、川床で一晩中飲み明かす会とか、小倉川を下流から上流まで走って楽しむ会とか。

実際、長野県の依田川では、浅瀬を皆で駆け上がって競争するイベントが人気なのよ。オーストラリアで盛んな、藪の中を突っ走るブッシュウォーキングレースなんかもおもしろ

いわ」とめぐみが言った。

「アユが多ければ、釣り大会もしたらいいと思う。有名な釣り名人や釣具メーカーのための大会ではなくて、普通のレベルの釣り人が気軽に参加して楽しめる大会。釣れたアユはうちがもらうことにすれば、景品を出せるでしょう。例えば、大物賞のほかに、全長が二十センチに一番近いアユを釣った人に賞をあげるなんていう企画をつくれれば、誰にでも賞品をゲットするチャンスが生まれると思う」と峰太が言った。

「それなら一番高齢の釣り人には『彦じい賞』だな」と繁雄が続いた。

「彦じいが参戦して、自分でその賞を取っちゃったらまずいんじゃない？」

めぐみが笑いながら言った。

「彦じいは釣りはしないで獲物をもろうだけだから、自分で賞を取る恐れはないな」と繁雄が言い、皆笑った。

「何だか、おもしろくなってきたわね。私は楽しみでしようがない。私のお客さんに二つの旅館を宣伝するわ。私の人脈も馬鹿にしないでね」

めぐみも嬉しそうだった。

小倉長谷自然研究会でも、新しい芽が育ってきた。堀場が定年退職したものの、山口が教員となり、生息地に近い高校に勤務することになったのである。山口は生物部の顧問となり、その活動の一環として、サクラソウ自生地の復元に取り組むことになった。堀場も、長年の公務員生活から解放されて、毎日のように自生地を訪れているらしい。

自然を守る会には、五十万円の研究助成費が与えられた。町と運営会社は、自生地の周りのフェンスを町の予算で取り除くことを約束した。周囲に木を植えること、コンクリートを剥がすことも許されたが、その作業は小倉長谷自然研究会が行うことになった。

運営会社はその交換条件として、自生地の近くにサクラソウを説明する看板を立て、サクラソウを誰でも見に行けるようにすることを求めた。この点については、会の中でも賛否両論があったが、誰でも見られることによって親しまれ、保全に対する支援がえられるはずだ、という結論になった。

山口、堀場と学生たちは広葉樹を植え、外来植物を引き抜いていった。繁雄や峰太、忠志も時間があれば駆けつけて、作業を手伝った。コンクリートの引き剥がしは重機がなくてはできないので、山洪商會が低料金で請け負った。

萌美の話によると、努は桜村屋を追い出された後、実家に帰ってごろごろしているらし

い。村中はいくらかの手切れ金を渡した。それで努は相変わらず働かずに、楽をして暮らすつもりなのだろう。

彦じいは寝ていることが多くなった。山に行くことはほとんどなくなり、万年床からテレビを見ているだけの日々が続いた。

「彦じい、たまには外へ出て散歩でもしたらどうだ」と繁雄は言った。

「疲れるから、ここでいい」

「何か元気がないなあ」

「何もかもうまくいって、わしの出番はなくなったのう」

「旅館も居酒屋もこれからだ。彦じいにはもつと智恵を貸してほしい」

「あと一つだけ、重要なことが残っている」

「それは何だ？」

「おまえのことじゃ」

「えっ」

「相変わらず、自分の頭で考えられない奴だなあ。まず外堀から埋めていくか。わっはっつは」

ホテルが舞う頃になって、ようやく大勢の見物客が訪れ、旅館も居酒屋も盛況になった。

繁雄のほか、めぐみ、優衣と峰太は休む間もないほど働いた。萌美と忠志も手伝いに来て、道代すら夜間にやってきてくれた。

一日の仕事がやっと仕事が終わった時に、皆で山桜の大テーブルに集まった。

「こういう忙しい時期には、もう少し人手が必要ね。学生アルバイトを募集しましょうか」と道代が言った。

「でも、いつも忙しいわけではないだろう。暇になったときに、今日はお客さんがいないから帰れ、なんて言うことは、どこかのブラック居酒屋じゃないから、できないよ」

繁雄が反対した。

「峰太がお嫁さんをもらえばいいのよ。それで、夫婦で働けばいいじゃない。峰太ももうすぐ四十歳だし、私が世話してあげるわよ」とめぐみが言った。

「こいつは顔がドジョウみたいの不細工だから、相手が見つかるかなあ」

繁雄が本気とも冗談とも取れる口調で言った。

「それは言い過ぎよ。それに男は顔ではないわ」と萌美が言った。

「こんなによく働く人はそんなにいない」

「峰太にちゃんとした肩書きを付けてあげておきたいと思うの。立派な肩書きがあれば、女性には引き付けられるものよ」とめぐみが提案した。

「例えば、どんな？」と繁雄が訊いた。

「山桜の社長は繁雄さんだとして、峰太は専務というのはどう？」とめぐみが提案した。「峰太が専務？」と繁雄はあきれた顔をしたが、女性たちは皆、良い案だと賛成した。よく考えて見れば、居酒屋だけの頃から、経営は道代と萌美に頼っていた。利益配分も賃金も、二人が相談して決め、経理と税金の確定申告は萌美が行った。だから、繁雄は社長という身分だが、実質使用人のようなものだった。峰太が専務になったとしても、女と男の力関係に変化が生じるとは思われなかった。

しかし、山桜の土地はもともと繁雄のものであり、建物も改築を繰り返したものの、繁雄の名義になっていた。山桜旅館の方は、道代と萌美が共同所有者となっており、出資金の配分は五分五分だった。桜村屋の所有者は村中のままだった。峰太には何も無いが、将来は農園の社長になってもいい、と繁雄は思っていた。

めぐみにうながされて、繁雄と峰太はそれぞれ山桜の社長と専務ということになり、それぞれの名刺を用意した。間もなく、めぐみは三十代でバツイチの、加藤春香と言う名前の女性と峰太の見合いを決めてしまった。

山桜旅館での見合いには、めぐみと繁雄が立会った。繁雄は社長として、峰太は仕事のできる男だ、と褒めた。めぐみは、峰太は優しく子供好きで思いやりがある、と持ち上げた。峰太は照れてしまって、ほとんど何も喋れなかったが、見合いは成功した。

春香には小学生の男の子と女の子がいた。峰太はとりあえずは春香の実家に住み、旅館の横の農園、かつて飯井が騒音を引き起こした場所に新居を建てることになった。

この頃、飯井土建では、谷中による村中社長解任動議が可決され、村中は飯井を辞めることになった。この情報は萌美からもたらされ、村中は自宅に籠りきりになっているらしい。小さな町ではこれほどのゴシップは珍しいので、町の皆は、村中と桜村屋が今後どうなるのか、あれこれと詮索するようになった。

長谷の運営会社は破綻し、負債は町と飯井が負担した。そして、その土地と施設は竹涉産業が割安価格で購入した。

夏が過ぎてもアユは回復しなかった。遡上が多い年には、遅れて遡上したり、なわばりを持ってなかったりしたコアユが、八月の終わりから九月にかけて成長して、釣れるようになる。ところが、今年のように遡上が少ないと、すべての個体が速やかに成長して大きく

なる。大きくなってなわばりをつくると、友釣りで釣られてしまう。だから、アユが残っていないのである。

この状況は、小倉川に限らず、地域一帯で生じていたので、繁雄は今シーズンの友釣りをあきらめた。

その代わり、繁雄は彦じいに教えてもらった国有林で、マツタケをたくさん採ってきた。今年八月の終わりに雨が多かったので、マツタケの発育がよかった。シメジの仲間やリコボウなどの雑キノコもよく採れた。

国有林とは別に、隠されたサクラソウの自生地のある山の所有権は、裕子から道代に移っていた。繁雄たちは、その山でも雑キノコを採ってきた。

また、萌美が提案した珍味セットのために、繁雄は川の中でヘビトンボの幼虫を採集した。長さが五センチくらいある、気持ちの悪い水生昆虫であり、他の水生昆虫を捕食するために、アゴが発達している。足の数が少ないことを除くと、ムカデのようである。

しかし、江戸時代には、ヘビトンボは乾燥して粉にされた後に、赤ちゃんの夜泣きや癩の薬として用いられたことがある。強精作用があるので、串焼きにして食べられたこともある。苦いけれども、おもしろい食材だった。

スズメバチも貴重な食料だ。成虫は焼酎につけ、幼虫は生のほか、甘辛く煮て食べる。繁雄は成虫の動きから巣を見つけるのが上手かった。殺虫剤を使わずに巣を襲うのは技術を要する作業だったが、繁雄にはどうということではなかった。このほか、イナゴなどのバツタ類、マムシ、ウシガエルなどを繁雄は捕まえた。狩猟の腕も上がっており、この冬にはシカやイノシシをたくさん撃ち取ってくるつもりだった。

桜村屋は萌美と忠志の努力によって、徐々に馴染み客に利用されるようになった。村中の失脚によって、町の関係者のわだかまりもなくなったようだった。珍味セットだけでなく、忠志の料理もしだいに信頼を獲得していった。そして何よりも、ビジネスホテルと比べて高級感があり、なおかつリーズナブルな料金設定によって、商用客に繰り返し利用されるようになった。

桜村屋と山桜が連携していたので、食材は融通し合った。そのために、萌美は予約客に魚と肉、和食と洋食のどちらが好きかを訊き、できるだけ希望に沿うようにした。お客さんが出発する際には、必ず萌美は外まで見送り、記念写真を撮って、それを後日郵送した。

紅葉シーズンに入る前に、道代と繁雄は、この一帯の今後について話し合うために、竹

渉産業を訪れた。この頃には飯井の勢いは失われ、竹渉がこの地域を代表する土建会社になつていた。竹渉は裕子から山林の多くを買い取つていた。

社長は満面の笑みを浮かべて、繁雄たちを迎えてくれた。抜け目のない男だ、と繁雄は思った。地域のため、住民のため、自然との共生、環境と生物多様性を守る、などの言葉を口に出されると、けちをつける理由が見つからなかった。

「いやあ、長谷の尻拭いは大変ですよ。飯井さんの不始末を背負うことになつちやつて」と言つて、竹渉は笑つた。

「竹渉さんはあの施設をどうするつもりですか？」

道代が単刀直入に訊いた。

「それは検討中です。私どももお金をかけて引き取つたのですから、どうしたら利益が出るのか、考えているところです。もちろん、地域住民や生物多様性は守りますよ」

「いろいろ施設を造つたけれども、お客さんが集まらなかつたんですよ。あの施設は壊すのですか、それとも維持するのですか？」

「まあまあ、道代さん、そんなに結論をせかささないでくださいよ」

「サクラソウの自生地は守るということでもいいですか？」と繁雄も訊いた。

「それは言うまでもないことです。町でも保護する方針を打ち出しているのに、つぶすことなどできません」

「それでは、コンクリートを剥がす作業は予定通り進めていいですね？」

道代が念を押した。

「契約で決まっている範囲ではいいですよ。ただ、あの一帯すべてというわけにはいきません。これから、どういう事業をするのか決めていないので、その点はわかつてください」と竹渉は言つた。

「サクラソウは衰退しているようですね。あそこはもうダメかもしれませんよ。トキやコウノトリも個体数が減つたときには、もう何をしてほだめだつたではないですか。弱い生物は滅びるしかないのかもしれないですね。その点、あなたたちは立派だ。山桜と二つの旅館、それに山洪商会もまきこんで、大会社になりつつある。うちとも、もっと積極的に提携したいものですね」

「滅びるとは飯井のことですか？」

繁雄は訊いてみた。

「そんなことは言つていませんよ。私たち、土木建築産業はお互いに助け合つて繁栄する

ものです。何社もが企業体をつくってこそ、事業はうまくいくのです。下請けとも共存共栄でいかないと、そっぽを向かれますからね」

竹渉は道代を見て言った。

「長谷のサクラソウ自生地は小倉長谷自然研究会にとって、生命線なんです。あそこが減びてしまったら、私たちの会の存在意義がなくなってしまう。だから、ぜひ協力をお願いしたいのです」

道代は食い下がった。

「仰りたいことはわかりますよ。でも、サクラソウは小倉の奥にも自生しているではないですか。私たちは小倉の奥をいろいろしらべているのですよ。とても元気な小倉のサクラソウを守ったら、いいではないですか——」

「……………」

「このことは誰にも言いませんよ。そういうことより、小倉にもっとお客さんが来るように協力しませんか。とりあえず、駐車場や休憩所を整備して、それからアクティビティごとに、コースや施設を整備するんです。サクラソウを見に行くルートも売り出しましょう。そうすれば、山桜旅館の宿泊客も大幅に増えますよ」

繁雄と道代は何も言わずに竹渉を後にした。繁雄にとって、竹渉が小倉を狙っていると、思いも寄らないことだった。

二人はすぐにプレジデントを訪れた。

「あら、いらっしやい。お久しぶり」と裕子は迎えてくれた。

「ずっと家にいるよりも、店に出ている方が私には向いているわ。何か、生きているという実感があるの」

「お子さんたちはどうしているんだ？」と繁雄は訊いた。

「お手伝いさんに送り迎えしてもらっているわ。夕食も作ってもらっているから大丈夫よ」

「ところで、裕子さんに訊きたいことがあって来たの。小倉の山だけけど、どのくらい竹渉に売ってしまったの？」

「道代さんに譲った山は別にして、半分くらい売ったかしら。私が持っていたてもしょうがないので……。山の麓の一带は全部売ったわよ」

繁雄は、サクラソウの自生地の麓にまで、竹渉の手が伸びていることに、危機感を覚えた。その思いは道代も同じだった。二人は裕子に、それ以上、土地を売らないように頼んだ。裕子は小倉の将来についてビジョンを持っているわけでも、お金に困っているわけでも

もなかったので、これに同意した。とりあえず竹渉による土地の買い占めにストップをかけることができた。

「ところで、プレジデントはどうだ。うまくいっているのか？」

「めぐみには敵わないわね。持っている人脈がちがうから、売り上げは落ちちゃったわ。でもまあ、私の暇つぶしのようなものだから、これでいいのよ。あなたたちも、もつと飲みに来てね。私もいろんな情報を集めておくわ」

繁雄が帰ろうとしたら、裕子は道代だけを奥に呼んで、ひそひそ話を始めた。

道代が「まさか」と言って驚き、次に「気がつかなかったわ」と言うのが聞こえた。裕子が何の話をしたのかはわからなかった。

翌日の晩、小倉長谷自然研究会は、緊急集会を開いた。ただ、めぐみだけは裕子に呼ばれて、プレジデントに行っていた。

まず、彦じい小倉の奥の山にサクラソウの自生地があること、それを知っているのは繁雄、峰太、道代、萌美と彦じいだけであることを伝え、皆に秘密にしていたことを謝った。堀場を初めとして、山口も優衣も口を開けてポカンとしていた。

「情報を共有することも大事だが、秘密にすることも、ときには必要なんじゃない。この自生地は、わしが子供の頃からあり、人為的に造られたものではない。その頃には、長谷にも小倉にもいくつもの自生地があった。それが次々と開発されて消えていったんじゃない」

「それで、自生地の周りの山を裕子さんからもらい受けたのよ。だから、あの場所が開発されてつぶれる心配はないわ。だけど、山の麓の土地は竹渉のものになっている」と道代が説明した。

「竹渉産業は自然に優しい企業だと聞いているが」と堀場が言った。

「表向きはそう言っているけれども、土建屋は土建屋ね。儲けたいという点では同じようなものだわ。長谷の自生地についても全面的に保全するつもりはないようよ」

道代も山洪商会の社長なので、竹渉の狙いがよくわかるのだろう。

「それでは、今度、私たちを案内してほしい。それから、来年の開花期には、生態調査をすることにしよう。小倉一帯の自然を今後どのように守っていくのかも考えていかななくてはいけない」と堀場が言った。

「ところで、繁雄さんも、そろそろ身を固めたらどうかしら」

萌美が突然言い出した。

「私もそう思うわ。このまま結婚しちやいなさいよ」と道代が続いた。

「えっ、誰と結婚するんだ。萌美か？ それとも道代か？」

萌美と道代は顔を見合わせて笑った。

「こいつはほんとうに馬鹿じゃな。めぐみに決まっているじやろう」と言っただけで笑った。

「えー、めぐみか？」

「裕子ママもそう言っていたわ。めぐみさんもそれを望んでいる。もう逃げてはだめよ」萌美が強い口調で言った。

「私と道代さんはバツイチだし、繁雄さんとは結婚できないわ。そもそも私たち、仕事がいっぱいで結婚なんて考えられない。いいわね、繁雄さん」

皆がもう決まりという顔をして、繁雄を見つめた。繁雄は首を横に振ることはできなかった。めぐみは結婚を了承したらしい。

繁雄は自分の漁場の中でも、もっともお気に入りの「大アユの淵」の真横の岩に一人座って、事の成り行きを反芻した。

めぐみのことは好きであったし、めぐみには何も隠すことなく接することができた。気後れもしなかった。一方、道代や萌美には、ずっと憧れていた。二人とも、自分の手の届かないところから山桜にやって来て、家族のようになった。いつか二人のいずれかと結婚すると思っていたから、他の女には興味を覚えなかった。昔のように、めぐみと寝ることもなくなっていた。

しかし、二人は少しずつ自分から遠くなっていった、もっとも近いところにめぐみがやって来た。これは運命なのだろうか。

運命にせよ、そうでないにせよ、道代も萌美も自分とは結婚しない、と言っている。もはや、めぐみと結婚するしかないのではないか。元々、貧しくて結婚なんてできないと思っていた。それが人並みの生活ができるようになり、結婚できるとしたら、すばらしいことなのではないか。繁雄は腹をくくった。

閉園になっていた長谷ドリーミイランドでは、竹渉のもとで遊園地は取り壊され、別の施設ができるらしい。町の説明では、サクラソウの自生地あたりには変化はないらしい。長谷川は落ち着いているが、新たな工事が始まれば、また荒れて濁るだろう。

繁雄は漁協の理事となり、漁場管理を担当することになった。長谷川の漁場環境の復元は大きな課題となっていた。そのうえ、小倉川の下流部では河川改修が予定されていた。

県の説明では、古い護岸が弱くなっていて、このままでは大水が出たときに氾濫する恐

れがあるので、改修は避けられないことであつた。反対しても、住民の生命や財産の方が大事だと言われることはわかつていた。だから、工事の仕方について、繁雄たちの要望を聞いてもらうことが必要であつた。

河川改修は県の建設事務所が設計し、それを竹渉が請け負うことになった。繁雄は漁協の代表として、事務所へ行って工事計画についての説明を聞いた。

工事の時期は十二月から三月までで、百メートルにわたつて右岸側の土手をコンクリートで固めるらしい。アユが遡上していない時期であり、アユへの直接の影響は避けられる。コンクリート護岸の下部には人工的な魚の隠れ家が五メートルごとに設置されることになった。

「この隠れ家は最新式で、たいへん評判が良いものです」

竹渉の若い担当者が自慢げに言った。

「どんな魚が利用するのか、わかっているのか？」

繁雄は訊いた。

「はい、アユやウグイが利用します」と担当者は言った。

「一つの隠れ家に最高で何尾の魚が確認されたんだ？」

「えー、くわしい資料は手元ありませんが、三十尾くらいは見つかったと記憶しています」

「たった三十尾か。土のままなら何尾棲めると思う？」

「土ですか。石がないなら、隠れ家もないのではないですか？」

「馬鹿を言うな。土の岸にはネコヤナギなどの植物が育ち、その根元がえぐれて、いくらでも隠れ家ができるだろう。そこには、アユやウグイだけでなく、多種多様な魚が何百と棲みつくんだ」

「まあまあ、向井さん、そこまで厳しく言わなくてもいいのではないですか。コンクリート護岸に魚の隠れ家を設置するのは画期的なことなんですよ」と県の職員が言った。

「それでは工事の仕方についてだが、川は濁らないんだな？」

「河川工事ですから、多少は濁るのではないかと思われます」と竹渉の担当者は答えた。

「おまえのところが社長は、環境にやさしい工事をすると言っていたぞ」

「もちろん、そうですが、濁りが出るのには仕方がないです」

「濁りが出るということは、砂泥が下流に流れ、それが石の上や間にたまるということだ。石に藻が付かなくなり、水生昆虫も減り、小さな魚の隠れ家も減ってしまうんだ」

「それではどうしたらいいんですか」と県の職員が訊いた。

「川の流れを一部分変えて、工事している場所に水が当たらないようにするんだ。しかし、淵をなくしたらだめだ。広くて水深がある淵は魚の棲家であり、大水のときの避難場所だ。工事の前に、すべての淵の位置と水深を測り、工事後にそれが変わらないようにしろ。俺たちも独自に測り、写真を撮っておく。もし環境が悪化したら、まずおまえの社長に言いつけ、漁協や小倉長谷自然研究会のホームページで、ぼろくそに書くからな。新聞社にも告発してやる」

竹渉の担当者の顔が蒼ざめた。

「まあまあ、向井さん、こちらも努力しますから穏便にお願いしますよ。工事には仕様書があつて、それを大幅に変えることはできないのですよ」と県の職員は言い、この日の会合は終わった。

翌日、繁雄と彦じいは、堀場、山口、優衣を小倉の奥のサクラソウ自生地へ案内した。皆、籠を背負い、キノコ採りも兼ねることにした。

途中で多くの雑キノコを見つけた。彦じいは手際よく食べられるものだけを採っていった。繁雄もほとんどのキノコはわかったが、一部は彦じいに訊かないとわからないものがあった。あとの者たちは、ほとんど素人だったので、よく現れるリコボウ、クリタケ、アマタケだけを採っていた。

「マツタケはないの？」と優衣が訊いた。

「ここにはほとんどない」と彦じいが笑いながら答えた。

やがて、サクラソウの自生地に着したが、もちろんこの時期には花も葉も見ることはいできない。

「こんなところにサクラソウが自生しているとはわからないよ」

堀場があきれたように言った。

堀場と山口は彦じいに教えられた場所で土を掘り、サクラソウの根茎を確認した。

「しっかりと根茎だ。長谷よりもしっかりとっている」と堀場は言った。

「土の表面にフキの葉が朽ちて重なっているのがいいと思う。小川が流れていて、土の中の酸素も養分も十分にある」と言って山口も感激したようだった。

五人で昼食のおにぎりを食べた。やはり、ここはパワースポットだな、と繁雄は思った。

何か特別な力を感じるのだ。そして、その力がサクラソウを守ってきたのだ。岩や木の陰から森の妖精が顔を見せるような幻覚に襲われ、そのあとで優しい快感に包まれた。この

まま、皆でここに住み続けていたいと思ったほど、魅惑的な時間だった。

山桜では特別メニューで、キノコ蕎麦を提供した。めぐみは道代から蕎麦打ちを習い、瞬く間に上達していた。峰太夫妻は山桜が購入した土地で野菜を作っていたが、将来はもっと多くの土地を手に入れて、蕎麦畑をつくりたいと語った。

やがて紅葉シーズンがやってきた。秋になって急に気温が低下したので、今年の紅葉は鮮やかだった。秋の急激な水温低下は海のアユにとっては良くないかもしれない、と繁雄は思ったが、紅葉見物の客は多かった。

紅葉をより深く楽しむためには、どうしたらよいだろうか、と繁雄は頭をめぐらした。テレビでは、川に船を浮かべて、上流から下流にゆったりと走らせながら紅葉を楽しむ風景が映されていた。しかし、山桜のあたりの小倉川は流れが速く、カヌーならともかく、ゆっくりと紅葉を楽しむのはむずかしそうだった。

それにカヌーが流行ると、アユの季節にもカヌーをしたがる奴らが出てくるかもしれないな、と繁雄は思った。日本各地の川で、アユの釣り人と川下りのボートやカヌーとのトラブルが起きていた。

川は皆のものだから両方とも仲良く楽しんでください、というのが行政側の立場だが、ひっきりなしにボートが下るようになってくると、アユ釣りなどやっていると、ボートに巻き込まれたら、竿や仕掛けは壊されてしまうからだ。それに、そんなに騒がしくなったら、アユは釣れない。

繁雄が思いついたのは、山桜から小型のバスを出し、小倉川流域の紅葉の名所をめぐる小ツアーだった。紅葉見物のお客さんは高齢の方たちが多かった。彼らは都会から電車やバスでやって来る。駅まで迎えに行き、山桜に宿泊したのち、紅葉、寺社、温泉などを楽しむツアーがあったら人気が出るのではないかと、そして昼食は山桜で提供し、希望客にはもう一泊してもらおう。繁雄は、このプランに夢中になり、ルートについてあれやこれやと考えた。

冬になって閑散期となったので、繁雄とめぐみは桜村屋で結婚披露宴を挙げた。山桜でするより、桜村屋でやってもらった方が特別な感じがする、とめぐみが望んだためだった。それに招待客が六十人にもなったので、山桜では入りきらなかった。

媒酌人の席には、彦じいと道代が座った。彦じいは道代と夫婦役を務めることが嬉しうだった。

主賓席には、萌美、裕子、堀場、重村に加えて竹渉の姿があり、ほかに漁協の春田組合長と小倉町長も顔をそろえてくれた。めぐみの両親と弟は、「こんな立派な社長さんと結婚できて」と言って感激していた。しかし、村中の姿は最後まで見られなかった。

料理は和洋折衷で、忠志と峰太のほか、涼さんも手伝ってくれた。結婚式場の格式高い料理に慣れている招待客は、創意があつて心温まる皿の数々に驚き、褒めてくれた。これで、また客が増えるといいな、と繁雄は思った。

めぐみ側の客には名士が多かった。地元企業の社長や重役、役場の課長や部長、学校の校長など、プレジデントの常連たちが集まつてくれた。一方、繁雄側には、峰太夫妻、小倉長谷自然研究会の面々、それに漁協の仲間たちが座つた。めぐみの親戚は何人も出席したが、繁雄の親戚はいなかった。

結婚式場でのフォーマルな披露宴とは異なり、簡単な挨拶や祝辞が終わると、後は食べ放題、飲み放題になつていった。勝手に歌う者もいれば、主人公を放つておいて白熱した議論や言い争いをする者もいた。彦じいは終始にこにこしており、やがて眠り込んでしまった。

竹渉はしぶしぶ参加したというよりは、積極的に客の間を動き回り、酒を注いでいた。繁雄の披露宴はビジネスの機会でもあつたのだ。

気になつたのは、竹渉がしきりに道代と裕子に話しかけていたことだつた。道代は同業者というか、竹渉の下請け仕事をしていたので、話すことが多いのは納得できた。一方、竹渉と裕子との間に、仕事上の付き合いはないはずだ。竹渉と裕子の関係は、めぐみが言つたとおり、男女のつながりのように思われた。

「竹渉はどういう奴だ？」

繁雄はめぐみに訊いてみた。

「あの男は地元出身ではなくて、東京の不動産会社に勤めていたらしい。その後、何かの事業で儲けてから、県の東部で小さな産業廃棄物処理業を始めたんだつて。それがしだいに大きくなり、土建業にも進出し、今では飯井を凌駕しているんだから、すごいわね」

「家族はいるのか？」

「結婚していたけれども、最近離婚して、今はバツイチの独り者だつて」

「そんなことをどうして知っているんだ？」

「プレジデントでは人の噂話ばかり、聞いていたのよ。ほとんどゴシップや悪口だけだ」

「誰が竹渉の話をしていたんだ？」

「それを言ったら、私の信用がなくなるわ。秘密よ」

「裕子はそもそも直哉ではなくて、竹渉と結婚すればよかったんじゃないのか？」

「それはわからないわね。あの頃、竹渉産業はまだそれほどでもなかったし、山洪商会は今より大きかった。それに、山洪家には歴大な資産があったから、直哉さんを選んだのかもしれない。それにあの頃は、直哉さんにも竹渉さんにも正妻がいたから、裕子さんも結婚までは考えていなかったのかもしれない」

「まあいいか、と繁雄は思った。竹渉は敵にも味方にもなる男だ。これからは様子を見ながら、付き合い方を考えよう。」

春になってサクラソウが芽吹き、桜が咲き、ついでサクラソウも開花した。長谷のサクラソウに改善の兆しは見られなかったが、小倉の奥のサクラソウは美しく咲き誇っていた。心配していたアユは、思いのほか多く遡上した。これなら今年は豊漁だろう。それにしても、どうして今年、アユは回復したのだろう。もう少ししたら、水産試験場に訊きに行ってみよう、と繁雄は思った。

長谷ドリーミイランドでは、遊園地の乗り物が撤去されていった。その後の跡地には、モトクロス場やランニングコース、ドッグランなどができるらしい。レストランと売店も改装され、安価な焼肉店と中華料理店、それに手打ち蕎麦店がオープンする予定だった。

その様子を見ていたら、後ろから声をかけられた。村中だった。

「久しぶりだな」

「まだ生きていたのか？」と思わず繁雄は言った。

村中の髪は真っ白になり皺はいっそう増えていた。

「俺は簡単には死なない。ここだって開発したのは俺だ。リーマンショックに加えて、運営会社が馬鹿だったから失敗しただけのことだ、今こうして再生しようとしている」

「そのために自然を破壊したではないか」

「そういう言い方をするなら、お前だって小倉川を利用して金儲けをしているではないか。アユを殺して売りつけているのだろう」

「自然の恵みを分けてもらっているだけだ。アユは今年もたくさん遡上している。ただ、つぶすだけではないんだ」

「川乞食が結婚できてよかったな」

「……」

「でも残念だったな。萌美とは結婚できなかっただろう」

「そのために彼女を桜村屋に戻したのか？」

「それはどうかな。そんなことより、竹渉には注意することだな。あいつは俺よりもずつと汚い奴だ。笑ってにこにこして、調子のいいことばかり言って、人に好かれようとする奴ほど、汚いことを考えているものだ。おまえなんか、ママシに睨まれたカエルのようなものだ」

「おれはまだ、おまえのように飲み込まれてはいない」と言って、繁雄は村中から離れていった。

山桜に萌美、道代と堀場が集まって戦略会議が開かれた。彦じいとめぐみも同席した。

「長谷の自生地は町の保護策もあり、つぶされることはないだろう。少しずつ環境も改善されている。効果はすぐに現れるものではない。問題は小倉の自生地だ。どうやって保全していくか、戦略を考えないといけない」と繁雄が口火を切った。

「あそこはやはり、公表しないで守る方がいいと思う。人目につきにくいから、盗掘される危険は小さいのではないか」と堀場が言った。

「でも、竹渉はあそこに自生地があることを知っているのよ」と道代は先日聞いたことを説明した。

「知らないうちに竹渉につぶされる恐れもあるということね」と萌美が言った。

「そんなことをするかな。竹渉がつぶしたということがばれたら、そのイメージはぼろぼろになるだろう。すべてうまくいって、飯井を倒産寸前に追い込んでいるのに、そんなに危険なことをするだろうか」

堀場の疑問ももつともだった。

「うちに対する武器として持っているのではないかな」と繁雄は答えた。

「山の麓に駐車場をつくったり、休憩所や食事処を作ったりすることは、いつでも始めそうね。あそこは竹渉の土地だから……」と道代が言った。

「麓から少しずつ開発していき、やがてサクラソウも観光の目玉にしようと企んでいるのかもしれない」と繁雄が続いた。

「裕子さんの出方も心配ね」と萌美が言った。

「どういうこと？」とめぐみが訊いた。

「裕子さんにとつてもつとも関心があるのは、山洪商會が存続して、それを息子が継いで行くことだわ。そのためには、竹渉と良い関係が続いて、下請けの仕事をもらいことが一番でしょう」

萌美が言ったことに、道代もうなずいた。

「そうだとすると、裕子さんは竹渉とのつながりを強化したい、と考えているはずよ。今は、道代さんが山洪商会をうまく立て直しているけれど、私たちが竹渉と対立するようになつたら、どうするかしら？」

「具体的にはどういうことだ？」

繁雄は萌美に訊いた。

「残っている小倉の土地をみな竹渉に売ってしまうとか、竹渉と再婚するとか、いろいろな展開が考えられるわ」

「小倉のサクラソウを守るためには、裕子さんが所有する残りの山をすべて買ってしまうことが必要かもしれない」と堀場が言った。

「でも、それだけのお金はないわね。やっと借金が少なくなったところだから」と萌美が言った。

「私もそう思うわ。でも今後の課題として、検討していきましょう」と道代が提案して、今日の会議は終わった。

小倉川の改修は、繁雄がうるさく注文したせいもあり、大した環境悪化にはならなかった。少し気をつければいいことをしないから、川は荒れていくのだと繁雄は思った。

やがてアユの友釣りが解禁され、試し釣りの結果がよかったこともあり、大勢の釣り客で賑わった。解禁日ばかりはオトリとして、養殖アユを売らなければならなかったが、翌日からは釣れた天然アユを売ることができた。

峰太も五十尾ものアユを釣ってきたが、繁雄は一日中アユ小屋にいた。去年はあまり来てくれなかった常連さんたちとの会話を楽しみたかったからである。

アユが釣れると、山桜も旅館も盛況だった。一週間泊まり続けてアユを釣るといってお客さんもいた。去年は自分たちの賃金を払うと赤字になったが、今年は儲かると繁雄は確信した。めぐみは山桜で独自のアユ料理を出したい、と言って、フライパンで炒めたり、鍋で煮込んだりしていたが、どれも繁雄には不味かった。

繁雄は若女将の優衣にも、アユ釣りをするように薦めたが、断固として拒否された。アユタイツやウエーダーを履いて川に入るのは、ださくて嫌だと言う。代わりに、時間ができると、優衣は双眼鏡を持って鳥を見に出かけた。最近では、ヤブサメとサンコウチョウを見たときと自慢していたが、どれだけ珍しいのか、繁雄にはよくわからなかった。

解禁の頃にはアユだらけで、どこへ行ってもアユに食まれることによって石が真っ黒に

磨かれていたが、やがてアユが減るにつれて、茶色い石が増えてきた。繁雄は若い時と変わらずに、デッキブラシを持って石を磨き続けた。

この頃、彦じいは毎日アユを食べていたためか、もうアユは厭きた、と言い出した。「どんなにうまいものでも、毎日食っていたら厭きてしまう。住居も女も同じじやのう」と言うから、「それでは洞窟に戻れ、アユもやらん」と繁雄は言い返した。

「海でタイでも捕って来てくれないか。キジハタでもいい」と言うから、「カワムツやタカハヤの唐揚げを作ってやろうか。苦くて、おもしろい味をしているぞ」と言ってやった。

「カワムツは繁殖期だから、まずくて食えない。そんなことは知っている」

彦じいはわざと顔を歪めて言った。

小倉川の上流では、イワナやヤマメが減り、代わりにカワムツが増えていた。カワムツについての本に書いてあったが、カワムツはヤマメと一対一で闘うと負けてしまうが、カワムツが多いとヤマメを取り囲み、ヤマメより先に流れてくる虫を食べてしまうのだという。だから、カワムツが増えるとヤマメやイワナは減ってしまう恐れがあるらしい。

まずいといっても、たくさんいる魚、それも釣り人から嫌われている魚を利用しないのはもったいない。繁雄は、うろこを取り、頭とはらわたを除いたカワムツから背骨を抜き、フードプロセッサーに入れてミンチにした。次にそれを、山芋、生姜、んにく、唐辛子、パン粉と合わせ、塩と胡椒で味付けした後で小さめのダンゴにし、そのまわりに片栗粉をまぶしてから油で揚げてみた。繁雄は、これをスタミナダンゴと称して売り出すことにした。

試作品についての評価は分かれた。萌美と道代はうまいとは言えない、と厳しかった。一方、めぐみ、峰太、忠志は、カワムツにしてはいける、と言ってくれた。原材料費はただのようなものだから、売れば儲けものである。アユ小屋と居酒屋山桜では、一個百円として、少しずつ売り出した。

結局、この年はアユのおかげで、山桜も旅館も大幅な黒字になった。その代わり、繁雄もめぐみも道代も萌美も、冬が来る頃にはへとへとになった。来年またアユが良いとは限らないから、従業員を増やすわけにはいかなかった。しかし、今年のような好調が続けば、皆の体力が消耗するのは明らかだった。

その年末、腎臓病が悪化して、村中が死去した。長谷ドリーミイランドではまだ工事が行われていた。サクランウの自生地は、長谷でも小倉でも大きく変わることなく存続していた。

9 未来へ向かって

三年が経った。長谷ドリーミイランドでは、工事が完了し、新たに長谷スポーツランドとして再開した。景気がさらに回復しつつあり、訪れる客は多かった。モトクロスやクロスカントリーに訪れた県外の選手は桜村屋を利用した。

萌美の母も亡くなり、萌美は桜村屋とその他の資産を相続した。

山洪商会は道代の方針もあり、でしゃばらない程度に、しかし堅実に活動した。そのために、山洪商会は竹渉や飯井とも良好な関係を保ち、競合することはなかった。さらに、山洪照会の売店では、これまで考えられなかったことだが、桜村屋や山桜とのタイアップ企画が実行された。

具体的には、桜村屋や山桜を利用した客は、山洪照会の売店で割引サービスを受けられるようになった。また逆に、売店で一定金額以上購入した客は、桜村屋や山桜を安く利用することができた。

山桜では、支店を他の地域に出すことが検討された。しかし、山桜の長所は、この地域で採れる山菜や水産物を新鮮なままに提供することだった。店を増やすと、食材の調達がむずかしくなることは明らかだった。

海の近くでは、地の魚を使ったグルメ回転寿司が開店し、人気のために支店を増やしていた。ところが、人気が出るにつれて地魚の供給が追いつかず、徐々に養殖魚や冷凍魚の割合が増えて行った。

ある時、繁雄がその回転寿司に行ったら、地魚がほとんどなく、わずかにあると思ったら、そのネタは「天然ウナギ」と名付けられていた。ウナギが捕れないというニュースが流れているのに天然ウナギを回転寿司で食べられるのか、と疑問に思った繁雄が、どこで捕れたのか訊いてみると、北アメリカという答えだった。客を馬鹿にしたような店だと思っていたら、間もなく、そのチェーン店は倒産した。支店を出すことによって、サービスが低下したのである。

支店計画をあきらめた山桜では、時代に合ったサービスを提供することによって、お客さんを増やすことにした。

その一つは、外国人観光客を増やすことだった。そのために、優衣とめぐみは暇を見つけては英会話を習いに行った。そして、山桜では英語のメニューをつくり、その横に料理

の写真もつけた。さらに、道代の知り合いのアメリカ人を居酒屋と旅館に招待し、ブログで宣伝してもらうことにした。

外国人も含めて楽しんでもらうために、いくつものアクティビティを実行した。季節に応じて、農村、花、紅葉、新緑などを歩きながら散策するコースを整備した。もっと激しい運動をしたいアスリートには、山を駆けながら上り下りするトレッキングコースも設営した。

このほか、バードウォッチングや釣りについては、必要に応じてガイドをつけて楽しめるようにした。雑キノコや山菜を採るツアー、小倉川を走って駆け上るツアー、ウチダザリガニを料理して食べるツアー、狩猟に同行してジビエ料理を楽しむツアーも企画し、そのたびに山桜旅館に宿泊する外国人客は増えていった。

峰太の農園は面積を増やしていた。夫婦だけでは手が回らないので、アルバイトを雇って、無農薬野菜や蕎麦を栽培していた。農業体験をするアクティビティを始めたところ、思ったより多くの外国人が参加した。外国人は口コミやインターネットを通して、日本での実地体験を求めている。京都や東京はもう飽きたという日本へのリピーターは、田舎での生活に興味を持っていた。

峰太はドジョウのイベントを企画し、実行した。参加者はまずドジョウを捕まえる。この時点で、もつとも大きなドジョウを捕った人には大物賞が与えられた。次に、長さが五メートルの競技場が設けられ、各自が捕ったドジョウのうち、もつとも速く泳ぐドジョウを競わせた。韓国などで人気があり、日本でも一部の地域で行われているドジョウレースを行ったのである。誰でも楽しめるイベントなので、老若男女を問わず、多くの参加者が集まった。

忠志は川魚の料理コンテストを企画した。これまでにない川魚の料理法を競うイベントであり、美味しさだけでなく、料理の独創性を重視して、優勝者を決めた。

審査委員は涼さんのほか、忠志、峰太、萌美に道代だった。繁雄は川魚についての好き嫌いが激しいという理由で審査委員をはずされ、企画委員長となった。この企画には、周辺の学校から多くの応募があり、優れたものは山桜でメニューとした。

とくに、イワナやアユなどの料理だけでなく、タモロコ、アユカケ、オイカワなど、この地域に生息する川魚を料理したものには、高い得点が与えられた。

彦じいはさすがに弱ってきた。寝たきりになりがちで、外に出ることは稀になった。スタミンダングを与えても、「美味しいアユじゃのう」と言い出す始末だった。それでも、彦

じいは日向ぼっこをしながら、過去の楽しい思い出に浸っているようだった。

寝ているのかと思ったら、「マツタケを採ったぞー」とか、「サクラソウがきれいだ」と叫ぶことがあった。ある時には、「道代が好きだ！」と言ったものだから、周りの皆は驚き、ついで笑った。

そんな時に、萌美と忠志がそろって山桜にやって来た。旅館の相談かと思ったら、思いも寄らないことだった。

「私たち結婚したいんです」と萌美が言った。

繁雄が目丸くしていると、「繁雄さんとめぐみさんに媒酌人になって欲しくて、お願いに参りました」と忠志に頼まれた。

めぐみはにこにこして、「お父さんの三回忌も終わったから、籍を入れる気になったのね」と言った。

「結婚までするとは思わなかった」と繁雄は言った。

「そんなの、もう何年も前からわかっていたことでしょう。あなたはほんとうに鈍感ね」と言つて、めぐみは笑った。

「二人の年齢はずいぶん離れているけれども、いいんだな」

繁雄は念を押すように訊いた。

「そんなことは気にしません」

萌美は凜とした表情で言い、忠志は照れていた。

村中は萌美と忠志のことを知っていて、反対していたのだろうか。それとも、ただの女将と板長との関係だと思っていたのだろうか。今となってはわからない。

この知らせは皆に好意を持って迎えられる。ただ、繁雄は道代のが気になり、「道代だけ一人になっちゃったな。大丈夫か？」と訊いてみた。

道代は笑いながら、「私が好きだったのは一人だけなのよ。その人と結ばれることはないから、私は一生一人で暮らすことにしたの。だから、心配しないでちょうだい」と言った。

道代が好きだったのは自分だろうか、それとも直哉だったのか、あるいは自分が知らない第三者なのだろうか、と繁雄は自問したが、結局わからなかった。そして、このことを道代に確かめる勇氣もなかった。

繁雄はめぐみと結婚したのが正しかったのかどうか、自信が持てなくなり、大アユの淵を見ながら、この十年を反省していた。すると、若い男が下流からやって来た。

「兄ちゃん、何をしに来たんだ？」と繁雄は訊いた。釣り竿を持っていないので、釣り人

ではない。

「魚を観察しているんです。この川は水が澄んでいりし、淵も多く、すばらしいですね」
川を褒められたので、繁雄は嬉しくなった。

「観察って、どういうことだ？」

「魚の動きを見ていると心が休まるんです。ほら、あそこでカワムツが水面の虫を食べたでしょう。あいつはオスで体が大きいから、順位が高いんですよ。だから、いいところで川を流れてくる餌を食べることができるんです。でも、弱い奴は底の方で藻を食べています」

「ふーん」

「あつ、遠くでトビが舞っただけで、深いところに隠れちゃった。あいつは臆病だな」

「兄ちゃんは研究者なのか？」

「研究者の卵です。大学院で勉強しています」

「アユにも個性があるぞ」

「それは当然です」

「攻撃的な奴はすぐに釣ることができるんだ」

「それはちよつとちがいますよ。アユの一尾、一尾を別々に水槽に収容しておき、そこにアユのモデルを置いてみると、そのモデルをどのくらいつつくかで、攻撃性がわかるんです。攻撃的なアユは一分間に四十回以上つつくんですよ。でも、広い池にアユを放流してみると、攻撃的な個体がなわばりをつくるとは決まっていけない。むしろ、体が大きかったり、よく動き回ったりする個体の方が、なわばりをつくることがあるんです」

「ふーん、そんなもんかい。ウグイやオイカワも観察するのか？」

「はい、カワムツと比べると、ウグイは底近くで水生昆虫を食うことが多く、オイカワは石に付いた藻を食べることが多いです。でも、オイカワの中には、流下物を好きな個体もあり、ウグイにも水面近くで活動する個体があります。一番攻撃的なのはカワムツですね。カワムツをオトリにしたら、カワムツが釣れるかもしれませんよ」

「カワムツなんか釣らないよ。それにしても兄ちゃんはおもしろいな。この上でアユ小屋をやっているから、飯でも食っていけ」

そう言って、繁雄は若い男を山桜に連れていった。

午後二時を過ぎており、ほかに客はいなかった。

「腹が減っただろう。これを食べてみる」と言って、繁雄はスタミナダangoを勧めてやっ

た。

「これは何ですか？」

「スタミナダンゴといって、カワムツをつぶしてダンゴにしたものだ。美味くてスタミナがつくぞ」

「そんな！ カワムツが可哀想です」

「カワムツなんて、どこにでもいっぱいいる。たくさん獲っても減りはしない」

「そうではなくて、せっかく一生懸命生きているのに、それを捕まえてミンチにするのはひどい、と言っているんです」

「そうかなあ」

「カワムツには、賢い個体、せこい個体、臆病な個体、それに勇敢な個体がいるんです。それを殺してもいいんですか？ ほかの魚を攻撃して威張っている奴もいますが、皆と仲良く暮らしているカワムツもいるんです。魚の生き方は多様ですよ」

「おーい、めぐみ、変な客が来ているぞ」と繁雄はめぐみを呼んだ。

「こいつ、魚を捕って食うのは可哀想だと言うんだ」

「それはおもしろい考えね。私は支持してもいいわよ」

「よくわからないが、おまえは魚釣りや水産業を否定するつもりか？ 草しか食べないのか？」

「魚を食べることを否定するわけではありません。ただ、食べさせてもらうとか、釣らせてもらう、という謙虚な気持ちが必要なのです。お金儲けのために、必要もないのに生き物を殺して、売り物にするようなことは慎まなければなりません」

「カワムツなんかいない方がアユにとってはいいんじゃないか？ カワムツに餌を取られて、アユは成長できないんじゃないのか？」

「それは逆ですよ。カワムツやウグイはカゲロウなどの水生昆虫を好んで食べるのですが、カゲロウはアユと同じように石の上の藻を食べるんです。カワムツやウグイがいないと、水生昆虫が増えすぎてしまい、アユが食べる藻がなくなってしまうのです。実際、アユ以外の魚がいないと、アユはほとんど成長できないという研究結果が出ています」

「なるほど」と言ってみぐみは笑った。

「スタミナダンゴではなくて、ネギうどんをつくってあげましょう」

めぐみは奥へ行ってネギうどんを作り始めた。

「よくわからないが、おまえは魚についてくわしいみたいだな。それじゃあ、教えてくれ。」

アユの遡上が良かったり悪かったり、年によってちがうんだ。全然遡上して来ない年もある。それはどうしてで、またどうしたら毎年たくさんアユが遡上するようになるんだろうか？」

「それはむずかしい問題ですね。海の魚は元来変動するものなんですよ。アユは一年で死んでしまうんで、とくに変動が大きい。年によって、百倍近く異なることが報告されています」

「だから、それはどうしてだ？」

「海では環境要因自体が大きく変動します。水温、潮流、栄養塩などがアユにとってとくに重要です。それに加えて、稚アユの食べ物となる動物プランクトンが年によって大きく変動します。プランクトンの変動なんか、多くの場合、予測できないのですよ。それから、アユと同じようにプランクトンを食べる他の魚もアユの生残率に影響します。アユの捕食者も当然のこととして、アユに影響します。稚魚の生残率と水温との関係くらいは、何十年分のデータがあるでしょうが、たくさん環境や生物要因のデータはありません。最近の学説では、まったく関係がないように見える生物でも、間接的につながっていることが多いですから、貝とかフグとかヒトデなんかアユに影響するということもあるかもしれません。仮に今からデータを取るとしても、二十年くらいのデータが必要ですから、とても解析しきれません。だから、わからないのです」

「何だ、研究者だとか言って、何もわからないんじゃないか」

「わからない理由がわかるのです。そこがおじさんとのちがいです」

「何だと、生意気な！」

「はいはい、ネギうどんですよ」

めぐみがうどんを持ってきた。カワムツ男はネギうどんを貪るように食った。

「カワムツみたいに食っている」と言って繁雄は笑った。

「月九万円で暮らしているの、おごってもらうのは大歓迎です」

「ほんとうに、貧乏そうな顔をしているわね。でも、可愛い。おばさんが遊んであげようか？」

「馬鹿やろう。ここはプレジデントじゃないんだぞ。わからんのはわかったが、なにか別の突破口はないのか？ アユを増やしたいんだ」

「川の下流部でアユの産卵場を造成する試みは各地で行われていますよ。ただ、産卵場を整備してもアユが増えない事例がいっぱいあります。産卵場が足りているのに、さらに造

成するのは無駄というものです。増えない場合には、ほかの要因が大きいのでしょうか。親魚の数、海の水温、プランクトンはとくに重要です。卵期に適度な増水があると、海に栄養塩が流れてプランクトンが増えるかもしれないので、ダムから放水してもらおうのもいいかもしれません。産卵する親アユは多い方がいいと思います。でも、あまりに多いと海で餌不足になるので、最適密度があるかもしれない、と言う研究者もいます。海の水温は、日本海では高い方がいいのですが、南の方では低い方がいいと言う人もいます。地球温暖化が進めば、この辺は水温が高くなっていいかもしれません。あとは産卵期の雨乞いですかね」

「馬鹿を言うな」

「そんなことはない。おもしろいわよ」

めぐみはカワムツ男の味方をした。

「それじゃあ、思い切って何か特別なことをしてみたらどうでしょう。稚魚が海に降りた頃に栄養塩を海にまくとか、アユが出現する前にカタクチイワシやその他の魚を根こそぎ獲っちゃうとか。僕は責任取りませんけど」

「お兄ちゃん、ほんとうに頭がいいわね。単細胞のこの人とは大ちがいだわ。ときどき遊びにいらっしやい。何でも食べさせてあげる」

「ありがとうございます。生物の命の大事さをわかってもらえたら嬉しいです。それにしても、お二人は息がぴったりでお似合いの御夫婦ですね。ほんとうにうらやましいです。ここへ来るのは、原付バイクで三時間もかかるので大変ですが、また遊びに来ます」と言っ、カワムツ男は帰って行った。

「俺は魚を獲って売ることばかり考えてきた。シカもザリガニもモクズガニもヘビトンボも食い物としか考えて来なかった。それをあいつは簡単に否定しやがった。飯井や竹渉との闘いに勝つことばかり夢見てきたが、それもつまらないことだ、と言われたような気がする」

「世の中、いろんな見方があるのよ。気にしないでいいんじゃない」

竹渉はプレジデントを頻繁に訪れるようになり、裕子と以前にも増して親密になっている、とめぐみが教えてくれた。竹渉が女として裕子を好きなのか、子供の父親だから親しくしているのか、裕子の財産が目当てなのかは、めぐみでもわからないとのことだった。

竹渉の敵は誰なのか、めぐみと道代に訊いてみた。めぐみが言うには、長谷の町長は竹

渉が好きでない、と言った。理由は政治献金を長年、飯井からもらっていたからだ。道代は、県の西部を地盤とする宮間平組とは、入札で競合することが多くなっていて不仲だろう、と言った。

竹渉と対抗するためには、竹渉の敵とも交流しておく必要がある、と繁雄は思った。しかし、竹渉に対して敵対的な行動をとると、長谷と小倉のサクラソウ自生地はつぶされる危険が増大する。たとえ、県や町が保護すると言っても、夜間に盗掘されれば、簡単に絶滅してしまうからだ。繁雄は、町長や宮間平組と接触するべきか否か、迷っていた。

この三年で見ちがえるほど成長したのは、優衣だった。山桜旅館の若女将として、萌美の指導を受け、言わないことまで自分で判断してできるようになっていた。お客さんが到着すると、必ず自分で挨拶し、短い間にお客さんが何を望んでいるのかを察知した。

釣りに来たお客さんには、峰太や繁雄を呼んで、釣れる場所を訊いてあげた。ホタルや紅葉見物のお客さんには、観覧の穴場を教えてあげた。野鳥については、どこで何が見られるのかを説明した。その他、キノコや散策路などにもくわしくなり、時間の余裕がある時には自分で案内してあげた。自分たちでわからないことについては、必ず後でしらべて連絡した。かつて道代や萌美がそうであったように、優衣の評判は日増しに高まり、優衣目当ての宿泊客も増えていった。

優衣とめぐみは、二人で双眼鏡を持って出かけることが多くなった。この頃はめぐみのバードウォッチングも上達して、優衣と競い合っているようだった。

一方、めぐみも山桜でお客さんととことん飲み明かすことがあった。元々、繁雄より酒が強かったので、飲み負けることはなく、何時までもお客さんにつき合った。この点で、めぐみは道代より居酒屋に向いているように思われた。

ある晩、めぐみは酔った勢いで、繁雄にからんできた。

「私はサクラソウは好きなのよ。だけど、何でみんながサクラソウの保護にそこまで熱心になるのか、よくわからないわ。繁雄さんにとって重要なのは川のアユやイワナでしょう」

「サクラソウは希少な植物なんだ。守らないと滅びてしまう」

繁雄は当たり前だと言う口調で言った。

「でも、環境省の基準でもっと希少な植物はあるでしょう。なんでサクラソウなのかな」
めぐみは引き下がらなかった。

「それは花がとても綺麗で魅力的だからだろう」

「そうかなあ。道代さんや萌美さんが好きだからじゃない？ 彼女たちに好かれようとし

て、サクラソウを好きならふりをしているんじゃないの？」

「おまえ、やきもちをやいているのか。サクラソウはアユと同じく、山桜を基点に、みんなを結びつける原点なんだ。みんながサクラソウに惹きつけられている。それは、ここだけの話ではない。全国でサクラソウの愛好家が活動し始めているんだ」

「サクラソウは、私にとってのお酒のようなものなのね。もう理屈は言わないわ。好きにしたらいいでしょう」

最後はめぐみも納得したようだった。

小倉長谷自然研究会では、長谷と小倉、それから各自が栽培しているサクラソウの葉の一部を重村に送って、遺伝的特性をしらべてもらった。その結果、それぞれのサンプルはすべて同じ遺伝特性を持っていること、それが日本全国のサクラソウの遺伝特性から考えて、この地域に特有のものであることが明らかになった。

サクラソウについては、重村の助言を聞きながら、新しい取り組みを試していた。長谷のサクラソウ自生地は縮小することはなくなったが、かつての勢いはなかった。そこで、夏から秋にかけて、近くのヨシを刈り取って干したものを、自生地のサクラソウの根の上にかけてみた。また、小倉のサクラソウから花粉を採集して、長谷のサクラソウの柱頭に付けてみた。

小倉のサクラソウは対外的には秘密にしたままだった。そのサクラソウの根茎を、とくに組み合わせるところから一部採取して、かつてサクラソウが自生していた場所に移植した。道代や萌美が人工栽培し殖やしたサクラソウも、元々は同じ個体群だったので、移植実験に使った。ただし、小倉の自生地のサクラソウと栽培していたものは、別々の場所に移植し、混ぜることはしなかった。

全国で行われているサクラソウの移植は、ほとんどが失敗しているが、成功例もある。失敗例では、根茎はすぐにはなくならないが、殖えることはなく、数年もすると消えてしまった。

一方で、野生のサクラソウを鉢に移して管理すると、栽培方法と手入れが正しければ、サクラソウの根茎は殖えていく。

萌美と道代はサクラソウの鉢にミミズを入れて土の状態を良くするとともに、花が終わったマリーゴールドを同じ鉢に植えて共生させた。そうすることによって、土の通気性が高まり、熱帯夜の蒸れへの対策となる。

そのほか、根茎の位置が浅くなったら、盛り土をし、必要に応じて液肥を与えた。冬に

なったら、鉢を開けて根茎の状態を確認し、密度が高すぎる場合には、いくつかの鉢に分けて植え替えた。これらの方法は、彦じいさんが山形庄内地方の愛好家に教わったものである。

そこで、小倉のサクラソウを移植する際には、かつてサクラソウが自生していた場所であること、その環境が大きく変わっていないことの二点を最低条件とした。また、その場所にはヨシカフキが生えていること、野ネズミとハナバチが多いこと、小川や水田の近くであることも条件に加えた。

移植地では町の協力の下に「サクラソウ移植地」という看板を立て、定期的に見回るとともに、土の状態を観察した。必要に応じて盛り土をしたり散水したり液肥を与えたりした。つまり、栽培下と似た環境にしたのである。町には、移植したのは、彦じいたちが系統保存してきた長谷紅であると説明した。移植の結果は数年経たないとわからない。

萌美が村中の遺産を相続し、山桜も資産を蓄えていたので、無理をすればもっと多くの山林を購入することができそうだった。しかし、農園を増やす計画もあり、マイクロバスを使った遠距離のツアーも考えていた。どこに投資するのは慎重に検討することになった。

繁雄は皆を集めて言った。

「今日は山桜とサクラソウの今後について、みんなの意見を訊きたいと思い、集まってもらった。昔と比べると、飯井も山洪商会も山桜の脅威ではなくなった。しかし、その代わりに竹渉の勢力が増して、土地を買い占めている。それに対抗するためにはどうしたらいいのか、山桜とサクラソウを守るためにどうすべきか、俺にはわからなくなった」

「山桜も二つの旅館もうまく行っているから、とりあえずの損得よりも、もっと先のプランを考えるのは必要ね」と萌美が言った。

「サクラソウの山を含めて、小倉の奥をどうするのか、そのためにいくら必要なのかを考えているのだが、やることがいっぱいありすぎて、考えがまとまらないんだ」

繁雄は正直に言った。

「それで、まず萌美から桜村屋の今後について、思っていることを話してくれないか？」
「私は案外変わっていないのよ。優衣ちゃんが独り立ちしてくれたから、山桜旅館の方はほとんど任せていて、桜村屋の女将だけをやっている。昔と同じでしょう。ただ、桜村屋は完全に私たちのものになり、これから何をするかを、すべて私たちが決めることができる。それで何をしたいのかと問われたら、桜村屋を起点として、あの地域を活性化し、自然を守っていききたいと答えるわ。やはり父が長谷で犯した罪を、私は償っていかないとい

けないと思うの。私は父の娘であり、父の資産を受け継いだので、長谷の人達には、恨まれているでしょう。そのために、新しい事業を始めたり、施設や土地を買ったりするのはなく、なにかもつと皆の心が豊かになることをしてみたいわ」

「道代はどうだ？」

「私も変わっていないといえば、萌美さんと同じかもしれないわね。山洪にいて、結婚していた時にも、今の仕事をしていたものね。それで、山洪の仕事は一時的なものという契約なのだけど、この頃、ちょっと雲行きが変わってきた気がする。裕子さんが、このままずっと社長をしてくれないか、と打診してきたのよ。私は裕子さんは竹渉と再婚すると思う。そうなる、もう山洪商会なんて下請け会社はどうでもよいのかもしれないわね。それより、息子を竹渉の後継者として育て、必要なら山洪を吸収してしまえばいいものね。ただ、そういうことを考えると、私はなおさら山洪にいたくない。早く山洪に戻って、旅館の大女将になって、ゆつくりしたいわ」

「実は私も、すっかり落ち目になった飯井から社長にならないかと誘われたのよ。でも、断った。道代さんが手腕を発揮しているから、私も役に立つのではないか、と思われたのかもしれないけれど、何か嫌らしいわよね」

「それでは、二人とも旅館の大女将になって、どっちの旅館が大きくなるのか競うんだな。昔からライバルみたいなものだったからな」と繁雄が言ったら、道代も萌美も首を大きく横にふって繁雄を睨んだ。

「すぐに勝ち負けがどうだとか、勢力がどうだとか言い出すのが、繁雄さんの悪いところね」と萌美が言った。

「峰太はどう思う？」と繁雄は訊いた。

「俺は山桜が今のまま続いて、農園でいい野菜が採ればいいです」

「忠志は萌美の意見に異論はないのか？」

「もちろん、ないです。新しい桜村屋がやっと軌道に乗って、信頼されるようになったところです。旅館を大きくしたり、旅館以外の事業を始めたりすることも将来あるかもしれませんが、今はそこまで考えられません」

「どうも、男どもは元気がないな。夢が小さい。このままでは、現状維持で終わってしまうぞ」と繁雄は言った。

「繁雄さんは昔はアユ小屋だけやっていればよい、と言っていたのに、いつの間にか村中さんや竹渉さんをライバル視し、勝とうとしてきた。山をすべて買うというのも、よく考

えると無理な話だわ。それよりも、自分たちでできること、借金しないでできることを地道にやっけていきましょうよ」と道代が言った。

繁雄は道代に指摘されて、村中やカワムツ男が言ったことを思い出した。自然保護と言いながら、繁雄は川や山がもたらす恵みを食べてきた。自然を手つかずのままに維持するのではなく、利用できるものは利用してきたのである。それは、山を開発して観光に役立てようとする飯井や竹渉と同じではなからうか。いや、繁雄は自然には十分留意し、資源が枯渇しないように努めてきたはずだ。しかし、この理屈は竹渉が主張していることとちがわない。自然に十分配慮したうえで、人間に利用しやすいように手を入れて、自然を楽しむという点では、山桜と竹渉は協調してもよいのではないか。

そのとき、黙って聞いていた彦じいがおもむろに発言した。

「わしも長くないから、完全にぼけてしまわぬうちに、言っておきたいことがある。黙って聞いてくれ。いいか、山桜のいいところは人のつながりじゃ。おまえらが借金や利益をめぐって争うのは見たくない。そんなことより、今やるべきことは、こうやって築いてきたおまえらの城を、より強く、後世に伝えていくことじゃ。居酒屋山桜が本丸だとすれば、山桜旅館は二の丸じゃ。桜村屋は出城で、山洪商会や仲谷旅館とも同盟関係を結んでいる。わしらを小倉川が守っており、それを小倉の山が包んでくれている。サクラソウについては皆努力しているじゃろう。それでいいんじゃない。自生地はつぶされるかもしれないが、その時には栽培しているものから、再生するんじゃない。決してあきらめてはいかん。わしらの活動が、地域の人たちに信頼され愛されることによって、どんな敵が攻めてきても城が守られるようにするんじゃない。そうなれば、怖いものは何もない」

「後世に伝えるか……」と繁雄はつぶやいた。

「萌美と忠志、繁雄とめぐみは早く子供を作れ。もう年だからできないかもしれないけど、努力してみるんじゃない。優衣は、山口と付き合っているんじゃない。早く結婚せい。それから道代じゃ」

「えっ、私は関係ないでしょう」

「おまえもあきらめないで、男を作れ。たとえば、裕子から竹渉を奪ってもいいんじゃない」「そんな無茶な……。自分だって独身だったのに」と道代は反発した。

「道代と萌美はこれまでよくがんばったな。おまえたちの努力と忍耐と賢さがあつたからこそ、今のわしたちがあるんじゃない。これからも創意と工夫を重ねて旅館と居酒屋を盛り上げてくれ」

「私はどうしたらいいの？」とめぐみが訊いた。

「おまえは、この城の住人が何かの原因で仲たがいたり失敗したりしそうになったら、それを防ぐんじや。おまえの明るさは、いつか大きな役割を果たすじやろう。ともかく明るく笑っている」

「わかったわ。何だか、遺言のようね」とめぐみは言い、皆笑った。笑った後で、彦じいは泣いていた。

「でもな、子供ができなかったら、それはそれでいいんじゃない。自分たちの旅館や居酒屋を、絶対に自分の子供に継がせなければならない、なんて考える必要はない。わしだって子はおらんが、おまえたちみんながわしの子だと思っている。我々は仲間なんだから、互いに助け合い、みんなで次の世代に受け継いでいけばいいんじゃない。そのために決して無理をしてはいかん。わしらはもう十分大きくなったんじゃない」

そう言うて彦じいはさらに激しく泣いた。それにつられて、道代も、萌美も、めぐみも、優衣も泣いた。繁雄と峰太、忠志は必死でこらえていたが、やがて涙がこぼれてきた。悲しいわけでもなく、嬉しいわけでもなく、悔しいわけでもなく、怒ったわけでもなかった。それは川の城を固め、将来に向かって発展させる涙だった。

了

本書の背景、登場人物は実在するものではありません。

本書を執筆するに当たり、以下の文献を参考にさせていただきました。サクラソウに情熱をかける著者の方々に深く敬意を表します。

出版物

- 1 鷺谷いづみ『サクラソウの目―繁殖と保全の生態学』第二版（地人書館）

ウェブサイト

- 2 山原茂『日本の桜草と美術』(blog.livedoor.jp/yamaharanookina)
- 3 富樫力『庄内の日本桜草栽培日誌』(nihonsakurasou.n-da.jp)